

325

239



複写



始



2-10-4

於日本に
けるに
公教會の復活
前篇

の西洋全史等を参考したり、或は編者自ら古老を訪ひ、古文書を漁り、遺跡を尋ねたりして、手に入つた材料を加味したものである。

本書の出版に當り、長崎史に造詣深き福田忠昭氏が其秘藏せる古文書を快く貸與せられた外、史料の蒐集、行文の訂正、出版費の周旋等に就き、一方ならぬ援助を與へられた方々が實に尠くはない。茲に附記して感謝の意を表する。

終りに本書は、編者の多用なりしと、出版期日に餘裕が無かつたとの爲に、植字の誤が頗る多い。記事中にも思はぬ誤謬が無きにしも限るまい。粗漏の罪は陳謝するより外はない。讀者幸に指摘正誤の勞を惜み給ふ勿れ。

大正四年一月八日

編者識す

目次

第一章	徳川幕府の禁教	一、日本公教會の盛運。二、禁教の原因。三、禁教手段の殘虐。四、宗門寺と切支丹訴人の制札。五、轉證文。六、切支丹離族改。……………一
第二章	宣教師始めて琉球に入る	一、歐米公教信者の熱烈なる祈禱。二、フォルカド靈父の琉球行。三、不思議な十字架。四、フォルカド師那覇に滞在を許可さる。……………二
第三章	琉球に於ける宣教師	一、聖現寺の四人。二、フォルカド師の志成らず。……………三
第四章	最初の日本教皇代理	一、佛艦來る。二、フォルカド師長崎を視く。……………三
第五章	宣教師琉球に苦む	一、琉球人約束を履行せず。二、傳道の望絶ゆ。……………四
第六章	アドネ師骨を琉球に埋む	一、アドネ師病む。二、アドネ師終に起らず。……………六
第七章	宣教師香港に足を駐む	一、日本入國の冒險的計畫。二、新計畫の頓挫。三、司教空し。……………七
第八章	神奈川條約と三度目の琉球行	一、マオン師途方に暮れる。二、神奈川條約。三、宣教師三たび琉球に入る。四、島人終に屈す。五、ヒャレ師の長崎行。……………八
第九章	琉球に於ける宣教師の惡戰苦闘	一、宣教師那覇の松尾に移る。二、新信者フランシスコ。……………一〇〇

目次

第十章 日本の開港と宣教師の入國 一、安政の假條約。二、シラレ師日本の教皇代理となる。三、宣教師の日本に入る。四、シラレ師の活動振。五、メルメ師函館に乗り込む。 一〇八

第十一章 横濱天主堂の建築 一、メルメ師の活動。二、横濱天主堂の建築。三、横濱天主堂の完成。 一一九

第十二章 琉球に於る最後の四年間 一、ロウレ師の琉球に到る。二、宣教師の琉球に到る。三、琉球の宣教師の活動。四、琉球の宣教師の没落。 一二九

第十三章 宣教師長崎に天主堂を建つ 一、ロウレ師長崎に到る。二、宣教師長崎に天主堂を建つ。三、宣教師長崎の没落。 一四〇

第十四章 信者の後裔自ら名り出づ 一、三月十七日の出来事。二、発見後の二週間。三、信者の後裔自ら名り出づ。四、水方と會見す。 一五〇

第十五章 浦上に於ける昔の切支丹 一、浦上切支丹の由来。二、信者團の組織。三、踏繪と葬式。 一七二

第十六章 浦上崩れ(其一) 一、浦上崩れ。二、浦上崩れ。三、浦上崩れ。 一八九

第十七章 浦上崩れ(其二) 一、吉藏の家系。二、信仰の由来。三、團体の組織。四、祝祭日。五、葬式。六、吉藏の捕縛。七、龍平の家系と其信仰。八、龍平の白狀。九、信者の所藏せる聖像。 二〇六

第十八章 九州各地方に於ける昔の切支丹 一、生月島の切支丹。二、外海地方の切支丹。三、バスチアンの傳説。四、木場の切支丹。 二二五

第十九章 信者の後裔續々と名告り出づ 一、他村の信者出る。二、神ノ島の信者宣教師の不犯を問ひ糺す。三、信者部落の概観。四、長崎奉行天主堂の參觀を熱す。五、プチジャン師出陣に赴く。六、宣教師の秘密傳道。 二四〇

第二十章 各地方の信者の狀況 一、傳道士の熱心なる運動。二、各部落の洗禮。三、婚姻と埋葬問題。四、ドミニコ松次郎。五、異初の拉丁學生。六、無元罪の御孕の間。 二六〇

第二十一章 信者の熱心なる教理研究 一、公教要理の翻譯。二、初聖林。三、浦上に於ける教理研究。四、浦上信者の熱心。五、他部落の信者の熱心。 二七五

第二十二章 プチジャン師日本の教皇代理に選任せらる 一、ロウレ師再び長崎に來る。二、プチジャン師日本教皇代理を命ぜらる。三、浦上の信者庄屋に頭を命ぜらる。四、プチジャン師長崎に來る。 二九〇

第二十三章 宣教師各地に活動す 一、浦上に於けるローカニエ師の活動。二、他方面に於ける活動。三、クセン師五島の信者を訪問す。 三〇七

第二十四章 浦上の信者傳道に奔走す 一、今村の切支丹。二、浦上信者の探險。三、外海方面の傳道。四、廣大なる傳道場。 三二二

第二十五章 風か雨か 一、埋葬事件。二、信者の總代奉行所に召喚せらる。三、浦上の信者等連名辯を庄屋に差出す。四、奉行假りに自葬を許す。五、クセン師再び五島へ到る。六、浦上信者公然と其信仰を發表す。七、日本の聖母マリア。 三三六

附録

一 浦上外海地方の信者間に傳はつて居た祈禱文 一

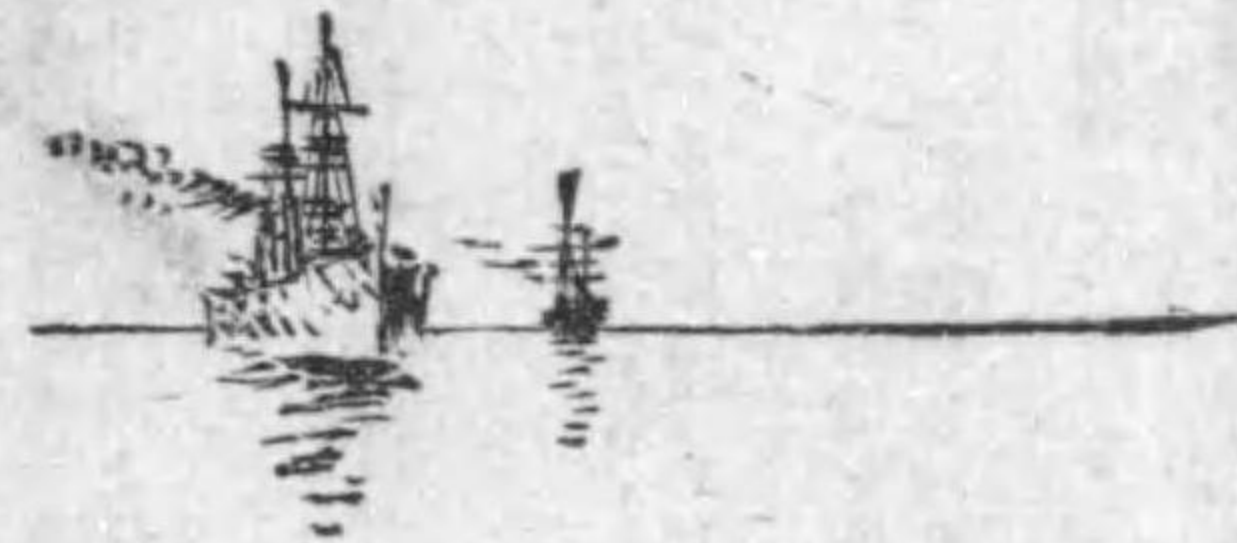
二 日線 一〇

目次

108-128 20



眠永御のコスシンラフ聖



目次

三 コンチリサンの略……………四

生月の信者間に傳はつて來た祈禱文……………六

於ける 公教會の復活 前篇

第一章 徳川幕府の禁教

一 日本公教會の盛運 稀代の聖師フランシスコザベリオに依つて種蒔かれ、幾多の熱心なる宣教師の汗と血とを以て培はれた日本公教會は、宣教に着手してから僅か五六十年も経つか経たぬ間に、早や鬱蒼たる大木となり、大友、有馬、大村、高山、小西、黒田等の大小名を始め、百萬に近い信者が其樹蔭に集つて、靜に神の光榮を歌ふ程の勢となつた。今ブルウ(Brou)氏の調査によつて見れば、聖フランシスコが鹿兒島に上陸して、日本公教會の基礎を置いた千五百四十九年(天文十八年)から、その滅亡に瀕せし千六百三十年(寛永十七年)に至る間に、洗禮を授かつた大人の數は左の如し。

千五百四十九年から
千五百九十八年に至る
千五百九十八年から
千六百十四年に至る

五十萬人
十五萬二千九百人

日本公教會の盛運

禁教の原因

千六百十四年から
千六百三十年に至る

二 萬五千人

二

總計六十七萬七千九百人

之に生兒を加へたら、此の八十二年間に洗禮を受けた信者の總數は二百萬にも上るべく千六百五年(慶長)には早や七十五萬に達したと、レオン・バゼスは其基督教史に記して居るから、極盛(千六百十)の頃には一時に百萬近くの信者が居たと曰うても、過言ではあるまい。

二 禁教の原因

聖フランシスコの渡來せられた頃の我國は、足利氏の威權が全く地に墜ちると共に、英雄豪傑は雲の如く起り、各一方に割據して獨立國の姿を呈せる戰國時代であつたから、キリスト教を信奉しようとする者も國主の意の儘で、誰一人之に隊を容れるものは居なかつたのである。然るに織田信長、豊臣秀吉、徳川家康の三傑が相繼で中央に崛起し、天下を一統するに及んで、其一擧一笑は直に領國の興廢存亡に關するので、國主と雖も無暗に自由行動が取れなくなつて來た。そして信長は佛僧の跳梁を惡むの餘り、始終一貫キリスト教を庇護して渝らなかつたが、秀吉に至つて初めて迫

害の火蓋を切り、天正十五年(千五百八)教會堂の破壊、宣教師の追放を命じ、越えて十年(慶長二年千五百九十七年)の後には、宣教師以下二十六名を長崎に磔殺した。然し日本公教會が猛烈を恐るべき迫害の暴風雨に吹き捲られ、其枝は切れ、其幹は折れて、見るさへ痛ましき状態に成り果てたのは、慶長十八年の暮(洋暦の千六百)に徳川家康が「切支丹宗門禁制觸書」を發した後の事であつた。今ま事の此に至つた原因を尋ぬるに、主として

一、佛僧の反對

二、神道主義とキリスト教主義との衝突

三、外商の讒訴

この三點に歸すべく、其他は多少の影響を及せる副因たるに過ぎないのである。

1 佛僧の反對

佛僧等は宣教の初から自家勢力の衰亡を憂へて躍起となり、外國の神を尊信するは神佛の怒を招く所以であると呼號して島津貴久の心を動し、聖フランシスコを放逐せしめたを手初とし、平戸に、山口に、京都に、豊後に、大村に、愚民を煽動して暴動を起さしめるやら、宣教師は小兒を屠つて其肉を喰ふだの、我國を狙つて居る外

國人の手先だの、と有ゆる根なし事を拵へて、爲政者の腦裡に疑心暗鬼を生せしめるや、正面から堂々と論戦しようとはせずに、裏面に廻つて狐鼠々々と妨害運動を試みたのである。目的の爲には手段を選まず、口には殊勝らしく「不安語戒」を唱へながら、如何な讒言妄語でも辭せざるは彼徒の平生で、開明の今日ですら「切支丹は生膽を取る」など、實しやかに言立てる位だから、當時いか許り其毒舌を弄したかは察するに餘あるであらう。

2 神道主義とキリスト主義との衝突

然し佛僧の反對は、單に宗教上の勢力争ひから起つたもので、是ばかりならば何うにか切り抜けることが出来たかも知れぬが、神道主義との衝突までが加つて来たものだから、到頭あの始末に立至つたのである。固より當時は神佛混淆で、二者の間に劃然たる區別が立て居た譯ではないが、然し祭祀は朝廷の最大要務で、神祇官は天下の大政を掌る太政官の上に位し、天皇を以て現神とせる古來の神道主義は、依然として國民の腦裡を支配して居たのである。随つて唯一絶對の神を唱道するキリスト教が、之と衝突を免れざるは勢の然らしめる所で、秀吉の追放令に

日本者神國なる所、キリシタン國より邪法を授け候儀、甚だ以て然るべからざる事。とあり、家康の禁制觸書にも

日本は神國佛國にして、神を尊び佛を敬ひ仁義の道を專にし、善惡の法を匡す……彼伴天連の徒黨、皆な件の政令に反き、神道を嫌疑し、正法を誹謗し、義を破り善を損ふ……實に神敵佛敵なり、急に禁せざれば後世必ず國家の患あらん云々

とあるのを以ても明白である。殊に秀吉が印度副王の使節ワリニヤニ宣教師からの書翰を受取つた時、左右を顧て謂つた言の如きは、最も率直に個中の消息を洩したものであらう。

余は居常ヨウロッパ教師の德行にして、博學なるに於て大に尊敬せり。然れども教師は日本の神を尊敬するに反戻したる法教を説くを以て、我國より放逐せり、其法教は外國に於ては善良なりと雖も、我國に於ては善となすべからず。(日本西教史上)と、而して此問題は、今猶ほ未解決の儘残つて居るので、爲にキリスト教徒は、往々帝國憲法の保證せる信教の自由までも脅されること、珍しからぬのである。

3 外商の横訴 宣教師は邪法を弘めて日本國を奪はんとするものである、キリスト教徒は不忠不義の賣國奴である等と、僧侶これを内に唱へ、愚民これを外に傳へて、教徒の施す仁恵までが國を買ふの價と言觸らされつゝある所に、慶長元年(千五百九)西班牙の商船サンフェリプ(San Felipe)號が土佐の浦戸に漂流ついた。秀吉之を聞くや早速増田長盛を遣し無法にも其貨物を沒收させようとした。西班牙と葡萄牙とは共に信仰を同うせる兄弟國ではあつたが、商業上の利害關係からして、甚く相反目して居た際であつたから、サンフェリプ號の水夫等も、今度の事が葡萄牙人の使喚から起つたものと疑ひ、其ころ日本に幅を利かして居たポルトガルの商人、宣教師等を陥れて、復讐の快を貪らんとでも思つたものであらう、長盛に向つて西班牙の廣大なる領土は、宣教師を爪牙に使つて征服したのだ、と左も實らしく言ひ放つた。是が當時にあつては二十六聖殉教者の捕はれる動機となり、今日までも我公教が侵略主義の濡衣を着せられる原因となつたのである。

なるほど西班牙、葡萄牙が、當時廣大なる版圖を領有して居たのは事實である。然し此

等の領土は大低國家の體裁を備へざる野蠻未開の地ばかりで、夫れすら宣教師を手先に廻して占領したのではなく、却つて宣教師が占領地に這入つて、福音を宣べたのみであつた。固より侵略主義は何地に對してでも餘り譽めたものではないが、此の慾の世界には到底跡を絶つこと出来ざるを如何せんやだ。二十世紀の今日、而も正義人道を標榜せる邦國までが、機會さへあれば、ドシ／＼他國を侵略して居るではないか。西班牙、葡萄牙の侵略主義が癢に障つてならないと云ふ人は、少く思を潜めて、我國の和寇が海賊を働いて明の沿岸を荒し廻つたり、秀吉が無名の師を起して、朝鮮を蹂躪したりした事實に、辯解の餘地があるか否かを三考せられよ。

家康の時に至つて、新教派に屬せる和蘭人、英吉利人が續々とやつて来て、其商敵たる西班牙、葡萄牙人等を蹴落して、自分等ばかりで日本貿易の利益を壟斷せんものと、巧に家康に取入つて其信用を得、頻にサンフェリプ號の水夫の言を反覆して、家康の胸に危懼の念を煽り立てた。嘗に宣教師を以て侵略者の爪牙の如く言ひ黒めるのみか、世界地圖を開いて、キリスト教國の君主までが彼等を危険視して、國外に放逐したと放

言して、其國々を家康に指示し、自ら十字架を折り、聖母の畫像を踏んでキリスト教徒に非るを表し、甚しきに至つては、長崎の信者で葡萄牙商館長と自稱する母呂某が葡萄牙王に呈して、日本侵略を勧め、一味徒黨たる諸侯武士の姓名までも列記した密書を偽造し、喜望峰近海に於て、葡萄牙船を捕獲した際に之を得たと稱して幕府に奉る等、あらゆる悪辣手段を弄して、宣教師を陥れ、西班牙、葡萄牙人を驅逐せんと計つたのである。この密書事件は「和蘭の御忠節」と我國の史乘には大書、特書して、慶長十六年頃の出來事の様に録してあるが、シャルウオア(Charlevoix)の日本史に由ると、實は千六百三十七年(寛永十四年島原)頃の事である。

- 一、當時諸侯中にキリスト教信者と云ふは一人もなく、島原の亂徒は野武士と土百姓との集合に過なかつたこと。
- 二、其頃長崎に於ける葡萄牙の商館長は、フランシスコデカステルブランコ(Francisco de Castel Blanco)で、母呂云ふ日本人ではなかつたこと。
- 三、最初に此事を書き傳へた記者すら、之を和蘭の商館長フランシスコカロン

(Francisco Caron)の仕込める讒訴として居る、尤も夫れは同館長が後で和蘭を去つて、佛蘭西政府に仕へたのを悪んで、言ひ立てたものださうではあるが、兎に角何人かの虚構たることは、その當時から知れ渡つて居たに相違ない事。

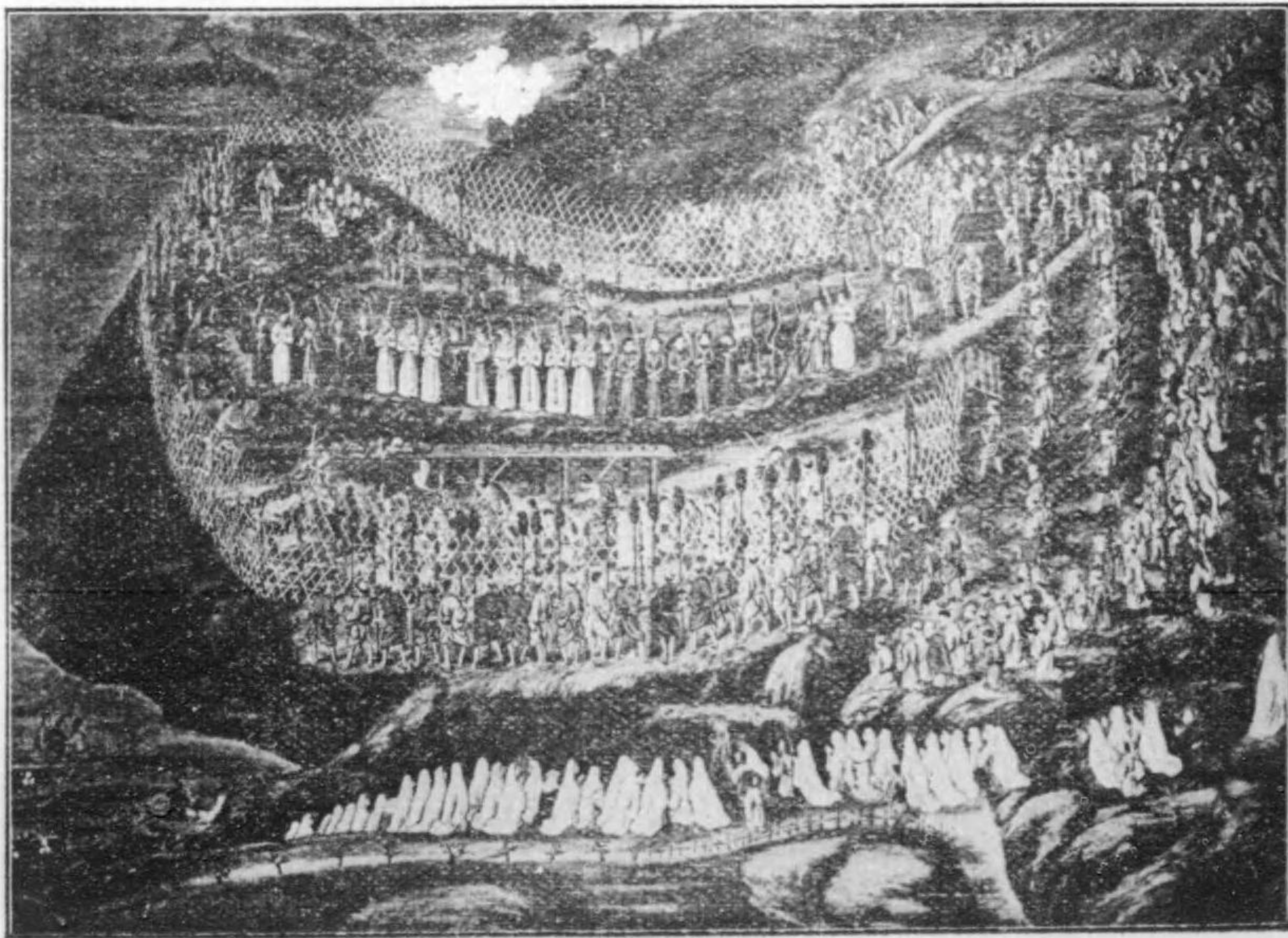
四、リース(Ries)博士の如きも、一顧の價値もなき偽造文書と断定して居る事。等を以て見ても、全く事實無根たることは明白である。十字架を踏みにする程の罪惡を敢てする彼等には、文書の偽造くらゐは、朝飯前の仕事なのに、國人の夫れを悟らすして、「和蘭の御忠節」など、難有がつて、何時までも馬鹿を見て居るかと思へば、情ない様な感がしてならぬ。

三、禁教手段の殘虐 徳川幕府は是等の讒言毒舌に欺かれ、キリスト教徒を以て國家の獨立を危くする逆賊と爲し、宣教師を筆頭に、幾千の信者を引捕へて之を責殺した。而も其の殺し方の殘酷なこと、言つたら、斬首、磔殺、火刑の如きすら餘りに手輕るしとして首以上を殘して全身を土中に埋め、竹鋸を以て五日も十日も掛つて其首を引くやら、溫泉嶽に連行て、體中に熱湯を徐々と澆ぎかけるやら、口に漏斗を差して、上から溢

札制の人訴丹支切



(しせ教殉て於に崎長日十月九年二十二百六千)



者教殉の名二十五ト以ラノビス

禁教手段の殘虐 宗門寺と切支丹訴人の制札

れ出るまで水を注ぎ込んだ上、仰向に臥して腹上に板を載せ、強力い男が上に乗つて其水を壓出すやら、壇中に倒懸にして、死ぬまで捨置くやら、夫れはく想つたばかりで身の毛も森立たんばかりの惨刑酷罰を逞うしたのである。

四 宗門寺と切支丹訴人の制札

夫れでもキリスト教徒が容易に滅燼びさうでないのを見て、幕府は嚴重なる鎖國主義を取て、宣教師の入國を杜絶すると共に、五人組の制を設けて、組中から信者が見付つたら、組合の者を残らず所罰することに定めて、互に吟味、告發せしめ、宗門寺の法を立て、國民は貴賤の別なく、必ず佛教の一派に屬せしめ、その寺を宗門寺と稱し、寺毎に檀徒の姓名、年齢、生死、婚姻等を明細に記入れた宗門帳を備へしめ、宗旨人別、改帳と云ふ戸籍帳を作り、各家の檀那寺を第一に載せ、次に家族の姓名、生年月日を記して、一々戸主の判を押した上に、更にそれく檀那寺の印を捺かしめ、そして十五歳以上の男女は、其の家族たるを雇人たるを問はず、毎年一度は必ずそれくの役所へ出頭て、判元見届役の面前にて、一々その名前の下に捺印し、其序を以て踏繪を行ふことに定め、死者があれば檀那寺の僧侶より剃髮を爲し、戒名を施さ

しめ、祖先の忌日に當つて、寺に參拜せざるものは之を訴へしめ、全國の要所々々には「切支丹訴人の制札」と云ふ高札を立て、大金を懸けて信者を訴へ出さしめる等、手段の有りだけを盡して、根を掘り葉と枯さんと努めたのである。

その制札の文は時代によつて幾分の相違はあつたが、天和年間のは左の通である。

定

キリシタン宗門は累年御禁制たり、自然不審なるもの有之者申出づべし、御褒美として

パテレンの訴人(西班牙語 Padre 靈父の義) 銀五百枚

イルマンの訴人(同語 Hermano の轉訛、兄弟の義、司祭に非る修士を指す) 銀三百枚

立かへり者の訴人(一旦教を棄て更) 同 斷

同宿並宗門の訴人(同宿とは寄宿生の義、教會の學校に養成されて傳道士となりし者) 銀百枚

右の通可被下之、せどひ同宿宗門の内たりといへども、訴人に出る品により銀五百枚可被下之、かくし置き他より顯るゝに於ては、其所の名主並に五人組まで一

宗門寺々切支丹訴人の制札

類共可處嚴科者也、仍下知如件

天和二年五月(千六百八十三年五月)

奉 行

五 轉證文

元和二年(千六百十六年)長崎奉行竹中采女正重義は、新にキリスト教撲滅の工夫を凝し、市民の棄教したものに「轉證文」を出さしめることにした。夫れには日本誓詞と南蠻誓詞との二様あつて、一つは日本の神祇に誓はしめるもの、一つはキリスト教の神に誓はしめるもので、頗る珍無類に出来て居る。即ち左の如し。

南 蠻 誓 詞

切支丹ころび申す書物の事

一我等數年の切支丹にて御座候へども、切支丹の教承り候はご魔法の教にて御座候。第一後生の事に取成し、伴天連の下知を背き候者にエスコムニアン(破門)を掛け、此世にては萬事に付き萬民の參會を戒め、來世にてはインベル野(獄)へ落ち申すべしと威し、又犯したる程の科を伴天連に懺悔仕り、其赦を蒙らずして後生たすかる事なきと教へ、萬民伴天連を用ひ候様に仕り候事、皆以て他の國を

藩町奉行の切支丹ころび申す書物の事

取る謀にて御座候。右承届け切支丹を轉び、我等法華宗に女房一向宗に罷成り候
夫れに就き

御奉行所様へ書物を差上げ申候。以來立上り、又心に切支丹宗旨の望を含み申す
間敷候。此旨少も相違御座候は、デウス伴天連(神父)ヒリオ(子)スピリツサント
(聖)を初め奉り、サンタマリア(聖マ)諸のアンジヨ(使)ベアト(聖)の御罰を蒙り、
デウスのガラサ(神の)絶果て、ジョタス(イスカリオ)の如く頼母しきを失ひ、後悔の一
念も氣ざ、ずして人々の嘲と罷成り、終に頓死仕り、インベルノの苦患に責めら
れ、浮ぶこと御座あるまじく候、仍而切支丹宗旨のジュラメント(誓)如此に御座候。

日本誓詞

一私共毛頭切支丹の儀心底に存じ奉らず候へ共、ころび申候段紛無御座候。

若し偽り申上げ候か、又は以來少なりとも存知出で候に於ては
梵天、帝釋、四天大王、惣而日本國中六十餘州の大小神祇、別而伊豆箱根兩所の權現
三島大明神、八幡大菩薩、天滿自在天神、殊に當所の氏神、諏訪大明神、部類眷

屬、神罰冥罰を各々に於て罷り蒙るべき也、仍起請文如件

正保貳年

九 介
女 房

進 上

御 奉 行 所 様

加様のジュラメントを以てキリシタンを轉び、御影をふむなど申す事、昔より今に至るまで、何國にてもキリシタンの上に例なき事にて候間、何を不満にて、又立ち上り申すこと成り可申き哉、其上眞の立上りと申す事は、伴天連に逢ひ申さず候ては罷成らず候。ひそかに我と立上り候事生得なき事にて候已上、

南蠻ころび伴天連

仲 庵 (此人は後日改心殉教した)

日本ころび伴天連

了 順 (荒木ウ此人も後日改心した)

了 伯 (?)

裏 書

右之九介夫婦一向宗に罷成り候處明白實正也、仍如件

西 勝 寺

守 讚

正保貳年 乙酉

六 切支丹類族改

貞享四年(千六百八十七年)に至つて、幕府は別に「切支丹類族改」の法を創め、キリスト教信者たりし者の近親遠族は残らず細密に取糺し、棄教者が死ねば檢使を遣して一々之を改めしめた。今大村藩の切支丹類族改帳から其一例を擧げれば、

切支丹本人

一 助左衛門

助左衛門妻

一 妻

斬 罪

斬 罪

此助左衛門夫婦は大村領郡村の内松原百姓にて候處、切支丹宗門につき明暦三年長崎奉行黒川與兵衛、甲斐庄喜右衛門の裁許にて、萬治元年助左衛門五拾七歳

切支丹類族改

切支丹類族改

妻四拾八歳にて斬罪申付けられ候。此者は父母舅姑相知れ申さず候。

助左衛門の嫡男、本人同前

一十兵衛

病死

此者は萬治元年父母斬罪に行はれ候節、別家に罷在り、切支丹宗門の儀曾て存せ
ず候由申候、依之、長崎奉行黒川與兵衛、甲斐庄喜右衛門穿鑿の上さし免され
領内大村の内、久原百姓にて罷在候處、延寶五年十二月二日四十九歳にて病死
仕候に付き、檢使差遣し死體相改め、檀那寺肥前國彼杵郡大村法華宗本經寺に
て土葬に取置き申候

右之類族

十兵衛妻

一くり

肥前國彼杵郡大村 當午五拾四歳

此女は領内大村の内池田百姓小市郎の娘にて候、倅長太夫一所に罷在候。

十兵衛嫡男

一長太夫

肥前國彼杵郡大村 當午貳拾貳歳

此者は領内大村の内久原百姓にて罷在候

助左衛門孫まつ二女

法華宗

一いご

肥前國彼杵郡那 當午三十九歳

此女は領内郡村之内松原百姓七左衛門の妻にて罷在候

助左衛門孫婿いご夫

法華宗

一七左衛門

肥前國彼杵郡那 當午四拾六歳

此者は領内郡村の内松原百姓にて罷在候

助左衛門曾孫いご倅

法華宗

一新九郎

肥前國彼杵郡那 當午十八歳

此者は親七左衛門手前に罷在候

以下略す。

斯の如く幕府のキリスト教に對する取締は至れり盡せりで、秋毫の手拔りもなかつた
のであるが、夫れでも信者は有ゆる變形の下に其信仰を維持し、終には聖母マリアを藏せ
る觀音堂あり、十字架を安置せる稻荷の祠ありといふ鹽梅であつたから、幕府は一々是等
に開帳を命じて其本尊を檢査すると共に、毎年七月の盂蘭盆會には、寺院から檀徒の家を
廻りて其佛壇までも改めさせた。是に於てさしも隆々として旭の昇るが如き勢を誇りし

切支丹類族改

我公教會も、元祿の頃よりは、次第に凋落して、少くも表面だけは全く跡を我國に絶つに至つた。斯くても幕府は、猶その厳しい法度の綱を弛めることなく、以て明治の王政復古に及んだのである。



第二章 宣教師初て琉球に入る

一 歐米公教信者の熱烈なる祈禱
日本公教會が、幕府の意地悪い迫害の手に悩まれて居る間に、歐米の公教信者は、我國幾千の殉教者等が、主の爲に流せし鮮血を思ひ、その後世に遺せし勇壯なる龜鑑、美しき逸話などを語り續ぎ聞き傳へて、感嘆もし發憤もし、如何にもして此の榮譽高き公教會の遺れる根に培ひ、再び花の春に遭はせばやと、心を揃へ力を合せ、熱烈なる祈禱を神の尊前に捧げて偏に再生の恩を願つて居たのである。オランダ商人の報告やら、マカオ、ルソン、マラツカ地方へ漂流せし日本人の談話やらによ

つて、我國にキリスト信者の種子の猶は残れる由を確めるに及んで、いよ／＼熱心に主の御哀憐を祈つて止まなかつたのである。

歴代の教皇も亦日本公教會を念頭に忘れ給はず、天保三年(千八百三十二年)朝鮮に教皇代理區(新傳道地の司教を教皇代理と稱し、其傳道地を教皇代理區と云ふ)を設け、ブルギエル(Bruguière)師をその司教に任じ給ひし時も、首尾よく朝鮮へ這入り込んだ上では、日本傳道の手蔓をも求むべく吳々も命せられた位であつた。ブルギエル司教は中途にして斃れ、イムベル(Imbert)司教が之に繼いで朝鮮に赴任するや、教皇の旨を受けて釜山に居住せる日本人に布教を試みると共に、琉球へも傳道士を派遣する考へであつたのであるが、惜むべし其身は間もなく迫害の嵐に散りて、素志を貫くことが出来なかつた。

二 フォルカド靈父の琉球行
兎角する中に隣國支那には、阿片事件が持上つて終に英國と戰端を開くことになつたが、連戦連敗の極、膝を屈めて和を請ふに至つた。佛國政府も此機に乗じて何等かの利権を極東に附殖し、あはよくば朝鮮、日本の諸國とも和親條約を締結しようと思ひ立ち、水師提督セシル(Cecil)をして軍艦數隻を率ゐて支那の沿岸に示

威運動を試み、全權公使ド、ラグルネ(De Lagrené)の對清談判を助けしめた。セシルは清國との談判が意外に長引くを見て焦躁しく思ひ、軍艦アルクメヌ(Alouane)號を割いて琉球へ遣はし、土地の状況を深險せしめることにした。出發に先だち、佛國巴里に本會を置いて居る外國傳道會の會計部長で、當時支那のマカオに坐して、極東の傳道地に物資の供給を宰つて居るリボア(Libois)靈父に向つて「一名の宣教師を琉球へ遣はして日本語を學ばして置いたら、他日日本へ出掛ける時に通譯とされるが御同意如何」と申込んだ。

其頃朝鮮の公教會は打續く迫害に惱まされ、到底他を顧みろの餘裕がないので、日本傳道の任は會計部長の肩に負はされることになつて居たのである。部長は一介の靈父に過ぎなかつただけれども、本會から派遣された宣教師の任地でも、便宜之を變更する權限さへ與へられてあつた上に、リボア師と云へば、ナカノ、常識に富んだ、注意の周到な、僅の機會でも取外さないと云ふ才物であつた。

豫てより日本傳道の緒もがな、と油斷のない眼を睜つて居たリボア師のことなれば

提督の申込を得るや渡りに船と打喜び、近頃會計部の助手として本會から派遣せられたフオルカド(Forcade)靈父に其任を命じた。師は見た所至極淡泊で、如何にも人懐のしなうな態度の中に熱烈なる信仰を蓄へ、千難前に横はり、萬困後に逼ることも屈せない底の剛毅な氣質を備へ、異教地の傳道に一身を投げ出す覺悟で宣教師となつたのであるから、年が年中會計帳簿の中に頭を埋めて居るやうな方面には些と不向であつた。乃で此選を得るや小躍りして喜び、早速結束に取掛り、支那人で聖教の爲に二ヶ年の久しき間も廣東の獄に繋がれて居たのを、セシル提督が救ひ出して呉れたアウグスチヌ高と云ふの傳道士として伴ひ、弘化元年(千八百四十四年)四月三日に、纜を解き、海上無事、同月二十八日聖ヨゼフ擁護の祝日に琉球の那覇港に錨を投じた。

翌日艦長デツプラン(Duplan)は、フオルカド師、アウグスチヌ高、其他二三の將校を從へて上陸し、那覇官と會見して互市を乞うたけれども「海中の小國で、交易すべき物品がありませんから」と云つて謝絶された。艦長が折返して「二三ヶ月もすると水師提督がもつと大きな軍艦に座乗して來訪する筈であるから、それ迄に何分の返答をして貰ひた

いと云つたら、那覇官は苦りきつた顔をして居たが、やがて後を顧みると、忽ち紅帽の給仕等が菓子を出盛にした奇麗な小盆を各人の前に陳べ出した。それで不本意な談判を巧く切り上げようと云ふ魂膽らしい。艦長ナカ〜其手を喰はない。二三分間も黙つて居たが今度はフオルカド師の件を持ち出し、「提督が貴國へ來られても通譯が居なくては困るから、一等通譯官のフオルカドに二等通譯官を附けて貴島に残し置き、國語を學ばせたい考である。何うぞ此二人を出來るだけ鄭重に取扱ひ、生活上に必要なものは一切不自由しないやうに供給つて貰ひたい。代價は相當に此方から支拂ひます、國法も必ず嚴格に守りますから」と云うた。一座の面々は之を聽いて蒼白になり、餘つばど困り果てた様子であつたが、強ての依頼に拒み得ずして、「兎に角、上役に申上げて見ませう」と答へて、澁々ながら申込みの條項を書き付けた。

三 不思議な十字架 五月一日フオルカド師は軍艦内の病院でミサ聖祭を執行ひ、平日よりも稍久しく感謝の祈をなした上で、此琉球の新傳道地を聖母マリアの潔き聖心に獻げ、もし自分の生存中に幾名かの信者が出來、小さい聖堂の一つでも建築する運びになつた

ら、教皇に申請して、正式にこの捧獻の認可を請ひ申すべし、と誓願せられた。今日我國の公教信者が聖母の潔き聖心を以て「日本の擁護者」と尊崇んで居るものは實に此に胚胎つたのである。

夫より師は町の様子を探險し置かんものと數名の將校連とボートに打乗り、那覇の町中を流れる小川を漕ぎ上れば、町の人々は兩岸に黒山を築いて、物珍らしげに見物するのであつた。上陸する迄は何事もなかつたが、一步町中に踏出さうとすれば、忽ち小役人が出て來て腕を執らへ「行てはなりません、行てはなりません」と引止める。フオルカド師は反對に彼の腕を引搦んで、「行ても可い、行ても可い」と云ひく〜ドシ〜進んで行く。街の角々に到る毎に「行てはなりません」を繰り返すから、此方も平氣で「行ても可い」と反復して、三時間と云ふものは腕と腕とを執り合つて、町の内から外迄残る隈なく見物して廻つた。波戸場に出てボートの出迎へを待つて居ると、圖らずも波戸の一番はづれに當る大きな敷石の上に、ラテン式の立派な十字架が墨黒々と記してあるのを見當つた。フオルカド師は夢かどばかりに驚いて、一度ならず二度ならず縦から觀、横から眺めても矢張り十

十字架である。同行の軍醫に見せても、「何うしても十字架としか見えません」と小首を傾ける。不思議なものだ、何の爲に十字架を此に書き出して居るのだらう、と愈々訝しく思つて、傍に立つて居る小役人の些と支那語を解るのに尋ねても、濫い顔をするばかりで何とも答へない。唯其中の一人が片足を軽く十字架の上に沁らして、「存じません、何の意味もないんです」と片語交りに答へた。「でも是は十の字ではありませんか」と折返して尋ねると、「へい然うです、然うです」と曰はんばかりに、皆が指を十本さし出して見せた。フォルカド師は此上に迫窮しても益なき事と思ひ、彼等の言ふが儘に、何の意味もないものと信じたらしく見せ掛けて、其場を立ち去つたが、考へて見れば意味の有るの無いの、話ではない。是を正しく踏繪用の十字架で、船客が岸に上る毎に必ず之を踏ませて、そのキリスト教徒に非ざる旨を證明させる爲めのものであつた。

四 フォルカド師那覇に滞留を許可さる

艦長の申込に對して、五月三日に上役から書面を以て返答して來た。通商貿易に就ては、琉球が硯角不毛の小島にして、金銀銅鐵を産せず、島民は僅に其日ノ一の露の命を繋いで居る位であるから、到底望みに副ふことの出来ない

のは遺憾である旨を陳べて、體よく之を拒絶し。フォルカド師の件は追つて書にして、承諾するともせぬとも解らないやうな、曖昧な返答をして來た。

「二名の通譯官を御托かり申せとの御命を承り候へども、外國人にして弊島に足を駐めし者は是まで一人も御座なく、氣候も至つて不良に候へば萬一御差障りなど有之候うては、氣の毒千萬と存じ候、其邊は篤と御熟考下されたく、念の爲め一應御注意申上げ候。」

と言ふやうな文面であつた。艦長もさるもの、早速返書を認めて、通商の事は強ひて請求する意ではない、と云ふことを明かして、一先づ島人を安心させた上で、

「通譯官の一件に付き、拒絶の御返答を賜らざりしは何よりも嬉しく存じ候……一且命を受けては、一身の安危など顧みざるが佛人の常に候へば、氣候の不良、健康上の危険の如きは、全く無用の御配慮かと奉存候。就ては明日小生躬ら兩名を從へて上陸仕り、重ねて萬端御依頼申上ぐべく候以上。」

と答へて、巧く押付けて了つた。由來小國の民は辭令に巧みなもので、琉球の役人等も

心では、厄介な者が轉がり込んだものだ、とは思つたが、今更ら拒絶する譯にも行かぬので、不承不承に引受けながら、表面には左る様子も見せず、却つて天を指しつゝ、二人を丁重に取扱ひ、些も不自由を見せまいと誓約した。鑑長も夫れに安心して、翌日順風に帆を孕ませ、支那をさして歸港したのである。



第三章 琉球に於ける宣教師

一 聖現寺の四人 那覇より首里街道に由つて物の半里も行つてから、左に折れて少し進むと、眞和志間切の天久村は泊の聖現寺と云ふ眞言宗の寺の前に出る。寺とは云ひ乍ら粗末な木造の平屋で、中央を本堂とし、左右を庵室に充て、一見普通の民家と思はれぬ構へである。周囲は高さ四尺ばかりの石垣を以て圍み、石垣の外には數十株の老松が枝を交へて翠蓋を碧空に翳し、頗る風景には富んで居るが、全くの離家で、附近に

は天久洞があり、洞の前に一字の觀音堂があるばかり、極めて寂莫い境であるから、外國人は總て此寺に置くことゝなつて居たとかで、フォルカド師等二人も、其南側の八疊一間を充てがはれた。でも實を言へば夫れこそ體のよい座敷牢で、室の内にも外にも大勢の番卒が見張りをし、夜であらうと晝であらうと、咳拂の一つもすれば直に一ダス位の小役人が擦り寄つて来て「何かお變りでも」と心配さうに尋ねるのであつた。フォルカド師は固より死を決して斯の地に踏み込んだのであるから、夫しきの事に回まされはしない。平氣で笑つて喰つて眠つて居たが、然し考へて見れば、今のやうに自由を束縛されて居ては、到底宣教の目的を達することは思ひもよらぬ。是れは何でも抗議を申込んだ方が得策だ、高等官吏に接近する機會も得られるから、と思ひ付いたので、二三日も経つと地方長官に會見を求めた。始めの程は何のかの口實を設けて、附添の役人等が取合つて呉れなかつたけれども、フォルカド師が一度言ひ出した上は、一步も後へは退かぬと云ふ態度を示したので、終に泊の學校らしい家で、四十歳ばかりの、恰好の好い、顔立の優れた長官に會見を許した。そこでフォルカド師は細に我身の不自由を訴

へて、「夜でも晝でも自宅に居る心持はしません、町重に取扱かはねばならぬと云ふ口實の下に、要もない人間が馬鹿に大勢附纏つて始末にをへません。外に出ても僅に海濱の砂中しか歩かせない。それも役人が前後左右から取巻いて、人が通れば鞭を振つて逐ひ散らす、失禮してはならぬから、と口先では巧く胡麻化して居るが、其實民衆に私を厭がらせる爲めなんでせう」と苦情を並べた。其後一ヶ月ほど経て再び會見を求め、八ヶ間敷く談判した結果、漸く八疊一室と前の小庭丈けの自由を許された。然し外出の自由ばかりは、逆も口舌の談判位では得られまいと見て取つたフォルカド師は、寧ろ自分の方から役人を困してやらうと腹を定め、誰か何と言はうぞ一切頓着なしに、氣の向き次第何處へでも勝手に出掛けることにした。すると附添の先生等、狼狽へまいことか非常に驚き、後から追かけて来て、「止つて下さい、止つて下さい」と泣んばかりに引止めるけれども、聴ぬ振してズン／＼と歩き廻つた。

一日フォルカド師が那覇街道を徐に散歩して居ると、役人が背後から来て師の兩腕を引執へ、長官の命だと云つて、強ひて宿所に連れ歸つた。フォルカド師は翌日一伍一什を

書面に認め、何の罪あればとて、自分を禁錮して外出させぬのであるか、と長官に伺ひ出た。すると折返して長官から

「別に罪の何のとのある譯には無之候へ共、外國人は海岸より外に一步も踏み出すべからずとは國法の定めに御座候、アルクメヌ號の艦長も貴下の必ず嚴格に國法を守るべきことを約束せしに候はずや」

と却て逆捻を喰せて來た。フォルカド師は直に左の答辯書を差出した。

「なるほど正當の法律ならば、アルクメヌ號の艦長も約束せし如く、何處までも几帳面に格守すべく候へども、人道に外れたる得て勝手の規則は、小生に之を守る義務もなければ、艦長も敢て开を守らしむる所存にては之れ無かりしものと見ね、自身も行きたき地へは、何處へも随意に歩き廻りて候。されば何か小生の落度を突き出し給はざる限り、小生は決して從來の態度を改め申すまじく候間、右御含み置き下されたく候。」

此の道理ある答辯には、流石の長官も返す辭もなく、夫れからは無理に師の外出を

差止めるやうなことは一度もしなかつた。

外出は自由に出來るやうになつた。今度は前後左右に煩く附纏ふ小役人を追拂はねばならぬ。そこで附添の多い時に限つて、態と足を早めて、遠くへ遠くへと駆け廻る事にした。所が夫れも甘々と圖に中つて、附添の数は次第に減少つて二人か三人となり、路行く人と立話をして邪魔しないばかりか、時としては附添自身の方から、寺院なぞへ連れ込んで、お茶を飲ましたり、休息したりする程になつた。

二 フオルカド師の志成らす 元來フオルカド師の琉球へ渡つた目的は、唯だ日本語を學ぶのと、土人に福音を宣布するに在つたので、この二個の目的を貫徹するが爲めに、師は如何に慘憺たる苦心を重ねたであらうか。言葉を學ばうと思つても、一人の教師も雇ひ出せねば、一冊の書籍も手に入らない。長くの間は簡單な物の名さへ教へて呉れるものは居なかつた。時として此方で聞覚えた語があると、何うにかして其意義を取違はさうとしたり、偶に教へて呉れる時は、土人の全然用はない漢語を言つて聞かせたりするのであつた。幸に八ヶ月も暮して居る中に、役人の心機がガラリと變つて來た。取分け

一人の小役人が大層懇切に教へて呉れるやうになつたお蔭で、六千語ばかりの辭典を作り、大概の用事は勤まるやうになつた。

是ならば傳道を始めるのに差支はないと思つたが、然し人民は全く官の奴隷であるから、官から信教の自由を與へられない限りは、到底成功の見込がないので、一日思ひ切つて役人に許可を願ひ出た。始は僅な事に託けて許さなかつたから、重ねて願ひ出る、今度は断然と拒絶した。其の言草とする所は、

「琉球は唯だ日本と通商して居るだけなのに、もし日本に先だつてキリスト教の弘布を許したら、日本の商船は残らず引上げて了ふに相違ない。其上清國の藩屬でもあるから、何う云ふ難題を持ち掛けられるかも知れぬ。實に一國の存亡に關する大問題であつて見れば、何うしても許可する譯には行かぬ」

と云ふのである。役人等は琉球が日本の藩屬たることは務めて之を隠蔽し、唯支那だけに隷屬して居るかの様に見せかけて居たので、好い加減の出鱈目を駢べてフオルカド師の出願を拒絶する口實としたのである。随つて師が日々其口實を論破して、清國に朝貢

するアンナムの如き、シヤムの如きは、疾くに信教の自由を國民に與へて居るけれども夫れが爲に清帝より何等の咎をも蒙つた例がない事、日本の商船が引上げて、那覇港を開いて歐米諸國の商船を招いたら、少しも失ふ所は無事などを、熱心に説明して聞かしたけれども、斷じて許さなかつた。

フオルカド師は残念で堪まらない。人民は決して自分を嫌つては居ない。寧ろ自分を見たがり、共に談話を交へたがつて居る彼等の心は歴々と其素振にも讀めるので、布教の許可さへあつたら、多少の結果は得られるものと思へば、いよく残念で堪まらなかつたが、差當り何とも手の出し様がないので、時機を待つより外はなかつた。一日斯う云ふ事すらあつた。

フオルカド師がアウグスチヌを連れて散歩に出かけると、小役人等は役目大事と隨つて來たが、少し遠歩きをするで見ると行つては可けません、行つては可けません」と例の十八番をやり出した。然れども些しも耳に入れないものだから、今度はグタク／＼に疲れ果てた體を装ひ、一歩行つては息をはづませ、十歩進んではベタリと坐り込みして、



(狀現の頃年八廿治明) 寺現聖の久天

段々後れて了つた。二人は是れ幸ひと足を早め、小高い丘を乗り越えて向ふの谷へ下つた。もう小役人は影も見えない、始て自由の身になつたので、足に任せて四里ばかりも駆け廻つて、終に唯ある小山の頂に辿りつき、アウグスチヌが續いて今少し遠方を探険する間に、フォルカド師は獨り草の上に腰を下して休息した。農夫等は師の姿を見るや耕作を中止して、我も我もと畑より出て来て、物珍らしげに師の周圍に集り、煙管を貸すやら、煙草を出すやら、火貰ひに行くやら、話し掛けるやら、夫はくゝ懇に接待して呉れたが、小役人の影が見えなかつたと思ふや、忽ち蜘蛛の子のやうに散々と逃げ失て了つた。然し役人と言つても皆鬼ばかりではなかつた。初め頃聖現寺に詰めて居た一人の如きは、自分からアウグスチヌに話を持ち出して、造物主の存在、之に奉仕へる道などを論じた位、學問は相當にあるし、心も正直だし、大層アウグスチヌの説明に感服し、詩を作つて其の博識を賛め、毎日でも聴きたいものと云ふ意を仄かした。爲に役でも上げられたものか、夫れきり全く姿を見せなかつた。其後と云ふものは宗教の話をするものとは一人もなく、偶に話が其方へ迂りかけようとするれば、忽ち墮者になつて了つて、ウ

ンともスウとも答へない。然らば宗教には全く無頓着なのかと云ふに、然うでもないらしい。伊知地貞馨氏の著せる沖繩誌に

「外國船の來るや薩摩の藩主島津齊興は藩吏數名を遣はして輪番駐在せしめ、士族二名を以て扮して琉球人となし、應接ごとに必ず其座に參して情實を探偵せしむ云々」
 とあるのを以て見れば、是は皆薩摩藩の指金に出たものどしか思はれぬ。

三 フォルカド師の困苦缺乏

フォルカド師は滯留一年に及んでも、相變らずの囚人扱ひで、寺

院内では番卒の許可を経ざれば、何人にも面談すること出来ない。面談するにしても注意深い眼を睜つて睨まれねばならぬ。外に出ては小役人に煩く附纏はれる。眞向から迫害の大鉈を振つて打つて蒐かられるのではないが、夜となく晝となく身を縛られる小さな迫害と來ては實に想像以上である。佛蘭西軍艦でも來たら何うにかならうものごと、毎日く頸を長くして海上遙に眺めて居るが、夫れらしいものも一向見ない。
 所が弘化二年(千八百四)六月十九日一隻の軍艦が沖に姿を顯はした。フォルカド師の胸は躍つた。若しやと思つて待つて居た甲斐もなく、近づくのを見れば英艦サマラン(Samara-

range) 號であつた。加勢の宣教師も乗り込んで居なければ、一通の書面、半錢の金子も託かつては居なかつた。然し鑑長は勇壯なる師の志に感じて、那覇港に碇泊して居る間は懇に師を勞はり慰め、佛艦渡來までの費用にこそ、必要な金錢迄も用立て呉れた。英艦が去つてからフォルカド師は再び注意深い監視の下に、窮屈な囚人生活を續けねばならなかつた。取締は日にまし厳しくなるばかり、些かにも自由を得たいものと、随分もがいても見たが所詮駄目であつた。語學の教師すら、一冊の書籍すら手に入れること出来ない位だから、福音の宣布など夢にも思はれない。然し何よりも困るのは金錢の缺乏で、英艦に用立て貰つた金子も次第に残り少なくなつて來た。初めから衣食住に要するだけの費用は一切自辨すると言ひ切つて居るから、今更男を下げて前言を取消し、向ふの世話になる譯にも行かぬ。仕方がないので六ヶ月間と云ふものは儉約の上にも儉約して、薩摩芋を食べ、炒米の湯を飲んで、僅に露の生命を繋いで行つたのである。顧みれば上陸以來はや二ヶ年に垂んとして居る。名義は兎に角、事實上の囚人となり少し身を動かしても直と番卒に取圍まれ、而かも其番卒とさへ容易に談話を交へること

出来ない。たび／＼頓でもない虚偽を教へられ、一口の物を覚ゆるのでも非常な骨である。靴は弊びて跣となり。衣服は破れて襤褸になり。薩摩芋を齧つて餓を凌ぎ、夜は硬い畳に臥し、寢首を搔かれはすまいか。とまで氣遣はれて、一晩でも枕を高くすること出来ない。毎日眸を放つて佛艦の來港を俟てども俟てども何うしたのやら影も形も見えない。見棄てられたのではあるまいか。とさへ思はれて、その心細さと云つたら無いのであつた。斯る堪へ難き困苦缺乏の中にフォルカド師は何によつて其慰安を得、その忍耐力を養はれたのであらうか。

初め師が聖現寺に宿泊することになつた翌日、ミサ聖祭を執り行はんと、朝の四時から起きて静に準備に取掛り、祭服を着けて俄作の祭壇の前に立ち「父と子と聖靈の聖名に頼つて」と稱へ出した時、番卒が急に目を醒まして、師の異様な服装を見て呆れ返つて居る。斯くあるべしと豫想してフォルカド師は、前以てアウグスチヌに夫々言ひ含めて置いて居たので、アウグスチヌは殊更ら嚴に「教師さんは唯今神様にお祈禱をなさる所だから、身動きでもしたら大變ですよ。皆な早く出てお了ひ。是非止まると云ふなら拜跪きなさ

い」とやつたら、其朝だけは大人しく拜跪いて見て居たが、チト薄氣味悪く思つたものか翌日からはミサ聖祭が始まると直に出て了ふことになつたので、毎朝安心して祭壇に立ち、聖體を拜領し、夫れに力を得て、二ヶ年の久しき間も、斯う云ふ惨めな生活を續けることが出来たのである。



第四章 最初の日本教皇代理

一 佛艦來る フォルカド師の那覇に上陸してから春の花が再び咲いて、弘化三年(千八百の五月一日)となつた。今日は琉球で最初のミサ聖祭を執行ひ、この新傳道地を聖母の潔き聖心に捧獻した二周期であるから、心を籠て此の思ひ出深き記念日を祝し、今しも感謝の祈を終つたばかりの所に、アウグスチヌが近寄つて、如何にも言ひ出し難くさうに「靈父様、ミサの中に何も聴こわませんでしたか」と云ふから、「イヤ何も聴こわぬ、何事

かい」と問へば、「ミサ中小鳥が Davis vent, Davis vent (船が来た、船が来た)と歌つて居たぢやありませんか」と答へた。アウグスチヌは随分信仰の堅い信者ではあつたけれども、佛艦を待つて待ち焦れて居た爲に、鳥の鳴くの前までが意味ありげに聴こえたものであらう。「馬鹿な事を言ふものではない」とフォルカド師は叱り付けたが、サテも不思議！アウグスチヌは夫れから小庭に下りたかと思ふ間もあらせず、周章しく駆け上つて来て「はんたう靈父様、船が来ました、船が来ました」と聲さへ震はせて叫び出すから、飛び出して沖を眺めると、果して帆柱の高い、軍艦らしいのが一隻浪間に顯はれた。さては何國の艦であらう、フランスのならば！と胸もドキ／＼待つて居ると、正午にズドンと大砲を打ち出した。ワナ／＼と打戦ふ指を折つて數へて見れば正に二十一發、是だ、間違ひない、今日は佛王ルイフィリップ (Louis Philippe) の祝日なので、祝砲を放つたのだ。嬉しくて二ヶ年間の困苦も忘れて了つたかの様。其頃まで軍艦と云つても未だ帆走船で、此日に限つて風力は弱く、お負けに逆風と来たから、日の中に入港は覺束ない。フォルカド師は何うしても疑つと待つて居れない。小船を雇つて一刻も早く漕ぎ

付けたいと、自分ばかり速りに急つて見ても、島人が馬鹿にして取合つて呉れない。漕ぎ出した時はもう大分晩かつたので、軍艦の方では双方摩々になつても師の船が来たとは氣付かぬらしい。「フランス」と一聲高く叫んだら、漸く夫れと感づいて進行を緩くした。甲板上に駆け上れば、忽ち首に飛び付いて「昔の生徒、今は兄弟」と云ふものがある。視れば相知りのルチュルデュ (Leturdu) 靈父であつた。

艦はサビヌ (Sabine) 號で、艦長を始め將校等も一同フォルカド師の周圍に集り、その手を握つて無事を祝した。「早く来る筈でしたけれども、何分對清談判に暇とられたもんですから、然し艦でウキクトリエウズ (Victorien) 號にクレオパトル (Cleopatre) 號の二艦も遣つて参ります」と云つて、師を士官室へ案内して晚餐を饗し、郵便物を手渡した。最先に封を切つたのはリポア會計部長の書簡で、夫れはフォルカド師が今度司教に叙げられたとの通知であつたので、讀む中にも師の胸は如何に早鐘を打つて躍り立つたか知れない。教皇グレゴリオ (Gregorius) 十六世は、新に極東方面に福音宣布の道が開けさうになつたのを見て、日本々土と琉球諸島とを引くるめて一の教皇代理區を



教司ドカルオフレ代皇教の初最本日

ホルカド師長崎を覗く

四〇

設け、前衛となつて琉球に乗り込んだ勇敢なるフォルカド師の上に眼を注ぎ、今年取つて僅に三十歳の師を擧げてその司教に任じ、この困難な事業に當らしめ給うたのである。

二 フォルカド師長崎を覗く サビヌ號が入港したのを機会に、フォルカド師は自分の居間が餘りに狭少くて、到底フランスの將校等を接待すること出来ないから、寺院全部を貸し渡して貰ひたいと掛りの役人に交渉した所が、易々と承諾して、小役人は引上げる、佛像は片付けるして、今まで片隅に小さくなつて居たフォルカド師等も、始めて氣も暢々と大きな息をつくことが出来た。

サビヌ號は一ヶ月許りも那覇に碇泊して海圖を取り、五月三十日に至つてアウグスチヌ高、及ルチュルヂユ師を乗せて北の方、運天港へ向つて纜を解いた。越えて六月四日にウイクトリエウズ號が遣つて來たが、那覇には入らずに北へ去つた。翌日セシル提督の座乗せるクレオバトル號が沖間に見えた。フォルカド師は小船を雇ひ、篠つく雨を冒して港外へ漕ぎ出し、佛船に乗り込んで運天港へと赴いた。斯くてセシル提督は琉球の大官と會見して通商條約を取結ばうとしたけれども、大官は例

によつて「海中の小國、交易すべき物が無い」と云ふのを楯にして謝絶した。提督も強ひて要求しようともせず、唯だフランス皇帝に申上げて其の聖斷を仰ぐべき事、フォルカド師とアウグスチヌ高とは、今度所用あつて連れ行くが、高は二度と歸つて來ることはあるまい、然しフォルカド師だけは一層深く語學を練習する必要があるので、再び軍艦を以て送り越すべき事を告げて、是からは天久の寺院内に、番人を附けずして自由に居住せしめ、外出の時も小役人に附廻らせない、語學の教師と必要の書籍を周旋してやる、小使を備ふことを許す、食料品は商店から隨意に買入れさす、と云ふことを固く契約させた。斯くてルチユルヂユ師一人を聖現寺に遣して、三隻の軍艦は北の方日本を指して出帆し、七月二十九日長崎の港外に達し、高銜の前に錨を投じた。

是より先き文化五年(千八百)の八月英國軍艦フェトン(Phoeton)號が、オランダの商船を捕獲する目的を以て、不意に長崎港外に進み來り、通譯に出て來たオランダ人を捕へて艦内に拘禁するやら、ボート三隻に銃砲兵士を載せて港内に闖入して、オランダ船の有無を搜索するやら、頗る傍若無人の舉に出たけれども、長崎では生憎成兵が少くて如何

ともすること能はず、空しく手を拱いて彼の爲す所を傍觀するのみであつた。奉行松平
圖書頭は悲憤の情遣る瀬なく、英艦退去の後、其職責を全うすること能はずして、大に
國體を辱めた責を引き、自殺して罪を幕府に謝した。

此事のあつてから早や四十年ばかりも経つて居たとは云ふものゝ、今度見馴ぬ軍艦が
三隻も雄姿堂々と進航し來たので、市内は上を下へと騒ぎ立ち、佐賀、大村に急報して
軍兵を繰り出させて萬一に備へた位であつた。然しセシル提督が長崎に立寄つた目的は
飲料水を求める爲と、前年伊豆に漂流したフランスの捕鯨船が苛酷な待遇を受けたのを
訴へて、今少し取扱の懇切ならんことを請ふ爲であつたから、別段騒ぎ立てるまでの
事はなかつたのである。唯だ長崎奉行の佛艦に對する遣口が、オランダの商船に對する
のと同筆法で、ボートを卸して互に往來するのを禁ずるのみか、警備船を以て軍艦の
周圍を監視させたり、税關吏を遣はして艦内を検査めさうとしたりして、自尊心の強
い佛人に少からの悪感をおこしたのは言ふまでもなく、軍艦に來た屬吏までが、禮儀も
作法もあらばこそ、傲然と大きな面して提督に應接したので、佛艦では將卒孰れも甚く

憤慨して、如何なる椿事を仕出かさんとも計り難い勢ひとなつた。提督も長崎奉行の取
扱ひ振には頗る不快を感じたらしかつたが、其處は東洋艦隊の司令長官だけあつて、務
めて腹の蟲を殺して部下を鎮撫し、七月三十一日朝鮮へ向つて出帆して了つた。フオル
カド師は長崎寄港當時の感想を述べて斯う言つて居る。

「あゝ二ヶ年前から雨にも風にも忘れ得なかつた日本、而も殉教史上に名高きその日
本の長崎は、今我眼前に横はつて居る。遙に出島の白い和蘭商館を眺め、港を環れ
る青い山々を望んでは無量の感慨に打たれざるを得ない。殉教者の血に漂うた山は
何れ、昔の天主堂、司教館の跡は何處、と見廻しても知る由もない。軍艦に來た日本
人に問うて見た所で、迎も話して呉れさうにもない。投錨の日の事であつた、水先案
内に來た水夫等は、私が覺束ない日本語で話しかけるのを聞いて甚く打驚き、「貴下
の御姓名は」と尋ねた。少し躊躇ひはしたものの、名らぬのも都合悪しと思ひ、「フオ
ルカドです」と答へると、直に「怪しい奴だ」と云はんばかりに目指し指示して、アウダ
スチヌに向ひ「貴下等の仲間で、未だ那覇に一人残つて居るでせう」と曰つた。何う

して聞込んだものか、彼等はまだ何も箇も知り抜いて居るのである。提督の話によると、日本政府は、私の首を切て江戸に送れ、と琉球藩王に嚴命を下したけれども、藩王がフランスを憚つて應ぜなかつたのだとか、出島のオランダ館長が日本政府に忠告して、事無く済んだのだとか云ふ噂が、ジャワのバタビア邊では取りくんであつたと云ふが、此分ならば夫も滿更虚聞でもないらしい。』

フランスの軍艦が朝鮮を経て支那へ廻航し、舟山列島に碇泊して居る中に、アドネ(Adnet)と云ふ宣教師が遣つて來たから、フオルカド師は佛艦に便乗して之を那覇へ送り、己は司教叙品式を受くべくマニラへ赴いた。然れどもマニラの司教も漸く選舉されたばかりで、未だ叙品式を受けてない。ジメノ(Jimeno)と云ふ司教がマカオから渡來するのを俟つて居る所であつたから、自分も十月の末つ方まで靜に休養して待つて見たが、何うしたものか司教も來ねば何等の消息もない。己を得ずマカオへ押渡つて見れば、丁度ジメノ司教がマニラへ向つて出帆した後であつたので、終に香港へ赴き、弘化四年(一千八百二十一年)二月二十一日を以てサモスの司教、日本の教皇代理として叙品式を受けた。アウグスチ

又高は其後、司教と訣れて故山の廣東に歸り、精々神學を修めて終に司祭となつたと云ふことである。

三 フオルカド司教の奔走

叙品式後フオルカド司教は、直に琉球へ乗込む考へであつたけ

れども、生憎便船がない。と云ふのは其時セシル提督は任期満ちて、ラビエル(Lapierre)大佐之に代り、安南政府に條約の勵行を迫るべく、ツラヌ(Tourane)灣に向つて進發することになつたので、夫れが濟まない間は到底琉球へ渡航する見込がない。司教も己を得ず大佐の勸誘に従ひ、從軍教師となつて安南へ赴くことになつた。ラビエル提督は事件を平和的に解決しようと思ひ、色々と長らく談判して見たが、相手が倨傲尊大で内外の事情に暗き安南人だけに一向埒が明かない。剩へ三方から兵船を進めて佛艦を包圍しさうな勢を示したので、提督も今は是までと、終に敵船めかけて盛に砲火を浴びせかけ、一時間餘にして之を全滅せしめ、翌日香港として歸航した。提督の今度の處置は萬已を得ざるに出でたのであつたけれども、時の佛國政府は平和に戀々として、平和の爲には如何なる犠牲をも辭せない、と評されて居た位だから、油断して讒者の乗する所

となつてはと、提督も逸早く用心の杖をついた。

フオルカド師が司教とは云ふものゝ、信者の一人でもあるのではなく、任地へ赴いても傳道の出来る譯でもないのを幸ひに、佛國へ歸つて政府に事状を具申して、その承諾を求めて貰ふことは出来まいかと交渉した。佛國艦隊の是まで傳道に與へて呉れた幫助を思へば、無下に謝絶する譯にも行かぬ。歸國した序にローマへ立寄つて、色々打合せをする便宜も得られると思ひ、司教はリボア師等と熟談の上、提督の請ひに應じて歸國の途に就いた。七月二日英國を経て巴里に入り、諸大臣を歴訪してラビエル提督の臨機の處置を陳述すると、皆が双手を擧げて賛成の意を表して呉れた。然し傳道に何分の助力を請ふ段になつたら、何方も冷淡極まる挨拶振で、一向取合つて呉れない。唯ギゾ(Ginzo)總理一人が新教信者たるにも拘らず、熱心に師の言に耳を傾けて、應分の力を藉して呉れさうにも見えたが、夫れすら物にはならなかつた。

司教は數日間フランスに休養した上でローマへ赴き、新にグレゴリオ十六世の後を繼いで立たれた教皇ピオ九世に拜謁して、その懇切なる待遇を受け、尋で布教聖省

(布教上の事務を攬る教皇の役所)を叩いて今後の方針を問合せた。布教聖省の意見では琉球へ渡つて無事に苦しむよりか、寧ろ香港に留まつて日本入國の機を俟つ方が便利ではあるまいかと云ふのであつた。香港は阿片戦争の結果イギリスの所領となり、日に月に膨脹發展して、何時しか東西兩洋交通の中心地となつて來たので、此處に坐つて居れば、天下の情勢が手に取る如く明かに見られるし土人間に傳道を試みることも出来るし寄留外人中にも多少の公教信者は居るだらうから、活動の餘地は十分にあると云ふのでフオルカド司教を假に香港の教皇權代理に任じ、英國政府の誤解を招かない爲に、一先づロンドンに赴き、事状を申述べて政府の承諾を請はしめた。英國の各大臣は孰れも厚く司教を待して、たとへ憲法の上からは公教會の司教を公認する譯には行かぬにしても、師の人格と位階とに相當する待遇を與へるだけは決して吝まないとまで約束して呉れた。

司教は香港に乗り込んだ上では孤兒院を設ける考へで、シャルトル(Charitre)の聖バウロ女修道會に交渉したら、同會でも快く承諾して、司教の姉に當るアルホンシヌ

(Alphonse) 童貞に數名の部下を率ゐて同行させることになつた。因つて嘉永元年(千八百十八)五月十七日フォルカド司教はムニクウ(Mounieou) 靈父と上記の童貞等を従へてロンドンより乗船し、喜望峰を迂廻して四ヶ月の後、漸く香港に到着したのである。



第五章 宣教師琉球に苦む

一 琉球人約束を履行せず フォルカド司教が各地を奔走して居る間にルチュルヂユにアト子の兩師は天久の聖現寺で何をして居たであらうか。佛蘭西の軍艦旗が那覇の浦風に翻へつて居る間は、琉球の官憲もセシル提着に約束した所を固く守つて、頗る町重に兩宣教師を取扱つて呉れるのであつたが、軍艦の姿が消え失ると共に、がらりと其態度を一變して、表面こそ自由を興へて居るやうで、實は入るにも出るにも嚴重な監視を附けて、二人の行動を束縛すること、言つたら、フォルカド師の時と別段違はない程であつた。

尤も小使と語學の教師だけは其儘に据置いて引取らなかつた。而も教師は三人までも與へて呉れた。其一名の如きは「大先生」と呼んで、随分と勿體を附けて居たが、其實は大間者であつて、語を教へるのではなく、他の二人の教授方を監視するのであつた。教師が巧く生徒を欺いて居るか、師弟の間が親密になりはしないかに注意し、傍ら宣教師等の思想から、言行の端に至るまで一々見取り聞取つて、之を首里の政府に報告する任務を帯びて居たのである。唯宣教師等の前を繕ふが爲に、毎朝必ず出て来て、五六分間教授の様子を観る、二人の教師に話させる、教師が態と日用の口語を教へずに、耳遠い文語を習はせる時も、適切な説明でも附けたものなら、直に意味が違ふの何んのと八ヶ間しく叱言を並べ立てるのであつた。然しルチュルヂユ師等は开を看破り得ない程の鈍物ではない。その教はる言葉が、通常土人間に用ゐられるものではない位のことには疾くに覺つて居たのである。

寺院から一步でも足を踏出したら、直と大の惡漢みたやうに大勢の人が後をつける、路傍の家は狼狽へまくつてバタ／＼と戸を閉てる、市場は人の影すら見なくなつて、

キコドンと云ふ用達の手を経なくては何一つ買ふことが出来ない、して其の達ける物品は代價が馬鹿に貴い。

流石の宣教師等も夫には散々弱らされ、國相に上書して抗議を申込んだ。三日の後は何分の返答を云ふことであつたが、三日は十日になつても何の沙汰もない。幾度となく首里の官廳を叩いて返辭を促しても、病氣でゐるの、地方へ出張中でゐると云つて、一向要領を得ない。して往復には幾百人とも知れぬ大勢が、屹と前後左右を取巻いてワイ／＼と噪ぎ立てる。五月蠅くて／＼仕方がない。運天港でセル提督に約束した所によれば「外出に際しては人を附纏はせない」とあるから、或日の如きルチユルヂユ師は、群衆に向つて右の契約文を琉球語で讀み聽かせたけれども、何の反響もない。歸りがけに那覇公館の前を通つたから、一談判してやらうと思つて中へ這入つた。併し誰一人相手にして呉れるものはない。話を仕かけても解らぬ顔をして、唯ニヤリ／＼と笑つて居るばかりである。

餘りの事にルチユルヂユ師も堪まり兼ね、書面を以て此日の出來事に就き、那覇官を

詰問した。

「那覇の町民は運天港に於て締結されし條約を知らざるもの、如く、貴官も御存じ之れ無き様に思はれ候間、その謄本を差上げ申候、何とぞ之を貴官の所轄内に告知なし下され度、總て契約は確實に履行せざるべからず、履行を拒むは相手方を侮辱する次第に候へば、自ら責を負ふの覺悟なかるべからず、其邊は篤と御熟考あつて、來年入港すべき佛國水師提督の怒りを招き、臍を噛むの悔なき様吳々も御注意申上げ候」と斯う書き送つて談判して居る矢先に、英國の水師提督コクラヌ(Cochrane)が、軍艦二隻と小帆船一隻を率ゐて那覇に入港した。

彼は國相に強ひて旗艦を訪問せしめた外には、努めて土人の感情を害はぬ様に注意し琉球の文明が實によく進歩して、その政治組織が如何にも完備せるもの、如く讚め嘯し些も之を變更する必要はないから、今更ら西洋の風俗宗教を取容れるには及ばないと勸告し、食料品も一切謝絶つて受けず、水兵が死んですら、一杯の土を請うて埋葬しようともせず、之を海中に投げ込んで魚腹を肥す、と云ふ位に土人の歡心を買ふ事に努めた。

従つて小役人等は隨喜の涙を零さんばかりに、「セシル提督も好人物ではあつたが、今度のコクラヌ提督つたら、何とマア見上げた人物でせう」と口々に讃め立て、宣教師等に當擦をやるのであつた。

英艦が纜を解いてから間もなく那覇官廳から通知が來た、ルチユルヂユ師は愈々待ち兼ねて居た國相の返答だと思つて、早速披見して見ると、案に相違して「其方等には民家と役所との見別けも付かぬから、爾後外出毎に附添人を従はせる故、左様承知せよ」と云ふ通知であつた。餘り人を馬鹿にした話なので、ルチユルヂユ師は早速それに答へて、「我々も民家と役所の見別位は出来る、なるほど時として民家へ這入らぬではなかつたが、夫れは五百人もの群衆が、ワイ／＼騒いで付いて來るのを避ける爲めであつた」と言譯をしたけれども、何の甲斐もなかつたのみか、十月二十三日には、いよいよ門前に一棟の小屋を構へ、四人の番卒を置き、外出の度毎に必ず附き廻らせることにしたのである。

二 傳道の望絶ゆ

弘化三年の終りから同四年の始にかけては、別段異つたこともなかつたが、四月二十四日に至つて、ルチユルヂユ師等は突然那覇官の訪問に驚かされた。抗議

を申込んでから六ヶ月目に、國相の答書を齎して來たのである。不思議に思ひつゝ、讀み下して見れば、如何にも巧く嘘偽を飾り立てあつて、抗議の條項に一々答辯しながら結局何の答辯にもなつて居なかつた。然し事の斯に至つたのは、北方に數隻の外國船が見え出した爲であると判つたから、緒はフォルカド司教の渡來せられたのではあるまいかと心待して居ると、間もなく支那歸りの琉球船が司教からの書面を届けて來た。取る手も遅しと開封した處、意外にも安南地方へ出掛けるとの通知であつたので、今や司教に對顔する望さへ絶えて、いよいよ物寂しい配所の月を眺めねばならぬことになつた。

宣教師の天職は、異教の暗黒に彷徨へる憐な民に眞理の光を仰がせるに在るのであるから、夫さへ出來たら、我身の不自由くらゐは少も厭はないのであるが、ルチユルヂユ、アド子の兩師には其望すら全くなかつたのである。元來琉球人は質朴で、從順で、勤勉で、奢侈を好ず、金錢の慾に淡く、不潔な觀劇などもないから心を腐らされる憂も少く、實に正直一遍の良民であつた。然し悲い事には彼等は官憲の奴隸で、唯命これ從はねばならぬ。もし其命に背き宣教師等に對して少しでも敬意を表したもなら、夫こそ嚴し

い所罰を覺悟せねばならぬ。土地は狭少いし、監視は嚴重だし、其上、戸主は全戸の責に任じ、一家族は九家族の、一村長は全村民の責任を負される、と云ふ特殊の法規があるの
で、何うしても隠し了せるものではないのである。

是は前の話であるが、弘化三年の五月、佛艦サビヌ號が那覇に入港した前日、一隻の英國船が突然やつて来て、ベトレム (Bethlehem) と云ふ醫師に夫人、子供、僕婢と合せて六人を上陸させて去つた。琉球政府では已を得ず之を那覇若狭町の護國寺に置いた然し醫師と云ふは唯看板だけで、實は新教の宣教師であつたが、日曜日になると、善く大道に立つて説教を爲るのであつた。那覇官では決して夫を差止めはしないが、人民に聴問を禁するので仕方がない。今しも聴衆の真中に立つて演説を始めたかと思ふ頃、小役人がやつて来て、一聲ヒウと嘯けば、片側の聴衆は忽ち「半右向け」をし、二度目に嘯けば、餘んの片側が「半左向け」をして全く辯士に背を見せて了ふ。苦情を申立てると「イヤ是が琉球での最敬禮です、貴下の御顔を仰ぎ視るに堪へない、と云ふ誠意を表すのです」と眞面目腐つて答へる。時としては辯士の足下に糞桶を擔ぎ込むことすらあつた。

つた。
ルチユルヂユ師等は路傍演説こそ爲なかつたが、個人傳道は機會さへあれば随分と試みた。然し何分禁令が厳しいので、泌々と話を聴かせることすら出来ない。教の話を持ち出せば、何時でもお極りの様に「貴師の仰る所は實に感心ですけれども、私等は何うしても聴くことが出来ません、お役人様が好まませんので、背むいたら大變ですもの」と答へる。夫れは無理もない話で、背いたら、笞刑か、入牢か、遠島、打首かに遭はねばならぬのであつた。

三 奇篤な老翁 或る小島の島司で、大層心立の善い、一心とルチユルヂユ師等に同情を寄せて呉れる老翁が居た。一日二人が散歩に出て其家の前を通りかゝると、丁寧に内へ呼び入れた。番卒が駆けつけて来て、政府の禁令を申聞かせて之を差出しても、些ども頓着しないで、お茶を汲むやら、煙草を出すやらして心から接待して呉れた。夫が縁になつて、其後は途中で行遇ふ毎に、直と右左を見廻して、別に氣遣はしい人が居なければ、近寄つて談話を交す、安心が出来ないと見た時でも、何かの口實を設けて立ち停

まり、一口の挨拶を述べたのであつた。或朝の如きは、ルチユルヂユ師が海岸を漫歩して居るのを見付け、之を手招きして、古墳の壊れて凹になつた所へ引入れて徐々ど語り出した。

老 卿等に面談するものがあれば容赦なく殺して了ふぞ、と大和が厳しい禁令を出して居るのは御存じですか」

老 「ハイ知つて居ますとも、然しその禁令は追付け取消しになります、フランスのお役人が近い中に参る筈ですから、藩王に申上げて、自由に交際が出来るやうにして呉れますよ」

老 藩主！藩主に何が出来ますか、此國を左右してるのは大和のお役人ですよ」

老 「何處に其大和のお役人は居ますか」

老 此島第一の港那覇に居ます」

老 そんなら其大和のお役人に掛合ひますさ」

老 それは駄目です、その御役人は決して外國人には對面しません」

斯う話して居たが、少し前の海濱に、一人の男が砂を取寄せて居るのを見て、老翁は忽ち蒼白になり、耳に口よせて囁いた、

老 あの男が見えますか、多分間者です、見られたら大變ですよ」

老 「なアに夫は卿の思ひ違ひ、あれが間者ッてあるもんですか、奴隷です、主人の命で砂を採りに來たんです、御安心なさい」

老 でも間者は何の様にでも化するんですから。朝は綺羅を着飾つて立派な紳士になつて居るかと思へば、晩には襤褸を纏うて見る影もない乞食になります、町にも居れば田舎にも居りますので、一寸でも油断なりません……あゝ行つた、行つた、今一口話させよう、卿の仰しやる耶蘇ッて何んなお方？一寸教へて頂戴」

老 耶蘇は神様から遣はされ、言にも行ひにも非常な勢力のあつた御方なんです……して其の神様と申しますのは、有りと有らゆる萬物をお造り遊ばしたので、唯一無二でムいます、天に二日あり、國に二王あること出来ませんか」

「同じ道理で、神様も唯一つでなければなりません、我々が貴島へ渡って参りましたのも、その神様をお知らせ申す爲なんです、聴きたかアムいせんか」
 老「ソリヤ聴きたいの、聴きたくないのぢやありませんが、何分我身が危くて出来ませんですもの」

「では其神様に向つて毎日、どうぞ私に貴方をお識らせ下さいましと祈りなさい。そしてお役人から許可が出たら直に話を聴きにお出なさい。お約束が出来ますか」
 老「ハイ屹と然うします」

と斯う言つて、互に袂を分つたこともあつた。

又或日の午後ルチュル師が獨で外出した後に、島の北の方からと言つて、七十許りの見識らぬ老翁が、十歳位の可愛らしい男兒を手引いて訪ねて来た。生憎小使が居合せて「何しに来た？」とドゲくしく問うたら、「外國のお方を見たくて参りました」と答へた。「出来ない、お役人様から禁じてある」と小使が一言の下に撥ねつけたので、已を得ず悄然と歸りかけた所にアドネ師が出て来て、早速臺所に呼び入れ、お茶を

汲んで勞はつてやつた。自分の居間に案内したら可かつたのに、小使が附添うて居たものだから、老翁も折角遠方から訪ねて来たものの、恐れて何の話もしなかつた。唯だ立ちがけに、密と小使には隠れたやうにして、「私は北の方から外國の御方が見たいばかりで参りました。評判がナカク、高いもんですから、死ぬ前に是非とも一度お目に懸りたいと思つて参りました譯でムいます」と言つた。

老翁が出て行つてから、何うも意味ありげな訪問とアドネ師は感付いて、直と外へ飛び出して、邊を見廻したけれども、何處へ行つたやら、サツバリ分らない。ルチュル師が歸つた上で、二人して晩方までも村中を捜して廻つたが、頓と行方が分らない。ルチュル師は口惜しくて堪まらぬ。何う考へても唯の物好きで訪ねて来たものとは思はれない。ヒヨツとすれば昔の信者の子孫であるかも知れぬ。左もなくば神の恩寵に心を動かされて来たものに違ひない。よし是から自分が北の方へ行つて、是非とも其老翁に面談して来る。斯う決心して出掛けようとしたものだから、役人等は俄に狼狽へ出して、師の志を翻へささうと色々に説いて勸めたけれども、頑として聴き容れない

と見るや、急に人を沿道の村々に走らせて「夷人が来ても宿泊らしてはならぬ、食はしてもならぬ」と布令した。

斯うやつたら初めの一日でグンニヤリして歸るだらう、と思つて居たのであらうが、然しルチュルヂユ師等の立前が、一旦決心した上は、何んな事かあつても一步も後へは退かぬ、と云ふのであつたから、其位の事に回まされはしない。餓くて堪まらなくなれば、農家に入り、薩摩芋を喰はして貰つて腹を作り、五日の間も各方面を尋ね廻つた役人等は師を困らさうと思つて、人民に沈黙を命じ「何と問はれても返答してはならぬ」と厳しく言ひ渡して居たので、師は一口の答を聞くが爲に、時としては疊の上に坐り込んで、「何とか返答して呉れない間は、何時になつても立退はせぬ」と剛情張つて動かないことすらあつた。すると彼等は漸く口を切つて「お役人様から、物を言うてはならぬと禁められて居ますから」と正直に白状するやうな鹽梅で、非常な困難を冒して尋ね廻つて見たけれども、終に見當らなかつた。

第六章 アドネ師骨を琉球に埋む

一 アドネ師病む 親に離れ、兄弟に訣れ、懐しい故郷の地を振り棄て、海山遠く四千里の外に乗り込み、あらゆる困苦缺乏と戦つて二人の宣教師は、一年有餘を天久の聖現寺に明し暮して、弘化四年(千八百四十七年)も早や終りに近づいたが、頼みに思へる佛蘭西の軍艦は一向姿を見せない。何うしたのであらう、朔風の吹き荒す此の冬天に、セシル提督も朝鮮近海に愚圖々としてゐる筈はないが、何か政治上重大な事件でも起つたのではあるまいか。去る十月に琉球藩王(尙育)が不歸の客となつたのを思ひ出しては、佛蘭西の王室にも不祥な出来事でも發生つたのであるまいか、と色々夫から夫へと思ひ廻して居る一方に、アドネ師は去年九月着島の當時から常ならぬ様子であつたが、近頃になつては日増しに弱り込むばかりである。初めの程は間歇熱だらうと云ふので、キナ鹽を服しましたらなるほど發熱の度は遠くなつた。最初隔日に起つてゐた熱が、二三週間に一度しか生なくなつたが、夫れと共に體がメツキ衰弱して來たので、醫師ならぬルチュルヂユ師で

さへ、其病が唯の熱ばかりではない、何でも肺に異状があるのだと感付いて来た。

幸にもアドネ師は體格が頑丈に出来て居た爲めに、醫師も居らず、薬もなき此の寂しい島地に囚人も同様の日月を送りながら、廿ヶ月の久しき間、結核菌の侵蝕に抵抗することが出来たのである。然れどもこの二年に近き病に、身は骨と皮ばかりに痩せ細り、病の痛苦に寺院生活の寂寞無聊さへ加はりて、堪らない思がしたであらうが、師は何も神の聖意と諦めて、島人の救霊の爲にその生命を神の御手に獻げて、心静に終焉の時を俟つのであつた。

斯て嘉永元年(千八百四)の春となつた。主キリストが光榮を帯びて死者の中から甦り給うたのを祝して、天も地も聲打揃へてアレヤを歌ふ楽しい復活祭が来ても、二人の前途は相變らず暗澹として、希望の光の一條すら射し込で呉れない。他國に傳道せる宣教師等は、今日こそ洗禮を受けて、新に神の子と生れし新信者をば主の尊前に獻げて喜ぶのであるのに、自分等の傳道地ばかりは全くの石婦で、一人の兒すら産げ得ないかと思つては、流石に湧き来る涙を飲んで、太息を洩さずに居られなかつた。

アドネ師は一月頃から聲が薩張り出なくなり、三月には「もう到頭!」と思はれる位であつたので、ルチエルヂユ師は勸めて床に就かさうとしたりけれども、何うしても聴き入れないから、強ひて毎朝六時半までは休ませることにした。然し語學の練習だけは幾ら止めても止まらない。一つは夫れで氣を紛らし、長い春の日の退屈を忘れる爲でもあつたらうが、一日でも受業を缺がしたことはなかつた。然れども其の顔容の物凄さまでに瘡せかけて、頬骨のみ高く突立てる傷ましき姿を見ては、教師等ですら其の終焉の遠からざるを悟りて、竊にルチエルヂユ師に囁いた位であつた。病人自身は疾に諦を付けて、寧ろ死を待遠く思つて居る程であつたが、然し諦め難いのはルチエルヂユ師で、何が苦しいと云つても、此の唯一無二の慰藉に離れるより苦しい思は又と無いのであつた。

二 アドネ師終に起す 四月に入ると病人は幾らか見直したやうで、少しは力も出て来る屋外に出で漫歩きをする事も出来るやうになつた、泥んやミサ聖祭だけは毎朝執り行へたのである。

處が六月二十日の朝、アドネ師は起き出て見ると、胸が通つて息が吐かれない。辛つ

と服を着更へては見たが、もう何うしても立つて居れない、二足三足歩けば直に坐らな
いと氣息がされぬので、其朝からミサを獻げること出来なくなつた。丁度梅雨の節で
あつたから、何でも天氣の所爲であらう、晴れたら持直すであらうと思つて、二人は梅
雨の上るのを今か〜と待つて居たが、晴天は來ても病氣は持直さない。七月一日には
衰弱いよ〜甚しく、息はますます〜逼迫つて、危険の狀態が顯はれて來た。晩になる
と息遣ひが如何にも困難らしく、眼は常になく擴大つて凄光を放つて居るので、ルチ
ユルチユ師は油斷ならぬと見て取つて、夫れとなく注意を促した、
「卿は餘つほど悪い様ですが、長く持てますでせうか」

「私 は未ださう迄は思ひません」

「でも何か言ひ置くことがあれば、早く夫々に始末を付けて置いた方が安心ですよ、卿
が言ひなされる所を、私が書き取つて、卿の方で夫れに署名さへすれば足るのですから、
そして卿は豫て一生涯の總告白をしたいやうに申して居られたが、夫れには及びませ
まい。今は餘り衰弱しきつて居りますし、是まで默想會の序に、幾度も立派な覺悟で

告白なさつたでせうから」

「それは然うです、お蔭で何にも氣に懸ることは遣りませんが、然しいよ〜永遠の世
界に足を踏み入れると云ふ前に、過去を思ひ浮かべて痛悔の情に胸を破るのは悪いこ
とではありません、大なる審判の曉が近づきますと、靈魂の眼に被さつて居る迷
妄の雲が晴れて、罪の重大をいよ〜明白に認めることが出來ますから、明日にもな
つたらソロ〜遣りかけませう」

斯う睦まじげに物語りつ、屋外に出て涼しい夜風に吹れようと二人はやをら身を起し
た。然しアドネ師の手を握れば、粘々した冷汗が滲み出て居るので、ルチユルチユ師は
側を向いて暗涙を零し、直に病人を促して内へ這入り、平生の如く共にコンタスを爪繰
り、夕の祈りを誦へて病人を床に就かせ、何か一口信仰上の話をして友の心を慰めよう
とすれば、アドネ師は「一寸俵つて下さい、ユツクリ息を吐くから」と言ふのも早や蟲の
音で、忽ち二つ三つ長い太息を洩らした。ハット思つてルチユルチユ師は「アドネさん、
アドネさん」と呼ぶまでも〜何の答もない。狼狽へて蚊帳をまくり上げて見れば、モウ

頭は枕の後に落して死に瀕して居る。急いで赦罪式の祈禱を誦へ、善終の贖宥を與へたが、夫れが終ると共にアドネ師の氣息は絶え、玉の如き其靈魂は、主の爲に萬事を抛つた者に約束されある報酬を享くべく、神の御前に立顯れたのである。ルチユルヂユ師は湧き来る涙を飲んで、其眼を瞑らせ、二三日前の約束を思ひ出して、彼の爲に「死者の晩課」と「十字架の道行の祈禱」を誦へて、其平安を祈り、それから友の遺骸の前に平伏して、新日本公教會最初の宣教師の死を、恭しく神の御手に獻げ、十二時の打つ迄も祈り續けたが、明日は逆も徐りされさうにもないので、直とミサ聖祭の準備に取掛つた。

ミサが終ると幾分か心は落付き、抜けて居た力も戻つて來たやうである。悲さを言へば限はないものゝ、然し最愛の友が早や主の喜に入つたかと思ふと、滿更ら慰安がないでもない。終油の秘蹟こそ授かり得なかつたにせよ、臨終の際に要するだけの冥助は皆な受けた。ミサ聖祭を行ふこと出來なくなつてからも、聖體だけは死ぬ朝までも缺さず拜領した。聖務日課(司祭の毎日)も終まで誦へた。十五日前からは餘程發音に苦みながら、聖母の小日課までも加へて誦へるのであつた。二ヶ月前から専ら敬虔の勤に一身を委ね、毎

日々新約聖書、聖人傳、キリストの模範等を読み耽つて、心靜に死の報知を俟ち、いよいよ夫が眼前に顯れ來ても、驚かず騒がず、寧ろ理想的宣教師の喜悦を以て之を迎へたのである。初て病に罹つた頃、もし神の聖意ならば快復の恩を賜はりたいと思つて二人は心を合せて二三度、九日祈禱を誦へたが、其後と云ふものは全く諦を付けて、たゞ忍耐力を求める爲にしか祈つたことはなかつた。實際その忍耐の強いことと言つたら驚くばかりで、毎日語學の練習を續け、幾ら發熱がしてもペンの握れる間は、セツセと書き付けて一日も怠らなかつた。規律を嚴格に守り、毎朝五時にはキチンと起き出るので、最終の六ヶ月間はルチユルヂユ師が強ひて六時半まで休ませた位であつた。司教に遭はず、一人の日本人にも洗禮を施さずして、此世を立つのは如何にも殘惜しく思つて居たらしかつたが、夫れすら神の聖意と諦めて、天國に昇つた上で、日本國民の爲に祈ること出来るのを切めてもの慰悦と思ひ、死の來るを今や遅しと埃ち詫びて居たのである。

三 アドネ師の葬儀

七月二日、三人の役人が攝政(藩王幼冲なりしを以て攝政を置いて

あつた。首里官、那覇官の悔状を携へて慰問に來た。葬儀にも參會したいと云ふからルチユルヂユ師が快く許してやると、死者の墓に魂祭をさして呉れ、と言ひ出した。斷つても斷つても、聽入れさうにも見えない、生きて居る時も死んでからでも、人は矢張り人、神には成れない、祭るべき筈のものではない、と半時間許りも論じて見たが何うしても納得しない様子であるから、終には佛蘭西の國法に禁する所だから、と云つたら、役人は漸く得心して、其まゝ引退つた。葬儀の時に寄せて呉れた同情やら、其御叮嚀な悔状やらを一見したらば、琉球の官吏ほど親切なものはないと感服しない人があるまいが、それこそ彼島一流の外交の手で、何か都合を仕出かしたと見るや、直に饗宴に招く、禮物を持って來る。謝絶つて受取らなければ何よりも心苦しう感ずるらしい、然れども暫く経ては復た平氣で前の不都合を繰り返すのであつた。併しアドネ師の逝去から十五日間と云ふものは、流石に遠慮したものと見えて、何一つ不愉快な事は仕向けなかつた。

扱七月三日の朝になると三人の役人が多くの供廻りを隨へ、白の喪服を着流して聖現

(狀現の頭年八十治明) 墓の師アドネ



寺に來た。ルチユルヂユ師は祭壇の周圍に黒幕を張廻し、棺の前に立つて死者の夜課と讃課とを誦へた後、ミサ聖祭を執行ひ、終つて十字架を先頭に、徐々と墓地へ向つて進んだ。墓地は聖現寺から僅かに數歩を隔てた海岸のコンモリと茂つた松林の中で、二年前に佛蘭西の海軍々醫を葬つた所である。公教會の葬儀の如何にも鄭重で、壯嚴を極めて居るのを初めて見た人々は孰れも感服した。なるほど公教會では死者を禮拜こそしな
いが、心から之を敬重すると云ふことだけは十分に認めたらしい。墓には立派な十字架を樹て、碑は漆喰で幅三尺に長さ六尺、高さ二尺位に造り、其上に廣い平な石を載せて、夫れに

「フランス人たる司祭にして日本の宣教師となり、千八百四十八年七月一日琉球に於て歸天せるマテオ アドナ師の遺骸茲に安息せり」

と彫り付けた。安政元年にゲレン (Guerin) 提督が琉球政府と交換した條約中には

「凡そ泊村にある佛蘭西人埋葬の墳は、地方官、時に常に保護して、毀壞するを得な

「からしむべし」
 と云ふ條項が特に加へてあつた上に、由來琉球では墳墓を大切にする習慣があるお蔭で、アドネ師の墓碑も十字架こそ失なつたれ、昔ながらの姿を留めて今に至るまで厳存して居る。たゞ五十年餘の風雨に大分黒うなり、多少傷んだ所もあつたので、鹿兒島縣の大島に傳道せるフエリエ(Herrie)宣教師が、明治三十二年に琉球を視察せる際、之を修理して原形に復した。

アドネ師の歸天後二三日もすると、琉球のジャンクが支那から戻つて来て、フオルカド司教が教皇權代理の名義を以て香港に足を駐め、日本入國の機會を狙つて居ると云ふ報知を齎した。然し司教からは何の命令も來ないので、ルチエルヂユ師は何うで一先づ香港へ渡つて、一別以來の事情を申述べて、其の指導を仰がねばなるまい、と思つて居る矢先に、八月二十六日思ひ掛もないフランス軍艦が入港した。ルチエルヂユ師は之に便乗してマニラへ赴き、それより英國汽船に乗つて香港へと渡つた。



第七章 宣教師香港に足を駐む

一 日本入國の冒險的計畫 フオルカド司教が香港の教皇權代理を仰付けられた結果、宣教師等は一時琉球を引拂つて、此の英國の新殖民地に足を駐めて、新に日本入國の策を運らすこととなつた。

是より先き香港が英人の努力によつて次第に發展し、東西貿易の中心地たるの觀を呈するに至るや、外國傳道會の會計部も、マカオから此處に引移つたのであるが、嘉永元年(千八百四十八年)四月二十七日突然會計部の門を叩く二名の宣教師があつた。一名はトミヌデマスル(Thomine Desmazures)と呼び、佛國バイエウ(Bayeux)教區の副司教となつて居たのであるが、年已に四十三歳と云ふ時に、外國傳道會に入會し、燃ゆるが如き傳道熱と、剛毅物に屈せざるの精神とを以て有ゆる困難に打勝ち、終に支那の四州省へ派遣されることゝなつた。今一名は貴州省の傳道地へ赴任すべき血氣盛りの宣教師で、其名をマオン(Mallon)と稱し、共に六ヶ月餘の航海を了へて無事香港に到着したのであ

る。到着して見れば。早や時期が遅れて、來秋を俟たねば楊子江を溯ること出來ない云ふ。已を得ず會計部に轉がつて支那語を學んで居ると、恰もよしフォルカド司教が香港の教皇權代理に任せられた、と云ふ通知がリボア會計部長の耳に入つた。部長は司教の爲に兩三名の宣教師を周旋したらと思ひ、二人に「日本の宣教師となつては如何だ」と持ち出した。其頃までは「日本」と云へば直に「殉教」と聯想される程であつて、教の爲に一命を抛つのは、宣教師たるものが常に何よりの幸福とする所であるから、二人は飛立つばかりに喜んで之に應じた。殊にトミス師の如きは、熱血性の人であつた。いけに、直様日本へ忍び入る工夫に取掛つた。師の考では、琉球へ渡つても今分では到底見込が附かない、寧ろ北の方樺太か千島かに推渡り、時機を見て本土へ忍び込むに若くなした。唯だ困る所は船の一條で、商用の爲に樺太方面へ出掛ける船とてもあるまいが、然し沿岸を航行する支那ジャンクを雇ひ、自分で航海長となり、水夫等を指揮して舟を行つたら、容易に目的の彼岸に達することが出来る。斯う思ひ込んで早速佛國に書面を飛ばして、遠洋航海用の羅針盤、六分儀、經線儀、海圖などを注文すると共に、

親戚知友に向つては寄附金の募集を始めた。

兎角する中にフォルカド司教は、ムニクウ師(會計部の助手)と聖パウロ會の修道女等を率ゐていよく香港に乗り込んで來た。香港の傳道は是まで以太利出身の宣教師に委託されてあつたので、今度フォルカド司教が之を管理することになつても、其爲にイタリアの宣教師が手を退く譯ではなく、たゞ傳道會の宣教師が彼等に力を合せて活動すると云ふだけで、双方を巧く調和して行くのは司教の爲にナカノの骨であつた。然し働ける間は働く決心で、トミス、マオンの兩師に、近頃來着したジラル(Girard)師を合せて、都合四人が夫々に手分けして傳道に従事して居る中に、ルチュルチ師がヒヨックリ琉球から歸つて來た。一同は喜んで此の勇敢なる宣教師を迎へた、視れば顔は蒼白め、身は瘦せこけて、アド子師との死別やら、獨ボツチの物寂さやらで、如何にも寔れ果てた様子が歴然と讀めるのであつた。所が不思議にも彼が琉球土産として、胸中に書いて來た日本入國の新計畫は、トミス師のと符節を合せたが如く、小船に打乗つて樺太島へ推渡らうと云ふのであつた。其理由とする所は斯うである。

「是までの經驗を以て見れば、琉球の傳道は全く見込がない。なるほど人民は善良で質朴で少しの申分もないのであるが、惜しい哉彼等は全く官吏の奴隸である。政治上から云つても、宗教上から云つても、外國人を敵視して居る官吏の奴隸である固より敵視して居るとは云ふもの、我々に向つて傳道を禁示するだけの勇氣はない、たゞ人民を威嚇して、我々の教を聴くことも、共に談話を交へることも、少の注意を拂ふことすら嚴禁するので、何とも手の出し様がない。一體我々が軍艦に塔じて向ふへ渡つたのが善くなかつた。我々はフランス政府の通譯官と云ふ肩書を有つて居る。皆から土地の探險に渡つた佛國官吏だと見做されて居る、日本人は昔から宣教師を以て本國政府の間諜でゝあるかの様に思つて居るのに持つて來て、堂々と官吏の肩書を着けて乗り込んだものだから、いよ／＼彼等の謬想に裏書したやうなものだ。自分等は決して佛國の官吏ではない、唯だ天の道を傳へたいばかりに渡來したのだ、と云ふことを口を極めて説いて聞かしても、一向信用して呉れないで、矢張り「フランスの御役人様」と曰うて居る。尤もセシル提督の好意は幾重にも感謝しなければならぬ。羅馬からは連りに琉球の傳道をせついで來る、渡航の便はなし、途方に暮れて居る所に、提督のお蔭で安穩に向ふへ踏み込み、四ヶ年餘りの間も滞留つて、土地の様子も大分解つて來た。今では渡りたいと思へば何時でも渡れる。然れども渡つて見た所で、一人の信徒を得ることすら覺束ない。寧ろ他の方面から直接に日本の本土へ入り込む工夫を運らした方が成功の徑捷ではあるまいか。夫も大砲の蔭に隠れて行つては駄目だ、唯だ天主と聖母の御保護の下に忍び入り、暫し奥山にでも隠れて樵夫柚人と狎れ合ひ、之を歸教せしめて傳道者に用ひることにしたら、滿更ら成功の見込が立たぬものもあるまい。危険は固より危険である。然し虎の穴に入らなくては虎の兒は得られぬ譯で、危険を慮り、迫害を恐がり、死を怖ける様では宣教師の仕事が何一つ出来る筈がない。」

是がルチュルヂユ師の琉球から考へ込んで來た所なので、トミス師は同志を得ていよ／＼勇み立ち、連りと氣を焦て、出發に要する資金の調達を佛國の知人に迫るのであつた。

二 新計畫の頓挫 トミス師の冒險的計畫は、乗るか反るかの大決心で掛らなければならぬので、フオルカド司教は一向それに氣乗がせぬ。考へれば考へるほど何うも無謀な冒險で、琉球に於けるのと同結果に終りさうにはかり思はれてならぬ。寧ろ心靜に時を俟たう。自分が確な筋から聞き込んだ所によると、二年以内には、英か米か軍艦を日本に差向けて、開港を強迫る筈になつて居ると云ふから、夫れに先じては、丁度間諜の様に思はれて面白くない。兎に角鎖國の門の破れるのも遠くはあるまいから、夫れを竣つて先づ開港場に入り込むことにする。たとへ内地へ這入れないにしても、附近の日本人に教を説くこと丈は出来る。是が司教の考で、實に穩健確實な説であつて、事は皆な其先見通りになつたのであるが、唯だ司教の豫想の如く迅速に運ばなかつたばかりである。

司教は十月三十一日と十一月二日とに部下の宣教師等を會して、次の如く言渡した。「來春を俟つて日本へ發向する企謀は中止して貰ひたい。なるほどトミス師の計畫も全く實現し難いとは言はぬが、何分先立つものは金銭で、夫れが爲には、少くも二萬

五千乃至三萬フランは掛るものと覺悟せねばならぬ。確かな見込も附いてない事に其程の大金を費すよりか、寧ろ費用も掛らず、危険も踏まずに入國されるまで俟つ方が安全で、賢い遣り方ではあるまいか。夫れまでには香港にも活動の餘地は十分ある。なるほど其畑は荆棘の生々繁つた荒地で、随分と骨も折れるは折れるが、然し琉球に於けるが如く無事に苦む憂はない。其上、是までイギリス人やポルトガル人やを受持つて居た宣教師が不意に出て行つて了つたので、マオン、ジラルの兩師は、代理するものがないから何うしても香港から手放すことは出来ない。固より兩師とも日本の宣教師であつて見れば、時機さへ來たら、日本へ派遣するのを躊躇すると云ふ譯ではない。たゞトミス師とルチユルヂユ師だけは、來春にもなつたら、樺太なり、千島なりへ向つて探險に出掛ける許可を與へる考であるから、今から日本語の學習に取掛つても差支はない。然し夫れは單に探險するまでであつて、探險した上では、一應香港へ引返して、經過の如何を報告して貰はねばならぬ」。

宣教師等は司教の申渡に答へて、探險旅行だけでは、何うも眞劍になれない、徒

に貴重な時と金を費すばかりである旨を述べて見たが、司教の意は案外強硬で、一歩も自説を曲げなかつた。

夫れより數日を経て十一月十二日に至ると、司教は何う考へたものか、私にトミス師を自室に招き、卿の冒險的計畫の爲に、他の宣教師までが浮腰になつて、頻りと空想を浮べ、専心香港の傳道に従事して呉れなくなつて困るから、卿は寧ろ最初の任地たる四川省へ赴いて下さらぬか」と依頼した。流石のトミス師も寢耳に水と驚かされたであらう。是はごまで熱心に計畫して居る所を譯もなく打棄て、他へ赴任すると云ふは、人情として忍び難い所もあつたであらうが、然し一片の野心もなく、唯だ神の光榮を第一に心掛けて立ち働く公教宣教師のことなれば、是も神の聖意と諦めて、早速旅装に取り掛り、そこへ暇を告げて四川省さして發程した。師は後千八百五十七年に至つて、四川省を去り、シノポリス(Sinopolis)の司教、西藏の教皇代理となり、大に其辣腕を振つて西藏教會の爲に活動されたと云ふ。

三 司教空しく日本の開國を俟つ

トミス師が不意に四川省へ赴任したので、後に遣つた宣

教師等は呆氣に取られて、茫然と爲す所を知らざる有様であつた、取分け一番力を落したのはルチユルヂユ師であつたが、然し堅忍不拔の精神に富める師のことであれば、間もなく是ではならぬと氣を取直して、新に支那語の學習に取り掛ると共に香港守備隊と附屬病院の教師を兼ね、シラル師はポルトガル人、イスパニア人の爲に心血を濺いで立ち働き、マオン師は特の外敬虔篤く、常識に富み、何處から見ても申分のない良宣教師であつたから、司教の顧問に備はり、聖パウロ修道會掛りを兼ねる上に、數名の支那少年に拉丁語を教へることとなつた。

さてフォルカド司教は香港より眼を遠く日本の空に放つて、開國の曉鐘の一刻も早く打鳴されがしと跋ちあぐんで居る。英か米かの威力によつて、遠からず鎖國の鏡門が破られる筈だと、香港在住の英人から幾度となく聞かされたのを樂みに、首を延ばして其吉報を俟てども、吉報は容易に來さうにも見えない。嘉永二年(千八百四十九年)の五月二十日、米艦ベブル(Belle)號が、日本に漂流した米國人を受取つて香港に立寄つたが、其言ふ所によれば、キリスト教の禁制は今猶は嚴重に勵行はれ、漂流者までが十字架

を踏むべく強ひられ、拒絶したものは無法にも監獄に投せられ、毎日少量の米飯と鹽魚とに辛うじて命を繋いで来たとかで、ペブル號の艦長もブン／＼怒つて、歸國の上は政府に事の始末を訴へて、日本國の上に注意の眼を注がせる考だと思捲いて居た。然し夫れとて餘り頼にされるものでもないので、司教は心靜に神の聖慮を待ちつゝ、勞多く功少き香港の荒野を鋤き返へして、福音の種子を下して居たが、幸ひ此年の御復活日には、十人の支那人に洗禮を施すことが出来た。

然れども香港の傳道は司教の爲に一向面白くない。教皇權代理と云ふ名義は戴いて居ても、實は事毎にイタリヤ宣教師の掣肘を受けねばならぬので、思ふ存分、腕を振つて斬り廻すことが出来ない。彼や此やで司教も遂に愛相を盡かし、寧ろ教皇權代理の任を辭し、再び琉球へ渡つて日本語を學び、徐ろに入國の機を俟つに若くなしと思ひ、パリの傳道會本部に申請して解任を求め、夫々に準備を整へて便船を俟つて居る矢先き所用あつてマカオへ赴いた歸りに、汽船の中で料らすも一人の日本人に出遭はした。生れは肥前の島原で、ズット前に支那へ流れ着き、新教派の洗禮を受けてキリスト教信者

となり、流暢に英語を繰り、見るから一個の好紳士と成り濟まして居る。此人の話によつて司教は始て分つた、自分が二ケ年の間、教師もなく書籍もなしに、非常な苦心を重ねて漸く習ひ込んだ琉球語は、純粹の日本語ではなくて、實は日本語の轉訛つた、極く拙い、日本人には逆も解らない方言だと云ふことを。さすれば今更ら琉球三界まで渡つて行く必要はない、幸ひ今の人から香港に居住する筈だと云ふから、寧ろ之に就て眞正の日本語を學ぶことにしよう。斯う決心して香港に歸り着いて見れば、香港政廳附の語學者グツラフ (Gutzlaff) 氏からは、是も同じく日本の漂流者で、而も前の島原人より少しは年長けてから國を出ただけに、一層日本の國語、風俗に詳しいのを借して呉れると言つて來た。時に新教側では、早や日本語の文典やら、舊新約聖書やらの翻譯に着手して居ると云ふ話であつたから、司教も今は一刻も猶豫すべきでないと思ひ、九月十七日からいよいよ日本語の勉強を開始めた。

四 司教病を得て外國傳道會を去る 然しフォルカド司教は、琉球に於て甚く健康を害つた上に、香港に赴任してからも色々と氣を揉むやうなことはばかり發り、お負けに此の熱帶

地の炎暑に當てられて劇しい下痢を起し、マカオに轉地療養を試みても、快復の見込みが立たぬので、己を得ず教會の事務をリポア師に一任して、シンガポール、マラツカ、ピナン等をブラリ／＼と遍歴つて、徐に快復を計り、九ヶ月許りも経て、嘉永三年(千八百)の九月二十五日、殆ど舊跡に復して香港へ歸り着いた。所が數日の後、姉君アル(五十年)の九月二十五日、突然腦膜炎に侵され、三十六歳を一期として歸らぬ旅に就かれたので、ホンシヌ童貞が突然腦膜炎に侵され、三十六歳を一期として歸らぬ旅に就かれたので、漸く回復したばかりの司教も、舊病再發、今は進んで日本へ押渡るか、退いてフランスに歸るか、二つに一つを選まねばならぬ羽目となつた。さしも常識に富んだ司教も、かゝる場合となつては幾分か氣も辛立つて來たと見ね、十八世紀の始にシドッチ (Sidotti) 靈父の試みた無謀極まる冒險を企て、萬一を僥倖しようと思ひ立つた。と云ふのは佛か米かの漁船に便乗して日本の近海に赴き、夜陰に江戸附近に卸して貰ひ、身に司教の正服を纏ひ、胸に十字架を輝かして、白晝公然江戸に乗り込んだら、必ず大官の前に引据ゑられるに相違ないから、其時堂々とキリスト教の眞理を述べて、之を宣布する許可を願ひ出ようと決心し、ローマの布教聖省長、樞機員フランソニ (Fransoni) に上書

して、自分の計畫を教皇陛下に開陳して何分の指令を請ひ、併て香港の教皇權代理の任を解かれんことを嘆願した。

上書した時は、早や解任の辭令が下つて居たものと見え、一ヶ月と経たぬ中に夫れが司教の手に入つたので、香港の傳道は再びイタリア宣教師の管理に歸し、フランスの宣教師は唯だパウロ會を監督するだけになつて、マオン師が之を受持ち、ジラル師はリポア會計部長の隨意に托せることになり、ルチエルデユ師は廣東省に赴任したが、後で廣東の教皇代理となり、信仰の爲に獄に繋がれ、千八百六十一年七月十五日を以て聖なる終を遂げられた。

フォルカド司教の豫期に違ひ、日本の鎮門は容易に開かない。マオン師は病餘の司教と唯だ二人きりで、ボカンと東の空を打眺めつゝ、其年も空しく過して、翌嘉永四年(千八百一十)を迎へることになつたが、其一月二十五日に至つて、日本語の教師たる島原人に洗禮を授けることが出來たのは、切めてもの慰悦であつた。マオン師が代親となり、フォルカド司教が式を主つたが、思へば弘化元年に琉球の地を踏んでから茲に七年、始めて

日本人の額に洗禮水を濺ぐの幸福を得たので、而かも此の新信者が深い謙遜の態度もて拜跪き、耳懐しい日本語の祈禱を誦へる光景を面りに見る師等の喜悦は、譬へやうもない程であつた。して此日は聖パウロ改心の祝日ではあつたし、三百年前に初めて聖フランシスコを日本へ案内した彌次郎安西も「聖なる信仰のパウロ」と名けられたし、それ等に因んで靈名をパウロと付けた。彼はナカノ利發にもあれば熱心でもあり、是からは宣教師と同居して、いよく日本へ乗り込んだ上は、出来るだけの力を盡さうと云ふ決心であつた。然し後では如何なつたやら、早世したものか、最初の熱心を失つて逃亡したものが薩張り分らない、宣教師等も此時から彼に就て一言も記して居ない。

さてフォルカド司教は、病勢次第に募り來つて、最早や如何ともすべからず終に醫師の勸告に従ひ、孤兒院の事務は一切マオン師に打任して、マニラへ轉地療養にと出掛けた。然れども其衰弱の餘りに甚しいのを見て、マオン師は出發に臨み船長に心付を與へて、たとへ途中で萬一の事があつても、死体だけは海中に投げ込まないやう、呉々も依頼した位であつた。

マニラに於て司教はドミニコ會の修道院に身を寄せて、その鄭重なる看護を受けたけれども、病勢は依然として見直す模様がない。旅行して氣を紛らしてはと勸めるものがあつたので、フランス船に客となり、厦門、寧波、上海等を往復して、専ら療養に務めて居ると、其年の暮れ方に、上海はゼズイト會の徐家匯の聖堂に於て、支那の司教會議が開かれることになつた。フォルカド師も夫れに列席したが、司教等は師の枯焦れ果てた姿に甚く打驚き、今は故山に歸して快復を計らしめるより外はないと思ひ、相談の上、決議録を携へてローマの布教聖省へ赴き、不明な点があれば説明の勞を取つて貰ふことにした。フォルカド司教も其勸告に従ひ、嘉永四年(千八百五十二)十二月三十一日香港に立寄り、リボア師に自分が今度いよく外國傳道會を退かねばならぬ事情になつたことを告げ、明けて一月二十七日香港を發し、四月六日無事ローマに到着して、使命を全うした上で故山に歸り、一ケ年ばかりも療養に力を盡して、漸く舊の健康を回復することが出来た。そこで改めてフランスのガドルupp(Guadeloupe)教區の司教に任せられ、尋でヌウエル(Nevers)教區、エキヌ(Aix)教區等の司教に轉任したが、其間にも一日とし

て其の愛する最初の傳道地を忘れること能はず、夢は絶えず山青く水清き日本の地に彷徨つて居たと云ふことである。



第八章 神奈川條約と三度目の琉球行

一 マオン師途方に暮れる マオン師は、フォルカド司教に離れてからは、渺茫たる洋中に舵を失へる捨小舟も同様、唯だ東の空を打眺めて思案の首を投げるばかりであつた。満州のウエロル(Varrols)司教からも、朝鮮のベルナウ(Berneux)司教からも、唯今の所では、満鮮地方より忍び入る見込は全くない、と言ひ越して來た。アメリカ捕鯨船長等の語る所を聞くに、日本の沿岸には到る所、嚴重な見張が附いて居て、何んな小島に近いても直と二本差の役人が遣つて來る、或時の如きは北日本で破船の厄に遭ひ、ボートに乗り移つて辛つと岸に近くと、例の二本差が出て來て上陸を許さない、食料品は

與へても上陸だけは何うしても許さない、己を得ず寒風に吹き晒されつゝ、數晝夜を明し暮し、漸く他の捕鯨船に收容されて一命を拾つた位であつたと云ふ。マオン師は曩にトミヌ師の考案せし大冒險を試み、漁船に便して宗谷海峡に乗り込み、樺太へなり蝦夷へなりに忍び入らうと前々から考へて居たのであるが、此鹽梅では逆も成功の見込がない。其上ローマの方でも、從來の如く日本の傳道を外國傳道會に一任するであらうか。ゼズイト會に委託することにもなりはすまいか、夫れすら一向分らないので、獨で色々氣を揉むばかりであつた。

二 神奈川條約 彼此する中に北米合衆國では、有力なる艦隊を派遣して、是非とも日本に開國を迫らうと云ふことに衆議一決し、嘉永五年(千八百五)の二月に先發艦隊は既に香港に集合して、提督ペルリ(Perry)の本國から來着するのを待ち合せることになつた。マオン師も多年苦節を守つた甲斐が顯はれて、茲に漸く希望の曙光が射し初めて來たので、提督の渡來の一刻も早かれがし、と首を延ばして埃でども埃でども、提督ナカク遣つて來ない。翌嘉永六年の四月七日に至つて漸く香港に乗り込み、夫れより

上海 琉球を経て、七月八日(陰曆六月三日)軍艦四隻を率ゐて突然浦賀灣頭に顯はれた。幕府は上を下へと騒ぎ立ち、常例によつて長崎へ逐ひ遣らうとしたけれども、ペルリ頑として應せず、大統領の國書を奉呈しなければ一步も退かざる決心で、軍艦には夫々に戦闘準備を命じ、スワと言は、兵火にも訴へんばかりの勢を示したので、幕府も已を得ず假りに館を久里濱に設けて、大學頭林健、浦賀奉行戸田伊豆守氏榮、伊戸岩見守學弘等を遣し、ペルリに應接して其國書を受けしめた。ペルリは今こそ日本人の度膽を奪はんものど三百人以上の陸戰隊を率ゐて、威儀堂々と久里濱に乗り込んだが、應接員は孰も石像の突き立つたが様に、身動きもせねば口も開けない、たゞ提督の出入に起つて敬禮したのみで、會見は僅に二三分間で済んだ。提督は二三日中に纜を解き、琉球を経て廣東へ赴き、來年の四月か五月かには再び來つて、將軍の答書を受くべき旨を告げて其席を立つた。果して七月十七日浦賀を出帆し、同二十五日那覇港に錨を卸し、琉球政府に對して強硬な談判を持ち掛けた。米國と通商貿易を約せず、石炭貯蓄所を設ける許可を與へず、將校水兵が上陸した折に、依然小役人を附纏はせるならば、陸戰隊二百名を

遣して首里を占領すべしと威嚇して、琉球人を屈服せしめ、八月七日香港に歸り着いた。日本將軍がアメリカ大統領の親書を受けたと云ふ噂がバツと諸外國の間に散るや、フランス、ロシア、イギリスの諸國も俄に色めき立つて、我も我もと日本へ推掛けさうな勢となつて來た。ペルリは他國に先せられては一大事と、期日を繰り上げて翌安政元年二月十一日、軍艦十隻を率ゐ、舳艫相啣んで神奈川灣に進入した。幕府の驚き一方ならず、林大學頭、大目付井戸對馬守、鶴殿民部少輔等を應接員に命じ、浦賀奉行伊澤美作守、戸田伊豆守と相議して談判に従事せしめた。ペルリは前年にも優つて強硬な態度を取り、強ひて開港を肯せざれば、將軍の脚下に大砲を打込み、忽ち江戸城を焦土にも成さんばかりの氣勢を見せた。幕府は夫れに氣を吞まれ、家光以來の祖法を曲げて、彼の要請を容れ、終に五月三十一日(陰曆三月廿三日)和親條約十二ヶ條を締結し、

- 一、兩國民は永世和親を結ぶべき事、
- 一、下田、函館の二港を開き、薪水、食料、石炭を給する事
- 一、漂流民を撫恤み、長崎に於けるオランダ人に對するが如き取扱をなさる事。

一、必要と見れば、アメリカの官吏を下田に駐劄せしむべき事。

等を約した。是が有名なる神奈川條約、又はベルリ條約と稱するもので、未だ通商條約でこそ無かつたにせよ、二百有餘年の久しき間、鎖國の夢を貪つて居た我國が、始めて眼を醒まして、歐米の文明と接觸するに至つたのであるかと思へば、我等が何時になつても忘れてならない所である。尋で幕府はロシア、イギリス、オランダの三國とも同様の條約を結び、下田、函館、長崎の三港を開くことを約した。

三 宣教師三たび琉球に入る

是より先き布教聖省では、鎖國の鉄門が撤廢られて、宣教師が足を日本の土に印するのも遠い事ではあるまいと見て、フォルカド司教の代りに、外國傳道會の宣教師で、満州に活動して居るコレン (Collin) 師を日本の教皇權代理に任じた。コレン師は命を拜するや、早速香港へ向つて赴任の途に就き、途中からリポア會計部長に書を飛ばして、今一度琉球へ渡る考であるから、ジラル師と他に一二名の宣教師を一足先きに那覇へ差遣し呉れるやう申送つた。然し其身は雪解けの泥路を二百里以上も、支那式のガタ馬車に揺られ揺られて旅行した爲に、遼東に到るに及んで肝臟炎を

惹起し、腸チフスまで併發したので、安政元年(千八百五)五月二十三日、ウエロル司教の手に擦られつゝ、安然として永い眠に就いた、享年僅に四十三歳。

コレン師は永眠されても、ジラル、ヒウレ (Furet) メルメ (Mermet) の三宣教師は其遺志を紹介いで、安政二年(千八百五)二月十一日フランス商船リオン Lion 號に便乗して琉球へ推渡つた。外國傳道會員で、上海に赴任すべき三名の宣教師も同行した。那覇に錨を卸すと三名の役人が多くの供廻を引連れてリオン號を訪れたから、ボンチ (Bonnet) 船長は厚く之を待遇した上で、教師を島に残し置きたい旨を打開けた。吃驚して役人等は暫しが程は辭さへ出せなかつたが、漸く口を切つて、「島を巡視することすら六ヶしい、駐まるなんて夫れは全く出来ません」と斷然拒絕した。翌日は早朝から使者が來た、鶏、卵、野菜、薩摩芋に山羊と豚と各一頭づつを寄贈した上で、頭をベコく下げながら「必要な品は何でも手前等から持つて上りますから、上陸だけは止して下さい」と頻りに頼んだ。でも此方の目的は上陸するに在り、否な上陸して居住するに在りだ。向ふで何と言はうが、如何ほど泣き付かうぞ、一切頓着しまいと腹を据ゑて居るので、船長と

シラル師は構はず上陸して一談判やつて見たが、向ふも今度と云ふ今度はナカク腰骨が強い。「土地も食料も一切島人の爲に必要で、外國人に與へるものとは一つも残らない」と言ひ張つて、何時かな聽容れさうにも思はれぬ、商船から來たのを見て、高を括つて居るのであらう。宣教師等もいよく決心の帯を締めた。

「上陸だけは槍が降らうと火が降らうと必ず斷行する、食物は給與つて貰はなければ自分で心配する迄だ。家は貸して貰はなくとも、風の吹き通す癩屋でも見付け出せば夫れで當分は雨露を凌がれる。ソんな事は覺悟の前だから少しも厭はないが、唯だ島人が此方の顔さへ見れば周章しく逃げ出し、家の戸はビタ／＼と閉め切つて了ふのは全く閉口だ。憐れなる民よ、我等の與へんとする寶の何たるかを知りたらんには!!!でも我等は此の質朴なる島人を愛する、我血は流し盡しても、彼等に信仰の賜を得させること出来たら、如何ばかり幸福であらうものに!!!」

とは宣教師等の當時の感想であつた。

四 島人終に風す 三月一日シラル師とボン子船長は、再び那覇官に會見を求めて交渉し

て見たけれども、頑として聽入れない。船長は折角是まで力を盡したのが悉く水の泡と消え失せるかと思つて、餘ほど落膽して居るらしいが、宣教師等は案外平氣なもので、翌日は正午頃から同行李を携へて上陸し、直に聖現寺さして路を急いだ。聽て眞白い鬚を長く生した、昔の族長そつくりの那覇官が、二名の下役と多くの供廻とを従へて乗り込んで來た。長い談判の揚句「私一個の料見では何とも返答が出来兼ねますから、四時頃一緒に攝政様をお訪ね致しませう」と曰つて歸つて了つた。さて約束の時間に那覇の公館を叩いたら、一人の老吏が出て來て「六時までお待ち下さい、攝政様は貴下等の御上陸につけて、大變に御立腹遊ばしてゐますので、二時間の後でなければ、御面謁は出来ないうでゐます」と告げた。因つて思ひ／＼に其邊を歩き廻り、定刻になると、ボン子船長が先頭となり、數名の琉球官吏とその供廻が之に従ひ、六名の宣教師が又た其後に附隨して進み、公館の大廣間に案内され、攝政、那覇官等と差向ひに坐を占めた。初對面の挨拶が済むと、攝政が長文の書面を取出して之を船長に渡した。同行の支那人に通譯さして見ると、其大意は斯うである。

「琉球には古來一定の宗教有之候へば、基督教は全く無用に御座候。孔夫子の教を説くことすら許されざる此國に、況して外國の宗旨を弘むるが如きは斷じて許し難く候。早く行李を收めて歸國なしたされ度。左もなくば他の歐巴人も後より續々と推しかけ来るに相違無之、斯くては此の小さく貧しく、僅に青草を生じて島民の衣食に充て居る位の我琉球は、見る／＼彼等の侵略に委せられ、島民は餓死するより外なかるべく候ふ」

是まで宣教師等は努めて自分等の目的を隠蔽し、唯だ宗教家で、學術研究の爲に渡來したものの、如く装うて居たのであるが、向ふも左るもの其處を直と看破つて、眞向から問題の中心點に打突つて、單刀直入キリスト教の宣布を拒絶し、退去を迫つて來た。して此上はもう談判の餘地なしと云はんばかりに、攝政は席を起つて奥に入らうとした。「まア暫く」と引止めて、シラル師が得意の快辨を振つて一々攝政の説を論破し、自分等は琉球の利益は計つても、毫毛の危害でも加へるものではないと云ふことを、滔々と陳べ去り述べ來りて、終には、

「私等が御國へ參りましたのも、義務に迫られたる事でありますれば、何うしても歸國することは出来ません。船長も私等を再び其船に乗せ取る譯には參らないのです。虐待なされるなり、殺しなされるなり、夫れは御随意でありますが、私等の方では、假令首が切れて飛んでも退去は致されません。殺すなら何うぞ殺して下さい」と斷然言ひ放つた。攝政も斯うまで腰強く出られては、流石に拒絶する勇氣もなく、其上、海賊退治にフランス軍艦の助勢を請はねばならなかつたので、到頭我を折つて、二三月の中には必ず引取る、と云ふ條件の下に、シラル、ヒウレ、メルメの三師に、聖權寺に駐まる許可を與へた。

談判は二時間ばかりも掛つたが、其間に攝政から通譯官、供廻に至るまで、何れも威儀端正、進退度に適ひ、溫和に鄭重に、其の最も好まぬ談判たるにも拘らず、腹立しい素振一度見せるのでもなければ、荒々しい言葉一つ聞かせるのでもなく、給仕等までが何時もニコ／＼と打解け顔で應接する態度と來ては、實に感心の外なしで、ボン子船長の如きも「今まで随分と諸國を廻つて視たが、此んなに禮儀の正しい民は見たことがな

い」と感嘆した位であつた。

兎に角宣教師等の希望は達せられたので、一同勝利を喜びつゝ、公館を辭して、聖權寺へと歩を向けた。時正に晩の八時半で、島の男が二人松明を掲げて案内して呉れた。官から許可があつた上は、寺院の方でも別に苦情を言ふ譯もない。寺男までが出て来て、室を片付けたり、荷物の始末を付けたりして呉れた。翌日ボンチ船長は態々聖現寺を訪れ、様子を見届けた上で、纜を解いた。

三 ヒッレ師の長崎行

フォルカド、ルチユルヂユ師等が聖現寺に於て嘗めさゝれた辛酸のほどを思つたら、今度の宣教師等もリオン號の出帆後、如何なる憂目を見たか位は想像がつくであらう。強情を張り通して攝政を叩ませ、辛つと聖現寺に落ち附くことになつたはなつたものゝ、初の二日間と云ふものは、全く食料品を供與はれない。島人も遣り込められたが残念なさに、責めてもの腹癒せに兵糧攻を試みたものであらう、然し其位の事は覺悟の前だ、チャンと萬一の用意は出来て居たから、斷食まではしなかつた。一三日もすると次第に額の皴も展びて、終には宣教師等を以て、鄭重な、惡氣のない

學者だ、と信するやうになつては來たが、然し其取締の嚴重な事と云つたら、前々の宣教師に對してよりも、優りはしても劣りはしないと云ふ位、内には十五人からの番卒が始終附きりで監視して居る。外へ出ると大勢で前後を取巻き、「敵が來たぞ、敵が來たぞ」と觸れ知らせるので、皆な一目散に逃げ失せて了ふ。附添の役人の語る所によれば、唯だ宗教の話聞かうとしたばかりでも、死刑に處せられることになつて居るとか云ふことである。

二ヶ月ほど経つて、五月六日日曜日の午後四時頃に「外國船が見えました」と告げる人があつた。夕飯の箸を投げ下し、望遠鏡おつ取りしな覗いて見ると、艦に外國船、而も橋頭には懐しいフランスの國旗をヒラ／＼と躍らして居る。艦で一隻のボートを卸し濱邊を指して漕ぎ付ける様子である。二時間ばかりも待つて居ると、軍艦シビル號の將校が三名やつて來た。視れば其一名はバリ大司教の甥に當るシブウル大尉で、「ヒッレ師は居りますか。連れ戻しに參りました」と愛嬌の好い底力のある聲で叫びつゝ、リポア師からシビル艦長からどの書面を差出した。

フランスも近々日本と條約を締結することになるであらう、夫れには差當り通譯が必
 要なので、水師提督ラゲルはリポア師に請うて、琉球の宣教師を一名、通譯として軍艦
 に乗込ませることにしたのである。尤もヒウレ師は未だ日本語が話せる譯ではなかつた
 が、丁度其頃、歐州では露土間の戦争に英佛が干渉して、所謂クリム戦役がおつ始ま
 り、其餘沫が東洋方面にまで及んで、英佛の軍艦は聯合して露艦の跡を逐ひ廻して居た
 のである。其爲に戦役中佛艦一隻は函館に碇泊する見込であつたから、ユル／＼日本語
 の學習も出来るし、たとへ其まゝ日本に滞留れぬにしても、詳に日本の狀況を視察し
 て琉球へ歸れるし、餘ほど都合だと思ひ、ヒウレ師は喜んで軍艦に乗り込んだ。シビ
 ル號は直に日本を指して出帆し、濃霧と潮流の爲に種々の危険を冒して九州は平戸島の
 南方に錨を卸した。島の人々は物珍しげに佛艦に近き、兩刀の侍、圓頂の法師、婦人
 小童までが見物にやつて來るので、水兵等も喜んでビスケットを嚙らせたり、葡萄酒
 を飲ましたりして款待してやつた。夫れから進んで長崎へ行つたが、此處では平戸とは
 餘ほど趣きが違つて、役人から通譯の端に至るまで、皆な横柄な顔して應接し、軍艦の

周圍には番船まで付けて監視するので、將卒いづれも小腹が立つてならなかつたと云ふ。
 ヒウレ師は懐かしい日本の地に足を駐めること出来るのを何よりの樂として此處ま
 で來ると、佛艦の方では俄に模様が変わつて、師を香港へ送り還すことになつた。落膽し
 て一度ならず提督に嘆願して見たけれども、許されない、仕方なく／＼も香港行の軍艦
 に便乗して六月二日長崎を出帆した。歸り着いて見れば、リポア師が假に日本教會の事
 務を擔任し、マオン師は相變らず聖パウロ會の孤兒院掛を務めて、もう孤兒院とは離れ
 難い仲となり、リポア師から琉球行を勧められても應じなかつた位であるが、翌安政三
 年(千八百五)には、何うした譯でか終に佛國へ歸つて了つた。猶は會計部の助手を勸めて居
 たムニクウ師も、少し前から日本教會附を命ぜられ、長崎から來合せた日本人に就て、
 専ら日本語を學んで居たから、ヒウレ師も共に勉強に取掛つた。然し日本文の書籍一冊
 あるではなし、教師も僅に英語が解る位であつたので、随分と骨が折れた。



第九章 琉球に於ける宣教師の悪戦苦闘

一 宣教師那覇の松尾に移る

ヒウレ、ムニクウ師等が香港でゴツ／＼と日本語を學んで居る間に、シラルにメルメの兩師は、天久の聖現寺にあつて、風土氣候と戦ひ、官憲の有ゆる迫害と闘ひ、一擧手、一投足の末に至るまで、厳しい監視を受けて居るので、未だ信者の一人も出来してない。出来す見込すら附かぬのである。たゞ語學だけは餘ほど進歩して、通譯の任務は立派に果せるやうになつた。

然し安政三年(千八百五)の秋には、希望の光が少し射し初めて来たよと思はれた。ゲレ(Querin)提督の巧妙なる談判によつて、條約は取結ばれ、兩宣教師も聖現寺を引拂つて、那覇の中央に位せる久米村の松尾と云ふ人家稠密の場に移轉することとなつたので、是からは待遇も幾分か改まつて来るであらう、傳道の手蔓も得られるであらう、と心算に頼母しく思つて居たのである。然し琉球の外交も全くの支那流儀で、強硬な談判を仕向けられると、條約だけは濫々ながら締結するが、唯だ夫れまでの事で、之が實施に至つ

ては延ばされるだけは延ばして、退引ならぬ場合に立至らねば、決して着手しないので折角の條約も唯だ空文に畢つたのみである。

聖現寺に居る間は、番卒に取圍まれて居た爲に、外出するには歩一歩之と争ひ、時としては静に之を押しつけて散歩の區域を擴めねばならぬのであつた。松尾に移つてからは成るほど番卒に取卷かれこそしなかつたが、然し夜でも晝でも監視がグル／＼巡廻して道路を警戒し、少し家近くにでも遣つて来たものがあると、直に捕へて嚴罰に處するものだから、身は那覇の中央に住ひながら、全く人無き里にでも居るかの様であつた。家は木立の疎な景色の佳い森の中に建つて居て、是まで其邊は極く人通りの多い場であつた。路つたさうであるが、宣教師が引越してからと云ふものは、全く人の影すら見えない。路には雑草や荆棘が時を得顔に蔓りわたり、剩へ附近の民家は、皆な反對の側に戸を開け窓を拵へて、丸で宣教師の家に背を向けて了つた。

二日に一度か三日に一度は、役人の中に最も奸智に長けたのが来て、漢文だの、日本文だの、書を教へるが、夫れも長くの間は唯だシラル師等を欺して、語學の研究を思ひ

止まらさうに掛つて居たのである。然しジラル師等の方で彼等の狡猾手段を着破り、調法に出来た日本語の書籍一冊を手に入れたからは、容易に欺の手を喰はない。琉球の方言でも、日本の口語、文語でも、強ひて彼等の口から絞り出させること出来るやうになつたので、夫ればかりは彼等も餘ほど口惜しがつて居たらしかつた。

二 新信者フランシスコ

斯う云ふ次第であるから、教師等の前で宗教問題でも持ち出すと云ふことは逆も出来ない。少しでも話が其方へ行きかけると見るや、彼等は忽ち顔色を變へて、周章しく之を遮らうとする。中には左まで嫌はないのも居らぬではないが、何分二人が互に監視の眼を睜つて、少しでも油断しないものだから、機會が出て来ても話し出すことが出来ない。然し「窮すれば通ず」と善く云つたもので、宣教師の方でも巧く策略を廻らして、終には一人づゝ順番に来て、教へて貰ふことにした。

二人の教師の外には、何人でも口を利くことが出来ない。職人を呼び、小使を雇ふにも、此方の勝手にはならぬで、必ず役人の手續を経ねばならぬ。して其職人には是非とも一人の監視が附いて来る上に、本人は全くの啞者となつて了はねばならぬ。小使は

毎月交代して而かも用事の外は何一つ話すこと出来ない。それでも神の攝理は難有いもので、小使の一人で當年二十三歳になるのが、我公教の難有味を悟つて、連りに洗禮を願ひ出て来た。夜陰に紛れて窃に教理を授け、一ヶ月の間も色々とした上で、是ならば大丈夫と見込が附いたから、吾主御降誕祭の夜、洗禮を施し、靈名をフランシスコと付け、冢兒として之を嬰きイエズスに捧献げた。彼は下層社會の出ではあつたが、氣力もあれば、才智も十人に優れ、他日傳道士とでもなれる丈の資格が立派に備つて居たので、宣教師等も餘ほど未頼母しく思つて居たのである。初の程は師等の勸に従ひ、務めて其信仰を隠し、干蘭盆會には病に託けて參會を避け、唯だ一心と父母の歸正を祈るのみであつた。

然れども「忍ぶれど色に出にけり」で、其舉動が何となく今迄に異つて来たのを見て父もウス／＼夫れと感付いた。フランシスコも亦た何時迄も信仰を隠すのは、良心に咎められるやうな心持がしてならぬので、終に一切を父に打開けた。忽ち恐ろしい迫害が父の手によつて始まつた。フランシスコは微懼ともしない、幾ら父に狂ひ蒐られても、

打ちのめされても、少しの抵抗でもするのではない。唯だお極まりの様に「何うぞ私に眞の神様を拜むだけを許して下さい。さすれば何の子にも優つて孝行致しますから」と曰ふばかりであつた。フランシスコの辛抱強く、何時かな心を變へさうでないのを見て父はますます腹を立て「見て居れ、明日はいよいよ御上に申上げてやるぞ」とまで言ひ出した。フランシスコも流石に怖ろしくなつて來た。我身は何うならうが厭はないが、家族に難儀を掛けるかと思つては、立つても居ても居られない。夜中に宣教師を訪れて其意見を叩いた。「私の生命を損てるだけならば何んでもういませませんが、キリスト教を信奉したものは、家族もろともに處刑されることになつて居ますので」と、如何にも家族の災難を氣にして居るやうである。然し宣教師等の答は明截であつた。もし罪のない血が流されることになるやうなれば、それは狂暴な父の所爲である。子に至つては一點の過失もないのに、野蠻極まる法の犠牲となり、信仰の爲め、神の爲めに殺されるので、天晴な殉教者であるから、今は殉教の勇氣を祈求するより外はない旨を告げ、共々に拜跪いて、長時間祈念を凝したが、夫れは祈念と曰はんよりか寧ろ飲泣であつた。終

にフランシスコは暇を告げて起つた。兩眼には涙の露を湛へて居るが、斷乎たる其決心は色にも溢れて尊く見えた。あゝ白刃の下に倒れる勇士の戴くべき勝利の冠は見事なものであるが、然し生れたばかりの愛兒を無理遣りに挽ぎ取られて、屠所に持ち去られる靈父の心になつて見れば、何と言ひ様もなかつたのである。

此家族の運命は如何、フランシスコの成行は如何、果して殉教の榮を得たであらうか。役人に尋ねると、何時も困つたと云はんばかりの顔付をして、「もう當方には居りません」と答へるばかり、何人に問うて見ても、役人から言ひ含めてあつたものか、何時も知らぬ顔を極め込むのであつた。もしフランシスコが棄教したものとすれば、自分等の方からでも誇り顔に語り出す筈なのに、斯れほど堅く口を噤んで、隠し立をするのを以て見れば、何んでも初一念を取守つて、潔く殉教したものではあるまいか。宣教師等は實に然う信せざるを得なかつた。

今一人随分と見込のある青年が教の研究に取掛つたけれども、家族が逸早く悟つて邪魔を入れ、甚く虐待したものだから、到頭辛抱しきらずに中止した。猶ほ一人の戸主と

も陰に交際を結んだ。彼がもし歸教することになつたら、一家擧つて其跡に従ふであらうと頼母しく思つて居ただけれども、終に物にはならなかつた。それも其筈で、琉球では洗禮を受けたら、亦た直に殉教の用意もせねばならぬ。良心の聲に背くまい、信者の道を全うしようと思ふならば、何うしても隠したるものではない。初代教會の信者の如く、棄教か殉教か是非とも二に一を選らねばならぬので、ヨク／＼の事であれば洗禮を授かる氣にはなれぬのであつた。

三 ヒウレ、ムニクワの兩師那覇へ渡る

安政四年の四月ヒウレ、ムニクワの兩師は佛艦シビル、

コンスタンチヌの二隻に分乗して、函館に赴き、碇泊中は勝手に上陸して市内を巡覽し書籍など買求めて、再び香港へ引戻した。越えて十月に至つてリボア師の命により、兩名とも佛艦に便して那覇に渡り、メルメ師と代つた。メルメ師は其時既に琉球語にも、日本語にも、長足の進歩を爲し、通譯の職務は立派に勤まるのであつたが、風土の異ると、過度の勉強との爲に健康を害ひ、弱り果て、居たので、香港に歸つて休養するより外はなかつたからである。師は香港へ歸つた上で、那覇滞留中の出來事を書き綴り、終に

日本へ派遣さるべき宣教師の資格を自分の經驗上から論じて、斯う曰うて居る。

「日本へ派遣さるべき宣教師は、凡才では駄目だと自分は考へる。日本語は複雑にして難澁い。人民は智力優れてナカ／＼聰敏である。隨つて宣教師たるものは、相當の才もあり學もある上に、極めて意志の強固な、忍耐の強い、千難萬若にも屈せざる底の氣概を備へると共に、一方よりは溫雅にして愛嬌たつぶり、如何なる凌辱でも笑つて受け耐へ、如何に困難な事業でも平氣で遣つて退け、言語に動作に極めて注意周到な人物でなければならぬ云々」。

是から後と云ふものは、琉球に於ける宣教師の仕事は唯だ日本語を學ぶことだけで、一人の信者を得ることすら出來なかつた。幸ひ安政四年の暮方に至つて、彼等の單調な生活に多少の變化を來すやうな出來事が起つた。と云ふのはオランダの商船が難破して船長を始め、夫人、乗込員すべて二十七名が那覇に收容されて、餘ほど鄭重な取扱を受けた。宣教師等も出來るだけ彼等を勞り慰めてやつた。中に七名の公教信者が居たから、シラル師は彼等の爲めに毎週一回、公教要理を講義してやると、彼等も喜んで之を

聞き、進んで告白を請ひ、聖體を拜領して、師の骨折に酬いて呉れた。船長も夫人も新教信者でありながら、二ヶ月の間も、毎日曜日、ミサ聖祭に參與つたり、説教を聴聞したりした。十一月初旬に至つて、一隻のオランダ船が遭難員の收容に來たが、日本もいよく近々に港を開いて、外國人に居留の自由を與へることになる、と云ふ吉報を齎して、宣教師等を喜ばした。



第十章 日本の開港と宣教師の入國

一 安政の假條約 幕府が最初米國と結んだ神奈川條約は、唯だ兩國が和親を厚くし、遭難者を恤み、船舶に薪水を供給すると云ふだけで、未だ通商條約ではなかつたのだけども、之が爲に開港の氣運は俄に促進され、守舊派の猛烈な反對があつたにも拘らず、幕府は米國に尋で、ロシア、イギリス、オランダの三國とも同様の條約を取結んで、下田

函館の外に長崎をも開くことにした。殊にオランダと取交はした條約の中には

- 一、オランダ人は開港場に於て信教自由たるべし、
- 一、今より踏繪を廢すべし。

と云ふ二條件さへ加はつて居た。彼等は金銀の光に眼眩み、二百餘年の久しき間、己が尊崇するキリストの聖影を踏み付けて、其宗教を辱めた罪滅しに、諸國に先つて此の忌々しき法規を廢絶せしめたのである。時は安政四年(千八百五十七年)の八月で、長崎奉行水野河内守信が寛永六年(千九百一十九年)に之を創めてから、正に二百二十八年目であつた。此時長崎奉行がオランダ人に交付した書付は左の如し。

「踏繪は向後相廢すと雖も、キリスト教法を傳へ、キリスト宗門、其他外國宗門の書籍、畫、並びに像を日本へ輸入する儀は不相成事」

安政四年丁巳八月

長崎奉行

翌安政五年の日米假條約第八條にも

「双方の人民互に宗旨に就ての爭論あるべからず」

「日本長崎役所に於て踏繪の仕來は既に廢せり」

と明記してあつた。(内政外教 衝突史)

話前に戻つて、安政三年にアメリカの總領事ハリス(Harris)が下田に來て、外國公使の特權として江戸に赴き、國書を奉呈し、通商條約を結ばんことを請うた。幕府は祖法に背くと云ふを楯に取つて其請を拒け、下田に於て下田奉行と商議せよと答へたけれども、ハリス固く執つて動かさない。自分はアメリカの全權である、大統領の國書は親しく將軍に調つて奉呈せねばならぬ、而も將軍の都せる江戸に於てせねばならぬ、若し之を拒絶されるに於ては條約違反である、アメリカに無禮を加へられるのである、アメリカたる者は兵力を以ても此無禮の罪を問はねばならぬ、と主張して止まない。論難交渉を重ねること十四ヶ月にして漸く入京を許され、將軍に國書を奉呈した上で、老中堀田正篤の邸に就き、六時間の久しきに亘りて滔々と鎖國の弊を説き、貿易の利を論じて正篤等の心を動かし、終に通商條約十四ヶ條を定めた。其の重なるを挙げれば。

一、江戸に公使を駐め、開港場に領事を置くこと。

一、長崎、函館、兵庫、神奈川、新潟の五港を開くこと。

一、各開港場の十里四方を外人の遊歩區域と定めること。

一、外人に對して信教の自由を認め、教會堂を建てることを許し、キリスト教を侮辱するが如き慣行は之を廢止すること。

一、領事裁判を認めること。

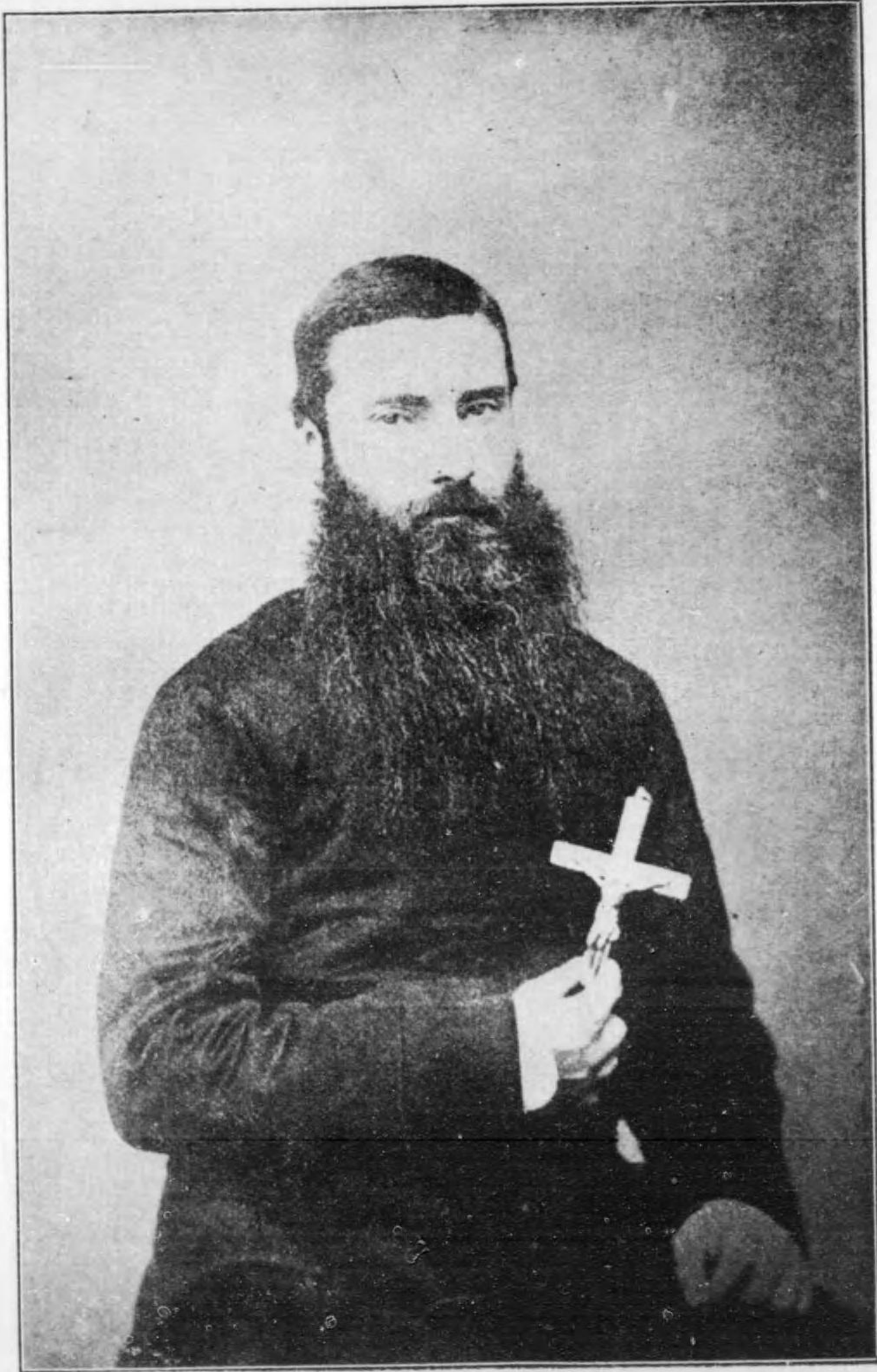
一、輸入税は二割平均とし、酒類及び煙草だけは三割五分とすること。

等であつた。時に京都の朝廷は攘夷論者に擁せられ給ひ、幕府の奏請した條約の批准を許し給はなかつたけれども、幕府の大老井伊掃部頭直弼は、内外の事情に餘儀なくせられ、安政五年七月二十八日、專斷を以て假に條約に調印した。尋でロシア、イギリス、フランス、オランダの四ヶ國とも同様の條約を取結んだ。

二、シラル師、日本の教皇權代理となる。鎖國の鉄門は終に破れた。外人は開港場に限つて足

を駐めること出来る、宣教師も公然と乗り込めるやうになつた。フオルカド師がアウグスチヌ高を伴つて琉球に上陸してから正に十四年目である。此間に外國傳道會の宣教

師ルラジ理代權皇教の本日



シラル師、日本の教皇權代理となる

一一二

師等は、羅馬教皇の聖意に従ひ、我日本の地に十字架の御旗を翻さんものと、琉球に、香港に、言ふべからざる辛酸を嘗めつゝ、祈もし、奔走もし、苦みもし、人事の限を盡して静に天命の至るを俟つのであつた。して此の十四年と云ふ長い間に、洗禮を授かつたのは日本人が一人に琉球人が一人、十四年間に受洗者が唯つた二人とは、熱心なる宣教師の何よりも苦痛とする所であつたに相違ないが、然し神は主として其勞苦の如何を御照覽遊ばすので、其結果の如きは左ほご心に掛け給はぬ、泣きに泣いて荒地を打返して種子を下したものと、喜び躍りつゝ之を收穫れるものとを均しく賞し給ふのだと思へば、多少の慰安が無きにしもあらずであつたらう。

日本が既に開港したとすれば、急に宣教師を派遣せねばならぬが、リポア師は會計事務に忙しくて、到底香港を出られる身ではないので、日本教皇權代理の大任は、當然シラル師の肩に打掛けられることになつた。シラル師は敬虔に、熱誠に、博學多才に何處から見ても申分のない良宣教師で、香港に於て困難なる傳道を試みた上、琉球へ押渡つて日本語を學び、入國の機を狙つて居たのである。渡來以後二ヶ年間と云ふも

のは、フランスの艦船は全く姿を見せなかつたが、安政五年(千八百五)十月二十五日に至つて、突然報知艦レジャン(Regent)號が日本から歸つて、日佛條約の締結と、ジラル師が日本の教皇權代理に任せられたことを告げたので、師はアタフタと行李を收め、ヒウレ、ムニクウの兩師を遣して一先づ香港へ渡つた。然れどもジラル師は自分の肩に負はされた責任の重大なを見て、何となく裏恐ろしく感じ、書をバリの傳道會本部に呈して、自分は何處から考へても此大任に當るだけの資格がない。是ばかりは良心に訴へても辭退しなければならぬ。然し夫れが爲に宣教上、運動の敏活を缺いではならぬから、適任者の見付かるまで假に此任を引受ける旨を申送つた。

偶まフランスの總領事として江戸に赴任すべき、ド、ベルクウル(De Bellecourt)氏が途中から書を香港の會計部に送つて、宣教師を一名通譯として附けて貰ふこと出来まいか、と申込んで来た。江戸は日本の中心で、教會を管理するにも至極便利だし、領事館附の通譯と云ふ肩書を有つて居れば、國內を勝手に巡遊する都合も出来るし、噂の如く果して信者の種子が残つて居るものとすれば、井を發見す機會が無いものでもあるまい

と思つて、シラル師は喜んで承諾の旨を答へた。

三 宣教師いよく日本に入る

諸般の準備は整うた。シラル師は領事館付の通譯兼司祭と

して、明年の春を俟つていよく日本の土を踏まうと云ふ段になつた。是より先き佛和條約締結の御、メルメ師は通譯として、全權公使グロ(Gros)男爵に従つて江戸へ赴いたが、條約も首尾よく取結ばれたので、一旦香港へ歸り、命令一發、直に函館なり長崎なりへ乗り込まずと腕打さすつて埃つて居る。本會からも新に宣教師を派遣して呉れるであらう夫れが若し暇取るやうなら、ヒウレ、ムニクウの兩師に琉球を引上げさせるより外はない。然し一應は本會に事状を具申して見ようと思ひ、シラル師は出發に先ち、長文の嘆願書を呈して、新に人員の増派と金錢の補助とを請うた。兵庫は今直に開港の運に至らずとするも、横濱、函館、長崎は安政六年から開かれ、新潟も其翌年を以て開かれることになつて居るので、居留外人の爲ばかりにでも、夫々に宣教師を配置せねばならぬ、然し部下の宣教師と云へば唯だ三人きりで、ヒウレ師を獨り那覇に遣し置いて、ムニクウ師を長崎に、メルメ師を函館に遣はし、自分は江戸に留まらねばならぬ譯にな

る。交通機關の不完全な新開地に、唯つた一人づゝ居ると云ふは實に心細くもあれば、我傳道會の精神にも適はないから、少くも新に四名の宣教師が必要である……其上小奇麗な假聖堂の一つ宛も建てなければならぬ。自分等の住宅は如何に汚穢しからうぞ、夫れは些も厭はないが、聖堂だけは公教の威嚴に關するから、是非とも夫れ相當に小さつぱりしたのでなければならぬ、然し何を云ふも先立つものは金であるから、其方の補助も仰ぎたい旨を縷々と書き送つたのである。

然し其頃まで外國傳道會は未だ今日ほどの盛運に達して居なかつた。今日では志願者が多い時は三百名からあるのに、當時は僅に五十名内外に過ぎなかつた。宣教師の數も今日は千以上を算へて居るのに、當時は漸く三百名足らずで、而も傳道地は二十ヶ所から擔任して居る。風土氣候の異變の爲に、年々病死者も少からずあるのに、搗て加へて、信仰の爲に迫害者の刀鎗となる者も續々と出て來て、補充に違ない位、新に地盤を開拓するのも可いが、既に開拓した地盤を維持して行くのは猶更ら急務なので、本會の方でもシラル師の請にオインレと應ずる譯にも行かない。夫れにはシラル師も大に閉

口したが、差當り何うすることも出来ぬ、幸ひ江戸函館間には、汽船の定期航路が開かれると云ふ話であつたから、自分は江戸に留まつて、メルメ師を函館に遣はし、少くも月に一回づゝは會合することに話を極めて、安政六年七月香港を解纜した。上海に立寄つて見ると、偶また外人に對して容易ならぬ暴動が發つた爲に思ひの外暇取つて、八月二十九日に至つて漸く上海を出帆し、九月六日江戸に到着した。日佛條約の批准交換も首尾能く済み、シラル師は領事館付の公教司祭兼通譯と公に認められ、日本語の教師は三名までも充てがつて貰ふことが出来た。

四 シラル師の活動振

シラル師は領事館の用向で、毎日／＼目の廻るほど多忙しいのにも拘らず、我身の宣教師たることは夢忘れずして、屢々江戸灣、横濱港に碇泊せる外國船を訪うて、病者を勞り慰めると共に、早くも聖堂建築を思ひ立ち、ド、ベルクウル領事の周旋によつて、寄附金の募集を始め、海に陸に奔走して席の煖まるに違ないほどであつた。尤も今當分は未信者に向つて教を説くことは出来さうにも思はれぬ。ハリス總領事の語る所によれば、通商條約の談判中、「自今踏繪を廢し、居留地には教會堂、墓地等を

設くるを得」と云ふ條項を議定した上で、領事は日本の談判委員に向つて、

「千六百三十七年(寛永十)家光將軍の發布に掛る『キリスト教を信奉する日本人は悉く斬罪に處する』と云ふ禁令は、此條項によつて事實上廢絶せられたものと認めねばなりません。一體彼の禁令が嚴存してある間は、キリスト教其ものまでが侮辱されたかの様に思はれてなりません、是から貴國と和親を結ぶ諸外國は、キリスト教に入つた貴國民を、貴國の意に反しても保護せんとするでせう、私にしても若し保護を求めて來られたら、飽まで保護して遣ります、隨つて彼の禁令はもう存在の理由がない譯であるから、廢棄なさつては如何です」と曰ひ出した。すると委員は答へて。

「此の問題だけは餘り責付きなさらぬが可い。宗教の一點に就ては、我々日本人の心は石ごころか鏡です、時を換ちませう」と曰つたさうである。斯う云ふ次第であるから、唯今の所では其方面には全く見込がない。たゞ朝夕忘れも得ないのは、舊信者發見の一條である。是もハリス領事の話であ

つたが、露國の水師提督プチアチヌ (Poutiatine) が下田に碇泊して居る時、軍艦付の正
 教司祭が一日胸に十字架を露して、下田の郊外を散歩して居ると、一人の田舎漢がソツ
 と近いて、胸に秘藏せる十字架を取出し、自分は纔に日本に残つて居る切支丹の一人で
 ある、何時もゼズス、マリアを記念して居る、十字架は眞の信仰の表徴として生命より
 も大切にして居る等の物語をなし、翌日小舟に棹して軍艦に遣つて来たから、提督は之
 を艦中に引取つて、日本官憲の目を忍ばせ、露國へ伴ひ歸つたと云ふことである。

シラル師が夫れを聞いた時は、覺えず胸の躍るを禁じ得なかつた。新に二名の宣教師
 を得て之を長崎へ遣はしたら、或は自分等にも然う云ふ幸福が得られぬものでもあるま
 い。然し計畫通り横濱に天主堂を新築することが出来たらば、何んな掘出物が手に入るか
 も知れぬ、と唯だ夫れのみを樂みに、毎日／＼其目的に向つて運動の歩を進めるのであ
 った。

五 五 | メルメ師はシラル師の後を追うて、直に函館に乗り込む手
 筈になつて居ただけれども、便船が見付からず何うすることも出来ない、辛つと口

シア軍艦に便乗して上海より白河に赴き、それから長崎を経て函館に到着した時は早や
 十一月二十五日、北海の寒嵐に叩かれる此地には、もう寒威が肌を刺すと云ふ頃であ
 った。函館の役人等は師が流暢に日本語を操るのを見て、何か野心でも抱いて居るので
 はあるまいかと氣道ひ、始は色々と故障を入れて、其の函館居住を妨げようとした。然
 れども師は琉球に居る間に、多少の經驗を積んで居たから、それ式の事に避易はしない
 自分で奉行所に出掛けて、奉行に直面談を試みた。所が奉行は案外の好人物で、其周旋
 によつて好個の地所を求め、假聖堂を建て、病人を引取つて之に醫藥を與へ、私塾を開
 いて佛語を教授するなど、其活動振の目覺しい事と來ては、誰でも舌を卷いて驚かぬもの
 なしと云ふ位であつた。



第十一章 横濱天主堂の建築

一 | ムニクウ師横濱に來る 二百年來桃源の夢を食つて居た我國の上下も、歐米諸國から無

理遣りに揺り起されて、辛つと眼を醒まして明處に出たは出たもの、何となく眩しいやら、恐ろしいやらで、再び目を瞑つて前の惰眠に歸りたい氣がしてならぬ。「外夷に日本を踏ませるのは、此神州の土を瀆すのである」と各藩の浪士が四方から起つて盛んに攘夷論を唱へ、開國主義者を目して國賊となし、白晝公然之に斬付けると云ふ物騒な世の中となつた。爲に大老井伊掃部頭は萬延元年水戸浪士から櫻田門外で暗殺せられ、翌文久元年、安藤對馬守も阪下門に要撃せられ、外國人にして浪士の毒手にかゝつて非命の死を遂げたものも尠からず、今にも一大騷亂が爆發せんばかりの勢となつて來た。ジラル師は此の容易ならぬ雲行を見ても格別氣にも止めず、「大陸の前の小嵐だ」と窺に將來を樂觀して、横濱の居留地内に適當な地所を求めて、先づ教師館の建築に取掛つた。随分と忙しい領事館の事務を控へて居ながら、工事も監督せねばならぬ、江戸に神奈川に、横濱に教務も執らねばならぬ。搗て加へて萬延元年六月から佛語の塾まで開いて、毎日教鞭を執ることにしたので、夜も晝も天手古舞で駆け廻らねばならぬ。彼や此やで流石に強健を誇りしジラル師も次第に健康を害し、餘つばど疲勞を感じて來た。

困つて居る所に恰もよしブチジャン (Peltan) 靈父が近々渡來すると云ふ通知が手に入つた。果して其年の十月二十七日、ブチジャン師は好便を得て那覇に渡つたので、其翌日ムニクウ師は同じ船に便して琉球を引拂ひ、十一月四日横濱に到着して、三名の宣教師が新に佛國を解纜したとの喜ばしい報知をジラル師の耳に傳へた。ジラル師の喜悅は譬へ様もない。來着の上では、一名を函館に二名を長崎に遣す考で、首を延ばして埃つて居たのであるが、何うしたものか夫れきり何の便もない、翌年の八九月までも埃つて見たけれども影も形も見えない。何んでも途中で難船して、早や永遠の港に辿り着いたものであらう、と諦めざるを得なかつた。斯る教界多事の際に、惜ら年少氣銳の新宣教師を三名までも失ふと云ふは、日本公教會の爲には一大打撃であつたが、神の聖意であつて見れば何とも致方はない。扱てムニクウ師が横濱に着いた頃には、教師館は殆ど落成を告げ、是からいよいよ天主堂の新築に取掛らうと云ふ段になつて居たので、師は其ま、横濱に止つて工事の監督を受持つた。

二 メルメ師の活動

メルメ師は函館に在つて相變らず活動して居る。「溫和で、快活で、

偉い學者だ」と云ふ評判が市中に高くなつて、我も我もと師の宅に推しかけて来て、百科辭典でもあるまいに、商人、大工、僕婢など様々の人が様々の事を尋ねて来る。佛僧までが、毎週一回はお極り通りに邪宗退治の説教を遣らかしながら、時には教會の門を叩いて、葡萄酒の御馳走に與る、と云ふ塩梅であつた。

メルメ師は門戸を開放して、各方面に交際の手を擴げて行く一方から、非常な熱心をもつて日本語を研究して、英佛和辭典を編纂し、新參の宣教師の爲に會話書を綴り、アイヌ語の小辭典にまで手を著け、奉行の許可を得て、山を踰ね谷を涉つて土人の部落を探險し、生徒を集めて佛語を教授するなど、實に一人で八人藝を遣つたものである。時の函館奉行は竹内下野守で、割合に頭の開けた、時勢を達觀する眼識を具備へた人だけに、メルメ師を厚く遇し、師が病院建設の計畫を抱いて居ると聽くや、中心から賛成を表して、及ぶ丈の助力を與へようと約束した。メルメ師は夫れに力を得て、佛國に書を飛ばして、腕利の醫師を一名と、看護婦として「愛徳の姉妹會の修道女」を數名派遣して貰ひたいと申込んだ。

然れども鎖國攘夷論の波浪は、次第に此の北海の岸にまで打寄せて来て、世の中が日に増し險惡となり出した。浪士は白晝公然と市内を横行して、外人と見れば直に斬りつけるので、晝でも素手では外出されなくなつて来た。豫てより公教宣教師を以て、國を奪ひに来たもの、如く言ひ觸して居た佛僧等は、時こそ來れと浪士等を唆かして、二度までもメルメ師を圍打にさせた。一度の如きは乘馬で知合の日本官吏を訪れた途中で、の事で、何者か突然暗の中から躍り出て、馬の轡をおつ執りしな白刃を爛かして斬りかけた。幸ひ馬が駭いて棹立ちになり、浪士を踏んたくつて駆け出したので、危く一命を拾うた位であつた。メルメ師の爲には今は四面皆な敵である。奉行所の役人までがガラリと從來の態度を改めて来た。個人としては何とも申分のない人物であるが、然し宣教師と云ふ点から見れば、油斷のならぬ代物だ、と云はんばかりの口吻を洩らすやうになつた。

夫ればかりか露國人も亦た其の恐ろしい猿臂を伸ばして、盛に家を建て、倉庫を設け、軍隊を屯せしめ、宣教師は幾人と諸方へ遣して、黄金を播いて歩かせる。終には二百名

から收容される大きな病院までも建てた。メルメ師たるもの煩悶せずには居られない。然し幾ら煩悶したからとて高が貧乏宣教師の瘦腕であつて見れば、到底彼の巨腕に向つて腕押しが出来よう筈がない。搦て加へて師の一心と埃ち焦れて居た醫師のレオンデユリ (Leon Dury) が云ふのが近々に來着の筈だ、と云ふ通知を得た時には、自分が苦心慘憺して經營した病院は、「微毒病院」に引受られて了つたので、今は別に資金を調達して、新築に取掛るの己むなき場合となつた。

三 横濱天主堂　メルメ師が函館に於て、死物狂ひに奮闘して居る間に、横濱の天主堂はシラル師等の盡力によつて工事も漸く終り、文久二年(千八百六)一月十二日盛大なる獻堂式を舉行した。フランスの總領事を筆頭に、諸外國の公使、領事、居留民は言ふまでもなく、日本人までが夥しく集つて來た。二百有餘年前から禁教の厄に泣いて居た此の日本の地に、小いながらもゴチック式と日本の寺院式とを調和した天主堂が出來、金光燦爛たる十字架が屋上に輝き渡つたので、夫れは素晴らしい評判である。其頃まで我國には未だ新聞紙と云ふものはない。何か珍らしい事が起ると、之を木版に刷つて廣

く讀賣をして歩くのであつたが、横濱の天主堂も、漸く外側が出來たばかりの時分から、其圖を刷り出して、「今度キリストン伴天連が再び日本に渡來して、横濱に斯様に立派な寺を建てた」と江戸を始め、諸國に賣り弘めた。其爲に獻堂式の當日は勿論、夫れからも毎日、觀客が遠近から推寄せて來て、或日の如きは、千人にも上つたと云ふ位であつた。宣教師も初め程は幕府を憚つて差控へて居たけれども、觀客側の質問に促され終に口を切つて説教を始めると意外の好成绩！「さあフランスの坊さんが新らしい教を説き出した」と云ふ噂が横濱の外内にバツト高くなつて、朝から晩まで老も若もヒシ／＼と天主堂に詰め掛けて來る。陰曆の正月となつた。何方の家も休業だものだから町人から僧侶、兩刀を挾んだ武士までが大勢押しかけて來て、注意深い耳を敬て教話を聴き、孰も甚く感心して「なるほど是はハッキリと能く解る、如何にも眞理らしい」と小首を傾げるのもあれば「もう神も佛もあつたものぢやない、アンナものは抛つて了つて天主教にならう、是でないで逆も救かる道はない」と決心の腕を交むのもあり「何かお經文を教へて下さい」と願ふから「主禱文」の書いたのを與へると、如何にも満足

の躰で、厚く禮を述べて立去るのもあつた。

此分ならば遠からず多少の結果は見はれて来るであらう。現に七十三歳になると云ふ老翁が、二里も隔てた田舎から、毎週、日を極めて教理研究に通つて居る。今一人は毎日三度づゝも遣つて来て疑義を質し「私はもう神佛は一切拜みません」と曰つて居る、孰も遠からず洗禮を施すの運に至るであらう、と樂みにして二人の宣教師は一心と活動いて居る。然れども天主堂の建築さへ厭な目付で睥んで居た幕府のことであれば、此の状勢を見ては黙つて其まゝに棄置く筈がない。「天主堂を建てるのは、條約に因つて許してあるから致方は無いけれども、日本人が其所へ往つてキリスト宗の説教を聴聞するのは以ての外だ」と言ふもので、一ヶ月許りも経つてから突然同心を遣はして、觀客が、今しも邸内を出ようとする所を引捕へて、三十三人も牢屋に打込んだ。夫れとは知らずに翌日も相變らず觀客がやつて来て、また二十二人はご擱まつた。さアいよゝゝ迫害の火の手が擧つた。居留外人は騒ぎ出す、天主堂には人の影すら見ない。ジラル師等は早速領事館に駆け付けて見ると、ド、ベルクウル總領事は疾くに其事を聞知つて

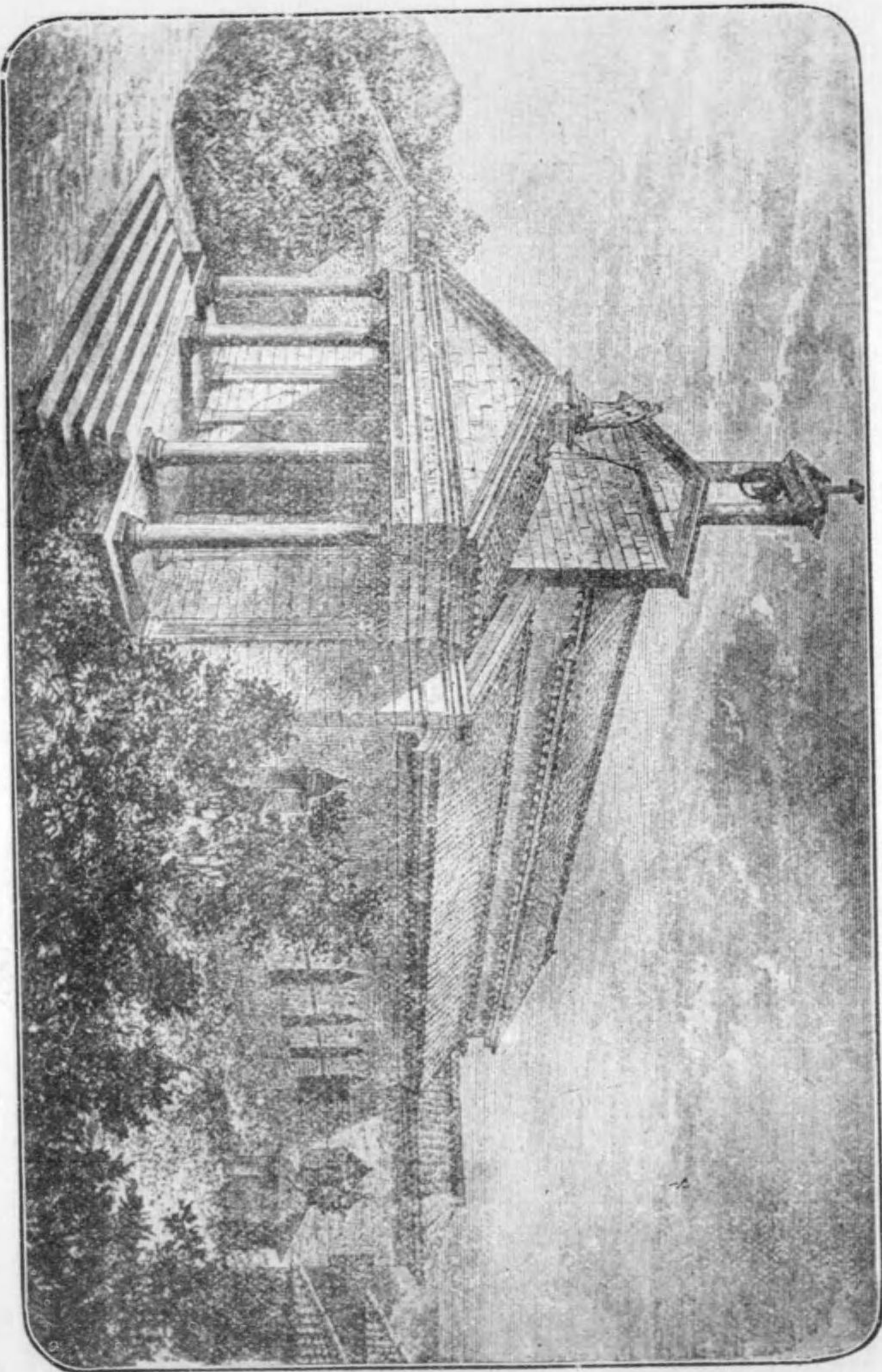
入牢者の爲に斡旋中であつた。所が今度ばかりは幕府の首筋が案外に強硬い。彼等は重大な御法度を破つたものであるから、必ず嚴重に處分せねばならぬと主張つて、領事の交渉に應じさうな模様がない。幾度と談判を重ねた揚句「佛國領事の方で、以後宣教師に日本語で教を説かせない、と保証が出来れば、何とか方法もあらう」と言ひ出した。ジラル師も泣く泣く夫れに承諾して、漸く事済みになつた。

然し幕府の權幕は益々恐ろしくなつて來た。一日横濱奉行はフランスの副領事を呼び付けて、聖堂の正面に書いてある『天主堂』の三字を削り取らせようとした。「外人の爲に建てた教會堂なのに『天主堂』と漢字で書く必要はないでせう。日本人が彼の文字を見たら、悪い望を起すから是非とも取除けて貰ひたい。其代り西洋人の爲に西洋文字で書くが宜しい」と言ふのである。言ふが儘にしたら、いよゝゝ付け上つて、終には「十字架も取つて除けろ、聖堂も打壊はせ、宣教師は歸つて了へ」と出るに相違ないから、領事も夫ればかりは頑として承知しなかつた。斯う云ふ鹽梅だから、未だナカゝ傳道の時機は熟して居ない。

横濱事件が済んでから間もなく、シラル師は領事館の用務を帯びて香港へ渡り、リポア師と熱談の上、ヒウレ、ブチジャンの兩師に命じて、いよく琉球を引上げて日本に赴かしめ、自分は公用を済ましてから、其足で佛國に歸り、日本教會の爲に各方面の同情を喚起すべく大に骨折つた。夫れから新に日本教會附を命ぜられたローカニユ(Lancaigne)靈父と、横濱から連れて行つた日本人の青年とを伴うて羅馬へ赴き、教皇ピオ九世に拜謁して、日本に於ける宣教事業の状況を報告した。羅馬に着いたのは聖週の水曜日で、土曜日に同行の青年は、教皇代理司教たるカルヂナルの手より親しく洗禮、聖體、堅振の三秘蹟を授つた上で、シラル師と共に教皇の足下に平伏して、其の祝福を辱うするの幸福を得た。

シラル師はローマに於て、心ならずも愈々正式に日本教皇權代理に任せられ、フランスの總領事ド、ベルクウル氏に、横濱事件の入牢者解放に力を盡した廉によつて、教皇廳から賜うた聖グレゴリオ三等勳章を送達すべく命ぜられて、再びその愛する日本の空を望んで出發した。

堂主天濱横の古最本日



第十二章 琉球に於ける最後の四年間

一 ヒウレ師護教論を草す 安政六年(1829)ジラル師が日本に向つて琉球を出發してから、那覇にはヒウレ、ムニクウの兩師が居残つて、一心と日本語を學び、徐ろに傳道時機の到來を待つて居た。曩にフランスのダレン提督が琉球政府と條約を締結んだ爲と、且は日本支那の國狀が一變して來た爲でもあらうが、其頃から琉球人の宣教師に對する態度も幾分か緩和なつて來たやうであつた。然し番卒の抜かりない監視と、福音宣布の嚴しい禁制だけは依然として變らなかつた。

ヒウレ師は暁く傳道會に入會したので、年は段々ふける、頭髮もそろ／＼胡麻鹽になりかける。何時になつても何一つ仕事が出来ないので、氣は焦立つて來る。語學にも餘程困難を感じ、「舊い頭は何うも記憶が悪くて」と始終溢して居る。反對にムニクウ師は香港で支那語を學んで居たお蔭で、日本語にも琉球語にも長足の進歩をなし、時として教師と文字の意義を論じて之を凹ませる程になつた。此頃はもうフォルカド師の

時とは違ひ、語學の教師を得るにも左して困難はない。教師の學力が足りないとか、心立が善くないとか云ふ場合には、其筋に申出ると直に交代さして呉れる。薩摩藩から出張して居る役人と交際しても、危懼の眼を睨つて睥まれる氣遣もなくなつた。

ヒウレ師は語學の進歩こそ遅緩かつたにせよ、數學に長けて居た爲に、専ら「大學者」と噂されて居たのみならず、教師の息子が長くから脛に腫物を痛つて居たのを、「リボア氏の塗藥」と云ふので全治してやつてからは、者婆扁鵲にも劣らぬ名醫と云ふ評判が一時、喧しくなり、八里十里の遠方にまで招待され、親しく土人に接近しても、官憲は別段面倒を掛けなくなつた。

そこでヒウレ師は考へた。今の植梅ならば傳道も追々出來さうだから、先づ一寸した護教論を綴らう、宣教師は如何なるもので、何を目的に此島地に踏み込んだのであるか彼等は決して國を奪はんとするのでもなければ、其國の政治、風俗、習慣を變更せんと志すでもない。唯だ自分が謬りなき真理と認めて居る所を傳へんと欲する迄に過ぎないのだ、と云ふことを論辨して、舶來の振時計やら、其他の珍品奇物やらと合せて之を政府

に奉呈しよう。たとへ受付けられぬにしても、切めて護教論だけは薩藩士の手に入るであらうから、一人なり二人なりでも眞理に眼を開けるものが出て來ないとも限らない、今の所では是より外に傳道の方法がない。

恚う思つて二人が日夜護教論の草案に心血を濺いで居る最中に、荷蘭船バリ(Bali)號が突然那覇に入港した。琉球藩王に物を献じて、先年難破船員を欸待されし厚意を謝し併て兩國の間に通商條約を取結ぶ目的で渡來したのであるが、然し適當の通譯が居ないので、船長ワンコペレン(Van Copellen)はヒウレ師等の助力を求めた。大官連に接近して、その宗教に對する心底を探るには好個の機會が得られると思ひ、師等は喜んで其請に應じた。所が案に相違して大官等の態度は依然舊の儘で、少しも變つて居ない。和親を結ぶたけならば謝絶はしないが、互に物品を交易し、有無を通ずると云ふ氣には何うしても爲り得ない様子である。殊に彼の巨大い山の様な外國船を近けるのは、國家の爲に何よりの危険だと考へて居るらしい。是では護教論も何もあつたものではないと、二人は少からず力を落したが、夫でも素志を翻さずに、ヒウレ師がフランス文で綴つた

のをムニクウ師がカツく漢文に翻譯して、二三ヶ月の後には草案も出来上つた。何か好機會もがなと埃つて居る矢先に、二ヶ年前から一度も姿を見せなかつたフランス船が不意に那覇灣頭に見はれて、思ひ掛けもないプチジャン靈父までがノソノソと遣つて來てムニクウ師と代つた。

二 プチジャン師の略歴 べルナルドタデオプチジャン (Bernard Thaddée Petitjean) 師

は千八百二十九年(文政十)六月十四日佛國はアウトン(Autun)教區のブランジ(Blanzay)村に呱呱の聲を擧げた。父は川船製造所に賃稼をして居る船大工であつた。ブランジの主任司祭は、プチジャンが幼少より正直にして、眞深く、信心篤く、好個の司祭たる資格を備へて居るのを見て、學費萬端を周旋して拉丁校に入學せしめた。師は後アウトンの神學校に轉じて、神學を修めて司祭となり、初の二ヶ年間は神學豫備校に教鞭を執り、次の二年間はウエルドン(Verdun)と云ふ村の補助司祭となり、又其次の二年間は説教師となりて、到る所に其の同情ある音聲、親切なる語遣ひ、敬虔にして謙遜深き舉動とによつて聽衆の感動を惹き、非常な好成績を擧げたのである。終に千八百五十八年の

十二月からシヨファイエ(Chauffailles)市の「イエズス聖嬰會」と稱する女修道院附を命ぜられ、六ヶ月許りも熱心に働いて居たが、餘命を異教地の傳道に獻げるのが神の聖意であると覺るや、決然アウトン教區を去つてバリの外國傳道會に身を投じた。時は千八百五十九年(安政)七月三十日、今年取つて早や三十歳であつた。師は自分の志が他に漏れたら、強ひて引留を喰つてはならぬと氣遣ひ、豫て宿泊して居た聖堂の窓を飛び下りて、夜逃をしたと云ふことである。斯くてバリの神學校で七ヶ月半の試嘗を経て、萬延元年(千八百)日本宣教師を命ぜられ、その三月十三日マルセイユから乗船した。斯の如くプチジャン師は神學校に教鞭を執つたり、補助司祭として直接に信者を司牧めたり或は説教師となり、修道院附となりして、七ヶ年の間も有ゆる方面に經驗を重ね、他日傳道地に於て、一人で八人藝を演らかさねばならぬ時の素地を作つて居たのである。

其頃は琉球行の便船と云つて容易に見附かる譯ではなく、ヒウレ師等は渡來以來二ヶ年間と云ふものは、一封の書簡すら受けなかつた位で、プチジャン師も意外に長く香港に滞留して、那覇に到着したのは故山を出てから七ヶ月目で、丁度萬延元年十月二十六

日であつた。プチジャン師の來着はヒウレ師を十年も若返らせた。南海の涯に全く世と掛け離れて、殆ど流人に等しき生活をして居ただけに、頻りと色々の問を發して故國を懐しみ、舊知の人々を記憶に喚び起さうとし、プチジャン師も亦た琉球を以て己が墳墓の地と定め、その住民、事物に親まうと努めるのであつた。

豫てより首里訪問の機會を狙つて居たヒウレ師は、プチジャン師の渡來に口を藉りて攝政、三司、通譯等を歴訪して夫々に方物を献げた。歸宅して間もなく二名の太夫が、攝政と三司を代表して師等の寓宅を訪れた、那朝官までが六十七歳の老體をも厭はず、態々安否を問うて來た。通譯も亦た禮服を着流し、密柑籠を携へて返禮に來た。琉球語と英語とを打交せし「プチジャン先生、嗚を御退屈でムいませう、フランスの様な立派な國を出て、コンな寂しい島國にお來て！ 私等は先生に献げるものとは唯だ此の小さい土地と、善い意ごしか有ちません、Very small land, but good heart.」と曰つて、巧にお世辭を振り撒いた。琉球式の外交に經驗のないプチジャン師は、その禮儀の折目正しく、而も鄭重なのに甚く感服して、「キリスト教國でも、斯んな待遇は受け難いでせう」と曰つた程であつた。

三 護教論突き戻さる

豫てより待ち設けて居た機會は今こそと、ヒウレ師はプチジャン師を伴つて再び攝政を首里に訪ねて、謁見を求めた。通譯が出て來て、「御前は唯今ま御多忙でムいますから、何か所要談でもムいますのならば、私までに御傳へ置いて下さい」と曰つた。然しヒウレ師が「イヤ大切な問題ですから、御前様か、三司様かに直相談でなければ、他人に洩す譯には參りません」と答へたら、「では今一度申上げて見ます、其中に何分の御沙汰がありませうから、夫れまでは御待ち下さい」と快く引受けた。其日は丁度日曜日であつたが、其まゝ引退つて居ると、木曜日になつて、

「攝政閣下は風の心地にて引籠り中に付き、三司の一人その代理として那朝公館に下向あらせらるべき筈に候へば、明日は早速御出頭可有之候」

と云ふ通知が來た。翌日十一時頃になると、二人の太夫が通譯を從へて出迎へに來た。大廣間に通されて、時候の挨拶が済んでから、ヒウレ師は藩王に奉るべき護教論を取

出して、「是は天主教に就ての上書で、藩王殿下を始め、一般琉球國民の幸福に大關係あるものです」と附言して、大臣に手渡した。すると通譯の一人が直に引戸の裏に出て行つた、多分薩摩の藩士が其蔭に隠れて様子如何と立聞でもして居たものらしい。暫く経つて、通譯が再び這入つて来て、大臣に何かヒソ／＼と耳打をすると、大臣は一應受取つたヒウレ師の上書を突き戻して、

「内容の分らない上書は藩王殿下に奉呈する譯には参りません。其上琉球の民は古來孔孟の教を奉じて居りますが、夫れは實に結構な申分のない教で、今更ら天主教に改宗する必要は無いから、折角ですけれども、是は御受取り下さい」

と言ひ出した。ヒウレ師も落膽したが、斯る時の爲にとて、豫て用意して居た珍奇な舶來品を取出して、藩王を始め攝政、三司等に献上した。大臣は暫し躊躇して居たが、「では先づ預つて置ませう」と曰つて献上品も上書も受領つて呉れた。

数日の後大臣は親しく返書を齎して師等の寓宅を叩いた。其大意は引戸の裏から出たのと大同小異で、

「琉球には幾百年前から孔孟の教が行はれて居るが、國を治め家を齊へるには之で澤山である。別に天主教なんぞの要はない。人民も好まないから、貴書はお返し申す、悪からず受領つて貰ひたい」と言ふのであつた。

夫れより少し経つて、三司が人に物を持たして訪問に遣たり、公館に招待したりしたけれども、ヒウレ師は一切謝絶して受付けなかつた。夫れでも暑中になると、攝政は相變らず大夫を遣はして安否を問はしめたから、名刺を呈して之に答へ、斯う言つて使者を歸した。

「我々はフランス政府の官吏ではありません、唯だ宣教師です、物を賜はらふが賜はるまいが、訪問を受けようとも受けまいとも、夫れで我々が何うすると云ふのでもなければ、フランスの軍艦に訴へ出るのでもないから御安心なさい。唯だ我々の遺憾に堪へないことが二つある、御國の方々が靈魂の事は丸きり想はず、死後安全に救靈の得られる工夫も廻さずして、毎日／＼歸らぬ旅に就いて居られる事が一つ、今一つは藩王殿下にせよ、攝政、三司の御方／＼にせよ、人と生れた上は一度は必ず死んで他

界に入られるでういませうが、サテ其の他界に入るに先つて、神様の厳しい御札を受けねばなりません、所が神様の正しき道を自分も、守らず、人にも守らさないとあつては、如何なる御咎を蒙らねばなりませんまいか」と、

思つたまゝを露骨に言ひ放つたものだから、大夫も何う答へやうもなく、極り悪るさうに黙つて控へて居たが、折角進物にと持つて來た鶏卵を其まゝスゴ〜と持ち歸つたのは氣の毒であつた、

ブチジャン師が琉球に渡つてから、二年間と云ふものは何の音信もなかつたが、文久二年の九月に至つて料らずも佛艦デュブレキス (Duplex) 號が入港して、ジラル師の方から引上の命を傳へた。因てヒウレ師は艦長に同行して攝政を訪れ、佛艦が宣教師を殘らず引取りに來た旨を告げると、「引取りに―」と攝政は餘りの嬉さに思はず頓狂な聲を出し、自分で我耳を信じ得ない位であつた。

宣教師等は天久の聖現寺より那覇に引移つてから、小高い丘の上に一棟の家を建て、颯風を防ぐ用意にとて、北の一方に石垣を築くなど大分費用を掛けて居た。然し引上げ了へば賃貸する譯にも行かず、何うしようかと思つて居る中に、琉球政府では厄介物に立退かれるのを喜んでか、費用全部を支拂はうと云つて九百兩さし出した。六百兩しか受取るまいとしても、「是非に」と推付けて受取らせた。宣教師等もいよ〜此の質朴な琉球人と訣れる時は、流石に餘波惜しい心地がしてならなかつた。弘化元年にフォルカド師がアウグスチヌ高を伴ひ、初て琉球の地を踏んでから此に至るまで正に十八年であつた。



第十三章

宣教師長崎に天主堂を建つ

一 ヒウレ師長崎に到る 文久三年(千八百六) ジラル師はローカニユ(Laucaigne) 靈父を伴ひ、欧州よりの歸途に香港へ立寄つた。聞けば日本では長州藩が攘夷黨の魁となつて、下ノ關を通過する外國船に向つて無暗に砲火を浴せ掛て居ると云ふことであつたから、萬一を慮つてローカニユ師は上海に遣して、七月一日單身横濱に上陸した。然し實際の狀勢は噂に聞いた程まで險惡ではなかつたから、其旨をローカニユ師に通じ、二ヶ月ばかりも埃つた上で之を横濱に呼び寄せた。時にヒウレ師は一月の末頃から長崎へ赴き横濱にはムニクウ、プチジャンの兩師が元氣よく立廻つて居る。唯だ函館のメルメ師は餘り色々の事に手を出して、夫れが意の如くならなかつたと云ふので甚く失望し、終に家事上の都合に口を藉りて、教會所は一ヶ年の年限を附けて英人某に貸し渡し、急に日本を立退いた。創業の際に斯う云ふ熟練した教役者に逃げられると云ふは、教會の爲に尠からの打撃であるのに持つて來て、日本を最も善く理解し、宣教師等の爲に始終幹

旋の勢を執つて呉れた佛國總領事ド、ベルクウル氏までが、此年の暮には歸國して了つた重ね々の不幸に宣教師等も落膽したであらうが、然し神は「健に極より極に行渡り、すべて物事を靜に取計らひ給ふ」(智書八)と云ふので、何かを爲さるには、必ずしも人の力を藉る必要があるのではない。有ゆる困難、妨害、壓迫の降り重なる中にでも、立派に日本教會をその苦蒸す古墳の底から再生せしめること叶ひ給ふので、左まで力を落す譯はなかつたのである。

是より先きメルメ師の依頼に應じて渡來せる醫師レオン デウリは、如何なる事情に餘儀なくせられてか、函館へは赴かずして、文久三年(千八百六)佛國領事として長崎へ赴任することになつた。先方へ到着した上は、宣教師の爲にも十分の便宜を計つてやると約束したのであつたから、ヒウレ師は同年一月二十二日いよいよ長崎へ乗り込んだのである。然れども居留地は其時はや買占められて了つて餘地がない。デウリ領事は今だに領事館の敷地さへ見出さずに、出島の和蘭人宅に宿泊して居る、ヒウレ師も數日間、一緒に厄介になつて居ると、長崎奉行の方から假に本籠町の大徳寺を領事館に充がつて呉れ

たから、共々に其處に引越した。夫れから適當な場所を捜し歩いて、終に大浦閉山手は居留地に隣接した一地に目星を附けて、奉行所に願出ると、二月十四日に難なく許可が下つた。是が今の天主堂、神學校、教師館の建つて居る乙一番の敷地なのである。格別の面倒も見ずして、高燥で閑靜な此の好敷地が手に入つたのを見て、ヒウレ師は心から喜んだ。九年前に軍艦に乗つて來た時までは、上陸さへ許されなかつた位なのに、さても變れば變るものかな、是も二十六聖殉教者の御傳達のお蔭であらう。あゝ長崎の地！幾多の殉教者等が其の怖ろしい責苦に惱まされながらも、「イエズス！イエズス！」と主の御名を唱へつゝ、倒れた此長崎の地に、自分は初てミサ聖祭を行ひ、其イエズスを祭壇の上に呼び降し申すのだと思つては、感涙の双頬に流れるを禁め得なかつたのである。

ヒウレ師は心の淡泊した、至極交際ひ易い人で、誰に對しても城廓を設けず、何時もニコニコ顔で應接するものだから、居留外人には頗る受が好く、新教信者からまで大層敬愛されて居た。殊にヂウリ領事とは兄弟も同様に相往來し、領事館に少し廉立つた

宴會でもある時には、必ず其招待を受けると云ふ鹽梅で、爲に長崎奉行なども何時しか見識り合ふやうになつた。

二 **「プチジャン師の來崎」** 八月初旬にプチジャン師が跡を逐うて來崎した。時に教師館は既に竣工つて、今や日々十五人、二十人からの工夫が出て來て、天主堂の敷地を平均して居る所であつた。ヒウレ師は喜んで此の琉球からの同僚を迎へ、之に新築すべき天主堂の設計を示し、落成した上では「二十六聖殉教者堂」と命名ける考であるが、一つ残念なのは、之を二十六聖の殉教せし丘の上に建て得ない事である等と言ひ、共に心を合せて工事を監督するのであつた。

然し其の謂ゆる「殉教者丘」と云ふは果して何邊であらうか。プチジャン師は長崎に着いた早々から、开を探り出さうに掛つたのであるが、幕府の方でキリスト教に關する古跡は成るべく之を湮滅しようとする結果、何一つ手掛となる物が残らぬので、唯だクラッセの西教史、シャルウオアの日本史、レオンバゼスの日本基督教史等の西史を參考するより外はない。所が其等の記録によると「死刑の場所は始め普通の刑場と定まつて

居ただけれども、ポルトガル人等の請によつて、市街を一目に下瞰す海に面した小高い丘に變更され、刑場に立てあつた二十六本の十字架も其處に移された」とある。普通の刑場を首塚とすれば、其附近にあつて「市街を一目に下瞰す海に面した小高い丘」は茶臼山、俗に云ふ女風頭に相違ないと云ふのが師の判断であつた。翌元治元年(千八百六)正月ジラル師も横濱から來て、相携へて茶臼山に登り、ブチジャン師の考證に賛同せられたので、今に至るまで一般に茶臼山を以て「殉教者丘」としてあるのである。然し刑場が首塚に定まつたのは寛永後の事で、其以前は何處であつたか、或は首塚であつたかも知れぬが、確に夫れと断定は出来ない。たとへ首塚が刑場であつたにせよ、夫れから茶臼山までは餘り遠過ぎて、十字架を擔ぎ上げるのも容易でない。加之、元和八年にカロスピノラ師以下五十二名の殉教せし場所は、其當時マニラで畫いたと云ふ殉教の圖を見れば正しく首塚である。レオン・パゼスによつて見ても、一名の青年が附近の船に泳ぎ着いて、冷水を大きな器に擔いで來て殉教者等に飲ましたとあるから、海岸近くであつたに相違ない。所が此刑場は二十六聖の殉教せられた場所から、僅に百五十歩しか隔つ



圖の教殉聖六十二

て居なかつたこと云ふことであるから、何うしても茶臼山ではないらしい。夫れより一段下手の方で、首塚より程遠からぬ小高い丘に見當を附けねばならぬかと思はれる。暫く疑を存して識者の考證を俟つ。

偕てシラル師は茶臼山に登つて、心を遠く二百五十年前の昔に馳せて、幾多の殉教者等が身の毛も森立たんばかりの責苦の中に、一命を神に献げ、勇壯極まる當時の事跡を思ひ廻らし、この殉教者等を尊榮するのは、懸て其お執成によつて優渥なる神の祝福をこの地の上に呼び降して、日本公教會の復活を早からしめる譯であると考へつき、一月二十三日書を羅馬教皇に奉呈して、スピノラ師以下五十二名にも、二十六聖殉教者の如くに「聖者」の尊號を諡り給はんことを嘆願した。蓋し二十六聖殉教者は、是より先き文久二年(千八百六)の六月八日に早や諡聖せられ給うたのであるが、スピノラ師以下二百五名の殉教者は、後慶應三年(千八百六)に至つて「福者」と尊稱せられることになつたのである。此等殉教者等のお執成の結果、シラル師の豫期に違はず、日本公教會の復活の曉は此時既に程近く迫つて居た、此の「殉教者丘」の裏手の谷には、幾千の信者が隠れて、窈

に父老の口傳を守り、宣教師の渡來を竣ちつゝあつたのである。唯だ神ならぬ身の夢にも开を知るべき由もないので、宣教師等は精々と力を合せて、天主堂の建築工事を急ぎながらも、横濱での出來事を思つては、將來を悲觀せずに居られない。たとへ落成した所で日本人の參觀を禁止せられるやうでは、折角の骨折も無駄になる譯なので、その心細い事と云つたら實に限りなしであつた。其上居留外人中にも、公教信者が多少無いでもないが、揃ひも揃つて一身の安樂、金錢の慾望に没頭り込んで、宗教には些も頓着して呉れない。吾主の御降誕祭にすら、聖體拜領者が一人も居なかつた位。彼や此やヒウレ師の如きは非常に落膽して、ジラル師に其心底を打開け「私は國を出てから早や十年になります、今に何一つ出來た所はありません。寧ろ歸國して、本國の宗教界に奔走した方が優してはあるまいかと思ひますが」と言ひ出した。ジラル師は之を慰めて「數知れぬ殉教者の血が此地には流れて居ます、夫れが無駄に廢らうと思はれますか。屹と長くせぬ中に、其血によつて信者の種子が萌出て來ます。疑ひなさるな」と言つたけれども、ヒウレ師は「左様な氣慰めの預言は信じ得ません」と曰はんばかりに、頭を

左右に打掉つた。

三 献堂式

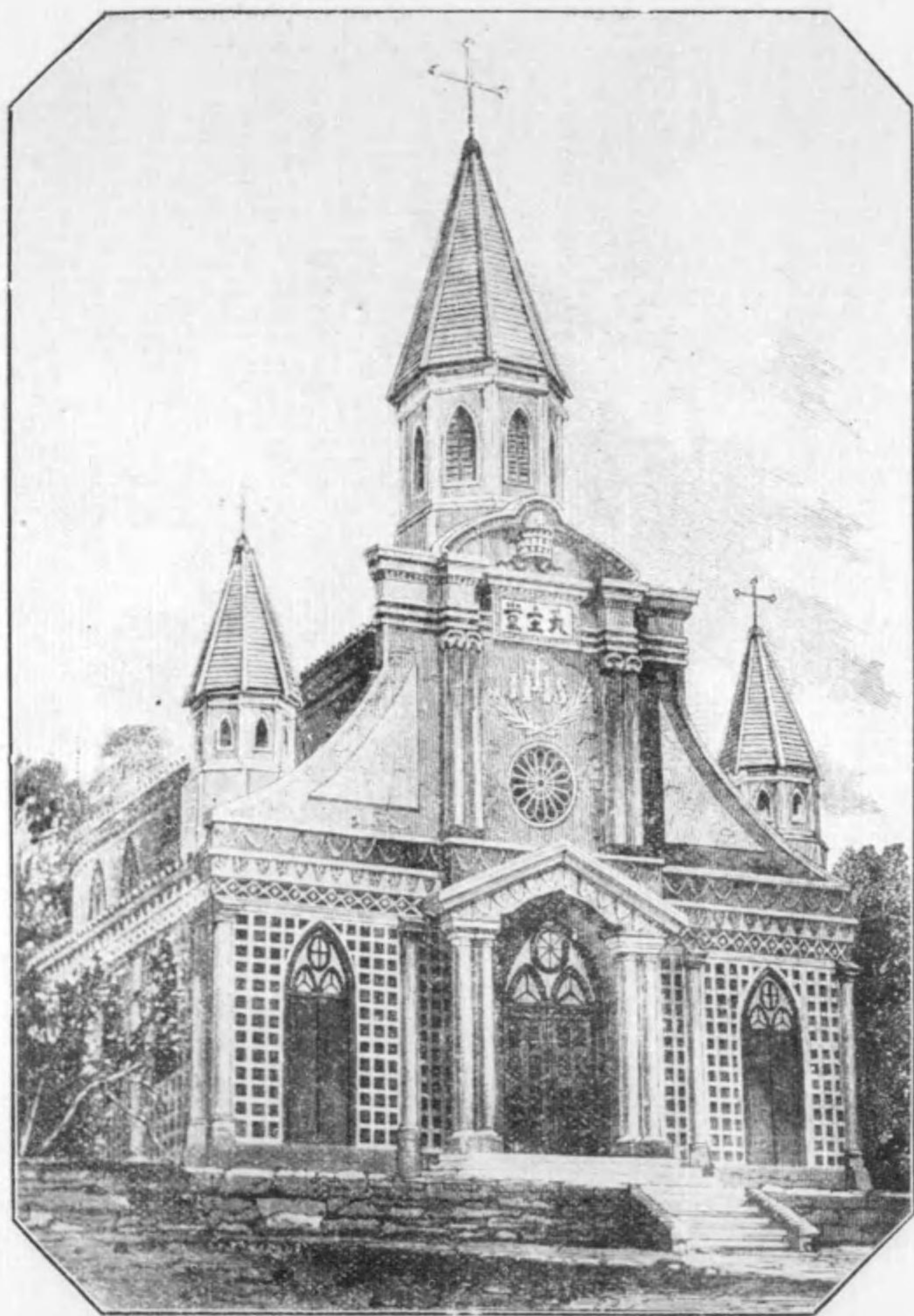
ジラル師は八月まで滯留つて、工事を監督した。フランスのエウゼニ(Eugenie) 皇后、ジョレス(Jules) 水師提督等の寄附を得た爲に、横濱の天主堂から見ると餘程見事なのが出來上りさうに思はれた。然しヒウレ師の悲觀はいよく募り募つて、到頭一年間の猶豫を願ひ、十月の初ころ歸國して了つたから、其代りにローカニユ師が來崎した。

ローカニユ師は軀幹こそ矮小かつたが、才德兼備はり、謙遜にして忍耐強く、熱烈の情は渾身に溢れ、日本語を學習ぶ傍、英語を修めて早や會話には差支ないまでになつた。然し長崎には和蘭人も尠からず居るので、彼等の爲にも何かの役に立ちたいものと思ひ、蘭語の研究にまで指を染めた。靈魂！靈魂！實に靈魂を救ふのは彼が畢生の願望であつたのである。

ローカニユ師が長崎に着いた時は既に十一月の末頃で、天主堂の建築も餘程進捗つて居たのであるが、十二月初旬に至つて、棟梁が俄に種々の故障を申立て、工事を中止せ

んばかりの氣色を見せて来た。當惑して居る所に、奉行所から屬吏二名を遣はして、今度假語學所(慶應元年正月假に江戸町に置き、八月大村町に)を設け、諸外國語を教授するに付き、フランス語の教授方を擔任して呉れまいかと交渉して来た。御所望に應じたいは山々で、工事が竣らぬ間は、何とも御答が出来兼ます」とブチジャン師は曰つた。「何時迄に竣工したい御希望ですか」と念を推すから、「明年の正月までには是非とも落成したい考なんです」と答へた。「分りました、では後方伺ひます」と言ひ棄て去つたが、長崎奉行のお聲が一つ掛つたものと見え、翌日から従來に三倍もの職人が出て来て、夜を日に繼いで引切りなしに働いたお蔭で、年内に略竣工の運びとなり、ブチジャン師は明けて慶應元年(千八百六)一月六日から語學所に出て、佛語の初歩を授けることになつた。師は郷里の神學校で、二年間も教鞭を執つた経験があつた爲に、教授が善く其法に適ひ説明は明瞭で、順序正しく、大に學生側に喜ばれたと云ふことである。

天主堂は出来上つた。ヒウレ師の望通りに「二十六聖殉教者堂」と命名け、殉教の當日たる二月五日に献堂式を擧げる筈であつたのだけれども、シラカ教皇權代理が、差支



堂主天浦大崎長の時當築建

の爲め其日までに出張すること出来なかつたので、二月十九日四旬節前の第二主日に延期せられた。此日デユリ佛國領事を始め、居留外人も多く臨場した。佛艦キエンチャン(Kien-Chan)號、露艦ワリアグ(Variag)號、英艦アルダス(Argus)號、蘭艦アムステルダム(Amsterdam)號等の諸艦長は、孰も軍服厳しく、部下水兵中の公教信者十二各づゝを武装して參會した。露艦からは、軍樂隊までも貸して式を賑はして呉れた。斯くてジラル教皇權代理はブチジャン、ローカニユの兩師を従へて堂の内外を祝別し、終つて劉亮たる奏樂の中にミサ聖祭を執行した。正午に佛艦キエンチャン號から引いて来た一門の輕砲が、天主堂敷地の高みより二十一發の祝砲を放つて式の終を告げた。夫れと同時に蘭皇の天長節を奉賀して各艦均しく祝砲を打出したので、丁度献堂式を祝したかの様に思はれて、一層の盛大を添へた。天主堂の正面には日本と條約を結べる八ヶ國の國旗が、日没までヒラ／＼と春風に翻つて、當時稀に見る賑であつた。



第十四章

信者の後裔自ら名り出づ

一 三月十七日の出来事 新築の二十六聖殉教者堂は、大浦南山手の中腹に位し、丁度その正面を長崎市に向け、屋上に高く聳ゆる塔の頂には、大きな金色の十字架をキラ／＼と朝陽に輝かして居るので、建築中は「フランス寺見物に」と、老も若も打連れ立って善く遣つて来たものであるが、建築が終を告げると共に、参観者の足はハタと止んだ。献堂式當日の如きは、長崎奉行がヂュリ領事の招待に應ぜずして、唯だ下役を代理として遣はしたのみならず、豫て物見高き市民すらも、此日に限つて素知らぬ顔して差控へて居たのである。宣教師等は少からず失望した。思へば日本傳道に着手してから早や二十年、其間に彼等は堅忍不拔の精神を以て、有ゆる辛酸を嘗め、手段の限りを盡して見たのであるが、夫れが悉く徒勞に歸して、一も成功する所がない。公然と教を説くこと出来なければ、責めては舊信者の後裔なりと發見したいものと、横濱に長崎に天主堂を建立しても、参観の自由さへ與へられない位だから、其方の希望も殆ど絶えた様で、道

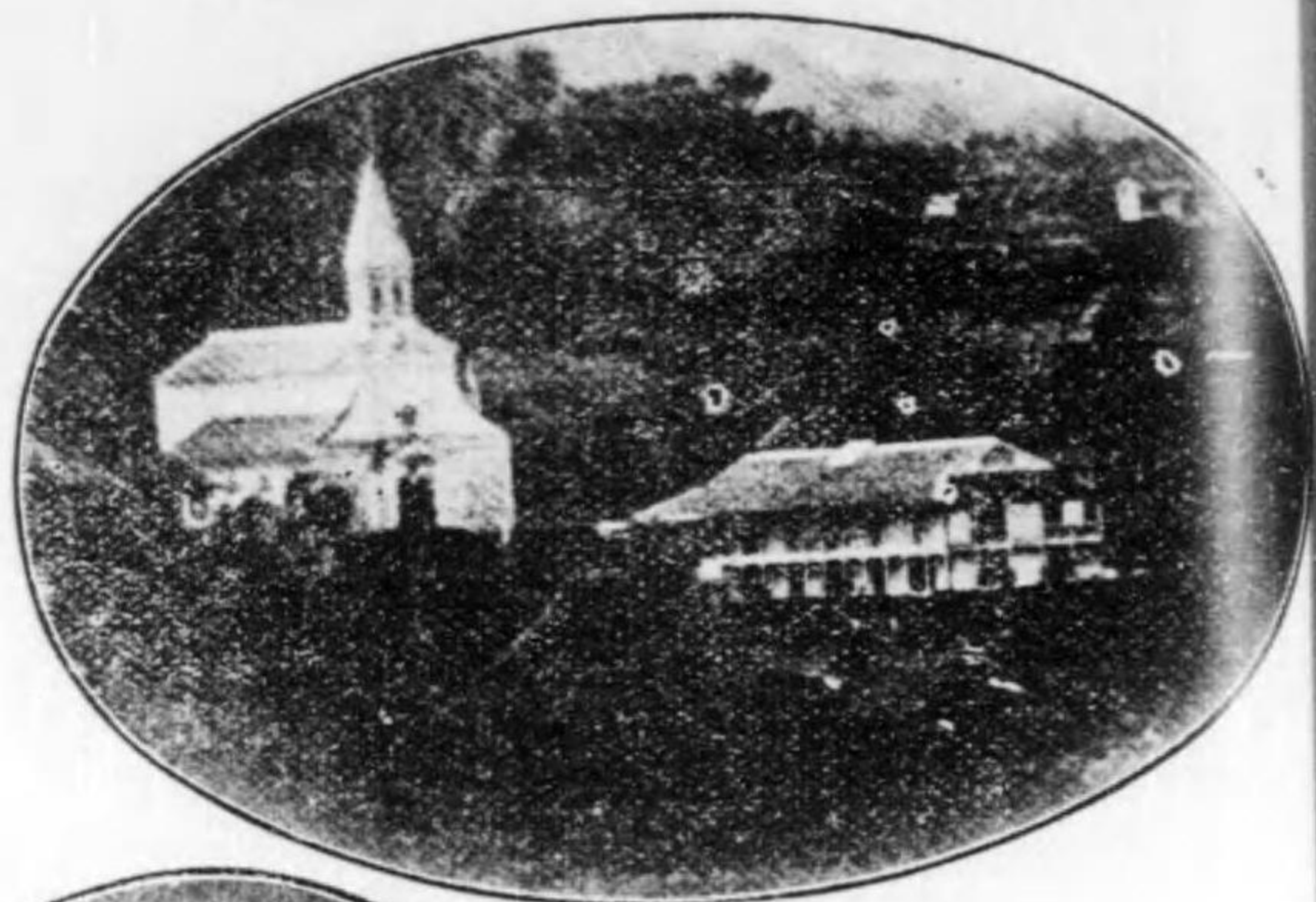
の宣教師等もウンザリして、ジラル師は間もなく横濱に歸り、プチジャン、ローカニユの兩師は、相變らず單調無趣味な生活を續けねばならぬのであつた。

然し参観者は献堂式の當時こそ全く姿を見せなかつたけれども、其後はポツリ／＼絶えず遣つて来たものらしい。一ヶ月許も経て三月十七日の金曜日は十二時半頃、老若男女打混せて十四五名の觀客が聖堂の門に立つて居るが、何やら態度が違つて居る様で、何うしても唯の好奇心で来たものとも思はれない。プチジャン師は門を開いて内へ案内し、心竊に神の祝福を彼等の上に祈りつゝ、中央祭壇の前に拜跪いて、主禱文を一遍誦へる間ばかりも聖體を伏拜み、「觀客の心を感動さす程の力ある語を私の口に與へて、此中から主の禮拜者を出さしめ給へ」と一心に默禱つて居る所に、四十歳から五十歳位の婦人が、師の側近く跪いて、胸に手を當て、壁にも耳あるかと曰はんばかりに聲を低めて、

婦人「此處に居りまする私等は、皆な貴師と同じ心でゐます」と言つた。

プ師「本統、何處、貴女等は？」

近附及堂主天浦大の頃年七治明



アリマ母聖の内堂主天浦大

聖マリアの聖像は何處？

三月十七日の出来事

一五二

百雷の一時に足下に落ちて来たよりも吃驚して、ブチジャン師は尋ねた。

婦人「私等は皆な浦上でムいます。浦上は大低私等と同じ心でムいます」と婦人は答へて直様、

婦人「聖マリアの聖像は何處？」と問うた。

「聖マリア」と聞いてブチジャン師は、是はいよく疑ひない、全く古い信者の後裔だと思ひ、心は言ひ知れの喜悅に溢れ、五ヶ年間の慘澹たる苦心も忽ち打忘れ、親に邂逅つたと喜ぶ子女に取巻かれつゝ、聖母の聖像の前に跪けば、彼等と共に跪いて何か祈禱を誦へようとする様子であつたが、餘りの嬉さに祈禱どころの話ではない、

婦人「左様く聖マリアでムる、あれく御子ゼズ、様を抱いて御居なさる」

等と、一たび信者たることを顯はしてからは、心置きなく色々の物語をなし、「天主様」「ゼズ、様」「聖マリア様」のことを彼れ此れと尋ね、殊に嬰いイエズ、を抱ける聖母の聖像を見ては、坐ろに御降誕の祝日を思ひ出して、

婦人「私等は霜月の廿五日に、御主ゼズ、様の御誕生を祝ひます、御身様は此日の夜

半に馬屋の中に生れ、難儀苦勞の中に御成長なされ、三十三の御年に私等の靈魂の救濟の爲に、十字架に掛つて御死去なさいました、と聞いて居ります。只今は丁度その悲節でムいますが、貴師等も悲節を守りますか」

「師」然う、私等も守ります、今日はもう悲節の十七日目です」
等と話して居る折しも、バター、と門の方に梵音が聞けた。観客が來たらしい。見付かつては大變だ、と彼等は忽ち右に左に散々と分れて、素知らぬ顔して此所彼所を眺めて居たが、復た笑ひながら戻つて來て、

婦人「今の観客も怖れるには及びません、あれも村のもので、同じ心でムいます」
と曰つて師を安堵させ、猶も話を續けたい様子である。プチジャン師も話したいことは山々であるが、色々の人が善く遣つて來るので、己を得ず再會を約して、惜しき袂を別つた。

あ、此時プチジャン師等の胸は如何なる喜悅の情に躍つたであらうか。彼等は確に十七世紀の公奉者、殉教者等の後裔には相違ないが、果して多數残つて居るであらうか。

果して祖先の教を善く傳へて居るであらうか。なるほど聖母マリア、イエズ、キリスト、天主などの話をなし、祈禱を誦へ、十字架を尊敬するのを見た。然しながら二百年來牧者を失なつて居た上に、始終迫害者の爪牙に苦められた群羊であつて見れば、迷信も混入つては居まいか、風儀も紊亂れては居まいか、色々それから夫へと考へ廻はして一日も早く様子を知らりたいものと、再會の時を待ち詫びるのであつた。

浦上と云へば金比羅山の裏手に當り、市から僅に一里許りも隔てた隣村である。長崎と同じく幕府の直轄に屬し、昔は村を擧つて公教を信奉し、村内には慈惠病院の設けさへあつて、慶長二年に殉教せし二十六聖も、暫し其處に休息して告白をされた位だから、宣教師等も若しや此邊に信者の種子が落ちては居まいかと思つて、幾度となく散歩かた／＼往來して、農夫に物を言ひ、路を尋ね等したのであつたが、然し何うしても夫らしい者を見當らない。ヒウレ師の如きは子供を招いて菓子を與へ、その食べる時に十字架の印でもしまいかと覗ひ、或時は馬を馳らして村に入り、二度まで態々落馬て、怪我でもしたかの様に拵へ、何人かゝ通り掛つてキリスト信者らしい取扱振を見せては

呉れまいかと試みた。二度目に落ちた時は、今の山里天主堂の向ふに當る野下と言ふ所であつたが、落ち損つて小溝の中にはまり込み、シタ、カに腰を打ち、泥に塗れて居ると、幸ひ二三名の男が遣つて來た。何うかして呉れるかと挨拶して居ると、「アラ／＼異人が溝に落ちとるぞ」と言ひながら、スゴ／＼と行き過ぎて了つた。

彼等は宣教師が黒の長衣を着流して居るとは言ひ傳へられて居なかつたものと見え、幾代前から埃ちに埃ちたる宣教師を目前に見据ゑながら、唯だの「和蘭さん」としか思はなかつたのである。

二 發見後の二週間 この十四五人の 観客は 果して何郷の何人であつたか、川上の

カラ、照と云ふ婦人も其中に居つた、と四月二十一日シラル師に送つた書翰の中にブチジャン師は認めて居るが、然し名り出た婦人は果して彼女であつたらうか、照女も其頃は早や四十歳前後で、随分と男勝りの、不遠慮な質であつたから、或は彼女であつたかも知れぬが、何とも斷言は出來ない。夫は兎に角、婦人等は歸村の上、宣教師に面談したことを言ひ觸らしたものであらう、翌日から大勢の信者が續々と天主堂へ推掛けて來

た。今まブチジャン師が其頃バリの神學校に送つた書簡に従ひ、當時の狀勢を逐一記して見よう。

「十八日土曜日、午前十時から晩方まで參詣人が絶われない、役人等は此の常ならぬ人出に驚かされ、警戒の目を少も緩めず、十五分毎に聖堂の門に遣つて来る。夫れでも信者が相變らず詰めかけるので、私等は横濱でのやうな失策を重ねてはならぬと氣遣ひ、成るべく掛け離れて控へて居る。然し正午の頃、七十六歳になると云ふ老翁と、同じ年頃の二名の老媪が連りに『十字架を拜まして下さい』と強請むのには、何うしても謝絶りきれなかつた。」

「十九日日曜日、聖ヨゼフの祝日、人出の多いことは昨日に異らぬ。ミサ聖祭の間、數名の日本人が聖堂内に留つて居たが、其中には確に信者も混つて居た。十字架を拜みに來た四五人に、十字架の印を教へてやつた。彼等は全く十字架の印を知らぬではないが、西班牙人、葡萄牙人の如く、拇指で額に三度十字架の形を畫くのであつた。彼等の語る所によれば、浦上にも一つ心の者ばかりは居ない、政府の間諜も居て、始

終信者の行動に注意を怠らない、信者の中にも格別教を解つてないものも居る、と云ふことだ。三四名の參觀者は是非とも靈父と話したいと言うて、ローカニユ師の後を逐うて其室に忍び込み、師の名を尋ねた上で『私はペトロと言ひます、バオロと言ひます、ジワノ、ドミンゴと言ひます、何うか記憶にて置いて下さい』と自分等の靈名を名つた。」

「二十日、月曜日、參詣人の數はいよ／＼殖えて來た。町内は驚き騒ぎ、役人は聖堂の傍に詰め掛けて見張をする。信者は二本差しの役人を恐れることは非常なものであるが、夫れでも是非／＼私等に遇つて話したいと迫る。然れども一寸の不注意から如何なる椿事を惹起さんとも計り難いので、私等は成るだけ遠く掛け離れて居る。一口の物を言ふ機會があるものには『早く宅へ御歸り、役人が睥んで居る、後でもつと少數づゝ御來で』と勧めた。一名の婦人は私に向かつて『夫も子供も私も後で參りますが、夫れまでには私等の爲に祈つて下さい、私等の名も覺えて居つて下さい、夫はバオロ、此子はペトロ、私はマリナと申します』と曰つた。」

「二十一日火曜日、午前十時頃から參觀者が來初めた。役人はお隣の佛寺（誠孝院、俗に）を控所として、其處から昨日の所へ出て來て見張をする、信者も未信者も大勢ゴツチヤに遣つて來る。然し信者は私等を見れば右の手を胸に當るから、直に夫れと見分けられる。二三の信者に「役人に氣付かれると危いから、十五日以内には來てなませぬ」と言ひ渡した。役人に夫れと感付かれると、入牢か打首かに遭されるのだとは信者等も悟つて居るらしい。夫れでも矢張り私等に遭ひたがつて連りと搜して廻る或る家族の如きは、私が語學校に行つて居る中に來て、二時間以上も待つて居た。ロカニユ師が幾ら「お歸りなさい」と勸めても、是非靈父様と一緒に聖堂で祈りたい、十字架を拜みたい」と剛情はつて聽かなかつた。私が歸つてから、其望に従ふこと出來ない理由を言つて聞かしても、ナカ／＼得心する様子でなかつたが、終には斯う謝絶られるのも畢竟自分等の爲を思つてであると悟つて、漸く納得して立去つた。」

「二十二日水曜日、多分昨日の勸告が信者間に傳はつたものと見て、今日は人出が少い。役人も見えない。否な見ぬのではない、油斷を爲せる計略から、兩刀を携い

て丸腰になつて居る。二三名と物語る事が出來たから、明日金比羅山で、三人の信者と會見する約束をした。長崎の附近には山や林が多いから、其中に隠れて幾らでも仕事ができる。是からは聽者がなくて困るやうな憂はない。今朝聖堂で見た一家族の如きは、自分の家が信者の部落に遠く掛離れた一軒屋で、人に氣付かれる恐はないから、時としては見舞つて貰ひたいと連りに願ひ、路筋まで委しく教へて呉れた。此家族には父と母と二人の幼い子供があるばかりださうで、「靈魂の親を自宅に御招待すること出來ましたら、如何に嬉しい事です」と云ひ／＼して居た。」

「二十三日木曜日、午後二時金比羅から歸つた。三人と約束して居たけれども、唯だパウロ（徳藏）と云ふ男が一人だけ待つて居て呉れた。然し其語る所によつて、餘程重要な事實を知る事が出來た。迫害の暴風に吹き捲られつゝも、浦上には信者の種子が絶わなかつた、確に洗禮を授けて居る。パウロは御水方（洗禮を授ける者）ではないから、洗禮の形式語を誦へることは出來なかつたが、然し其言ふ所によれば、子が生れると附近の御水方が呼ばれて來て、水を嬰兒の頭に澆ぎ、十字架の印をなし、之に名を附けて何

か知ら祈禱を唱へる、夫れで彼自身はパウロ、妻はウキルジニア(佐奈)、子息はトマス(藤吉)、息女はイザベリナ(ト佐久)と名を戴いて居る。主日と祝日を守り、唯今は四旬節を勤行めて居る。祈禱の中に屢々天主、聖母マリア、守護の天使、保護の聖人等の名を呼んで頼む様である。來週の木曜日には、外人の勝手に出入される家で(一本木の植木屋)御水方と引合せて呉れるとパウロは約束した。『彼家ならば田舎では小奇麗な構へで、外人がよく遣つて來て、植木を賞玩しますし、主人も幸ひ同志の信者で、ムいますから、徐々話が出来ませう』と曰ふから、考へて見れば成ほど私も昨年シラル、ヒウレの兩師と其家には往つたことがある。たゞ此が信者の宅とは夢にも知らなかつたのだ。夫れをパウロに語れば『へい私等も度々貴師様方を村でも見れば町でも見ましたけれども、靈父様でありなると言ふことは、漸く聖堂の建つてから分りました。唯今では實に嬉しうて堪りません、時としては聖堂に參詣して、祈禱もされまし、御話も承られますから』と、答へた。

「歸つて見れば、參觀者が信者未信者打混せて、聖堂の門前に詰めかけて居る、丸腰の役人も其中には見受けられた。横濱での如く、公然と説教でもする所を踏み込んで引捕へる考であらう。奉行も私が毎日語學校に出て、二時間づ、佛語を教授するのに極く満足の體ではあるが、然し日本人に向つて教を説くと見たら、迎も其儘では置くまい。でも唯今では多くの隠れ信者を有つて居るから、左様な迂濶な事を遣る必要がない。長崎から十二里ばかり隔つた所に、浦上ほどの人数はないが、擧つて信者ばかりの村があると云ふ話だ。内地へ踏み込んだら、未だ幾何の信者が見出せるかも知れぬ。今の場合、随分と困難もあり危険もあるが、思へば嬉しくて、心は躍り立つばかりである。」

「此文を書き終つた頃、イワンナ(ヨハンナ)と云ふ婦人が、息子のドミンゴと娘等を引連れて聖堂に這入り、役人が來ても構はずに『教の話を聴かして下さい』とローカニユ師に強請んで仕方がない。役人は宣教師が參觀者の側近く立つて居るのを見て、不平に思つたものか、右の婦人に向ひ、語氣荒々しく『オイコラツ貴様は此像を拜んで居る様ぢやが、是は何だ』と云へば、イワンナは忽ち吃驚した顔色を作つて『お役

人様、私の様な田舎婆に何うして左様な説明が出来ますか」と答へつゝ、キヨロくと目を廻して、未信者が物珍らしげに見物する體を見せて、巧にお茶を濁した。聖堂を出るやドミンゴと一緒に密に私の室に忍び入つた。役人から引捕はれては一大事と思ひ、婦人は靈父の居室に這入るべき者ではないと拵へて、イワンナは出したが、然しドミンゴを出して遣る口實がないので、己を得ず十字架を二個さし出して「一つはお母さんの爲ですよ」と云うて與へたら、喜ぶの喜ばないのではない。「天主様を愛しまする、御主ゼズ、様を愛しまする」と繰り返し繰り返し曰つて室を出ると、二人の役人が丁度通筋に張番して居る。私は思はず冷りとした。もう愈々捕はれた、何うしようど氣遣つて居ると、ドミンゴも十字架をシツカリ胸に推しつける様であつたが、主の御保護に頼て、案外役人は何とも云はずに通して呉れた。然し私の胸の動悸は未だ収まらぬ……あゝ主よ、我等に今少しの自由を與へて、我等の事業を成げしめ給へ。」

此事のあつた晩から三日間と云ふものは、信者も役人も全く見わなくなつたので、ブチジャン、ローカニユの兩師は心配で堪らない。是は何でもドミンゴが捕はれて、其爲に皆が怖れて來なくなつたのであらう、と憂慮の眉を擧めて居たが、然うでもなかつたものと見えて、二十六日の日曜日には復た大勢の觀客が出て來た。翌日ドミンゴ自身も、老父のロレンソを連れて參拜に來た。老父は聖堂内でローカニユ師に出遭つて、一の策を進めた。「宅は信者ばかりの中にあつて、而かも可なり掛け離れて居ますから、密に教を説くには屈竟の場所です。日の暮れ方に山の中までお來て戴きますれば、息子を迎へに遣りまして、態と迂廻して忍び入りましたら、人に氣附かれる憂も無いませんが、然うして戴くことは出来ませぬか」と。ローカニユ師も彼等の熱心には沁みど感心したが、其場は何とも返答すること出来なかつた。師等は横濱での失敗に懲りくして居たので、些細の不注意からして、如何なる椿事を惹起さんかも計られぬと思ひ、用心の上にも用心して、信者を發見したと云ふことは居留外人にも知らさない事にし、バリの傳道會本部に報告する時でも、是ばかりは極々秘密にして、新聞雜誌にも一切公表しない様、呉々も申送つた位であつた。

信者も宣教師等の勸告に従ひ、餘程用心深くなり、雨風の激しくて、人出の少いやうな時を見計らつて来るやうになつた。三月廿七日は霰まじりの雨が降つて、春ながら如何にも寒い天氣で、役人も此日ばかりは巡察を怠つて居る。時こそよけれど三人の信者が、暮方ローカニユ師の室に忍び入つた。然し小使に見られたから留める譯には行かぬ聖堂へ遣つて、ローカニユ師も後を追うて行つて見ると、彼等は聖母マリアの聖像を見て「善かサンタマリア様」と呼び、一心と尊敬の意を表して居る。平生如何な祈禱を誦へるか尋ねたら、一人は拉丁語の「アベマリア」を一人は「サルベレジナ」(元后)を終まで誦へた。ローカニユ師は彼等の間に聖母を崇敬する習慣が、絶えず傳はつて来て居るのを見て一方ならず喜んだ。

数日の後マリナ、イワンナ、カタリナの三婦人が朝早くから来て、ミサ聖祭に參與り、聖祭後、直にカタリナを聖堂の外に立たして見張をさせて置いて、年長のマリナと、幼兒を抱いて居たイワンナが衣裳室に入つて来た。プチジャン師は、彼等が毎日誦へて居る祈禱を言はせて書き取つて見ると、夫れは日本語の主禱文、天使祝詞、使徒信經、其他

一日中、毎時の様に誦へる短い祈禱文であつた。

三 植木屋の會見失敗に畢る。 サラ三月三十日には、一本木の植木屋で浦上の水方と會合する約束であつたから、プチジャン師等は夫れを樂に埃つて居たのである。浦上の信者等も植木屋ならば外國人が自由に出入りされるのだから、怪まれる憂もなく、徐くり話が出来ると思つたが、何分主人の孫一は、九年前に教の爲に捕はれて、一年間も牢住居をし、夫れが原因となつて、四年前から病床に臥つて居るので、直にオイソレと承諾しさうにもない、先づ聲の茂八を抱き込んで、主人に話をさせるが可からうと云ふもので、夫々手數をして見たら、案外孫一も二つ返事で承諾して呉れたから、其旨を天主堂に通じて来た。

そこでプチジャン師等は白晝公然と植木屋に乗込むと、孫一は俄に怖氣が出て来て、自分が斯うして寝付いて居るのも、全く此教の爲であるのに、ソんな大切な御方を何うして此處に這入らされるかと言つて謝絶つた。師等も己を得ず縁先に腰かけて、お茶を一杯飲んだばかりで、西山街道から金比羅山の裏手を通つて歸られた。